大学出版会）　◆全国市町村要覧、昭和50年版（自治省編）　◆『世界の歴史』（中央公論社）　◆『日本の歴史』（同）　◆『土地分類図〈佐賀県〉』（済企画庁総合開発局）その他。

第二章　美しいいのち

第一節　わが町の人々

町内には二十六の集落がある。このうち、第二次世界大戦前に出来た花ノ木と同戦後誕生した栄、大鳥を除いては、自分が住む集落でも、いつごろ出来たのか――と、知る人はほとんどいないだろう。

人間が狩猟、漁労の採集民であった時代は、獲物を追って移動していたから定住出来なかったが、縄文中後期ごろになると農民としての定住の必要性から、水の便利な、いくらか丘陵的なところを選んで、竪(たて)(縦)穴式住居を建て、集落をつくっていった。

玄海町に昔からある集落名

文字のない時代でも、人家が集まって生活していたその場所には、地名があったかもしれないが、玄海町では『有浦文書』に現われる以前の地名は今では知るよすがもない。『有浦文書』の佐志浄覚譲状案（正和二年＝一三一三）に「値賀村」の地名が、同じく佐志勤譲状案（康永元年＝一三四二）に「有浦今里村」「古力石村」「長田代村」「長倉村」「諸浦村」の地名が見えるので、これらの集落名は古い時代から存在していたことがわかる。とにかく、それぞれの集落にはそれなりに、古い時代からの歴史が刻まれてい

るわけで、その歴史は言葉（方言）、生活慣習にも独得なあるいは微妙な違いが出ていった。そこにはまた自分の歴史も染みついているといってよい。

一般的に、比較的に少数の戸数からなる地域集団を「部落」といってきたが、第二次世界大戦後は未解放部落と混同されやすいというので「集落」というようになった。

第一項　集落の歴史

さて、今日のわれわれの集落をつくった先人の歴史を振り返ってみよう。それはわれらにつながっている歴史でもあり、また美しい玄海町の大自然の中で育てられてきた生物としての「美しいいのち」の歴史でもある。

玄海町内にも旧石器時代人

日本では三十万年前ごろに人類が出現していたといわれている。これらの人類が大地に住みつき、先土器時代（旧石器時代）、縄文式文化時代、弥生式文化時代（西紀前三〇〇年から後三〇〇年ごろまで）へと考古学的の歴史をつなぎ、有史時代に入って、古代から現代までへと、悲喜こもごもを織り交ぜて人間の歴史を作ってきた。

玄海町地域も数万年前の太古の昔から、無人の山野ではなかった。平尾集落の敷田、小加倉の牟田、石田の花ノ木、有浦上の日の出松などからは、旧石器時代、縄文時代、弥生時代の遺物が発掘されているので、そのことがわかる。

古墳時代になっては、今村集落の先部、野田、普恩寺集落の古節木、門前などから遺物が発掘されているし、昭和五十八年十一月には、九州電力原子力発電所3・4号機用地内の三基の古墳（六世紀後期）から鉄刀、鉄鏃な

どが発掘され、小豪族が住んでいたことも実証された。

有史時代に入って

大和王朝と朝鮮半島との交渉が増えるにつれ外津、仮屋の良い入り江を持つわが町は、大和王朝勢力の良い基地になっていたかもしれない。百済白村江で日本軍大敗後は、一時的に平穏な期間もあったろうが、やがて武家政治の発生、蒙古軍来襲、南北朝争乱、倭寇活躍、戦国時代と時代が移るにつれ、恐らく地域の一般住民もその影響を受けたことだろう。町内には松浦党の一族であった値賀、有浦両氏が居を構えていたので、その支配下で生活を動かされていたかもしれない。

近世から現代まで

江戸時代になると唐津藩の領民として代々藩主の搾取、収奪にあえぎ、人間としての自由を束縛され、最低限の生活を余儀なくされていた。これは約二百七十年続き、そして明治、大正、昭和と時代相が大きく変化していった。

唐津初代藩主・寺沢広高は、いわゆる元和検地（元和二年＝一六一六）を実施したが、町内の総石高を四千三百九十一石七升と検出した。それまでの石高（古高という）に比べて五百四十四石余多く割り出した重税石高。有浦新田干拓（二八町歩）、普恩寺新田干拓（一五町歩）その他の過酷な労働も強要された。「百姓難渋の時来り、免（税）、石盛り高く、段米（臨時の税米）莫大に進み、日本国中類例これ無き程の由…故に波多家（岸岳城主）仕来りの旧恩を語りつぎ、文禄の世変（秀吉による波多家の滅亡）を残念に思わざるなし」（『松浦記集成』）と領民は波多領時代を懐かしんだ。寺沢から大久保、松平、土井、水野、小笠原へと代々の唐津藩時代を経て明治の廃藩時になるまでに、町内の総石高は五千四百九十六石余に増大した。それだけ重税に苦しんできたといってよい。（別表の唐津藩時代別村高表参照）

またイナゴの害（享保年間＝一七一六～）、豪雨洪水（延享三年＝一七四六）、大干ばつ（宝暦一二～一三＝一七六一～六

別表１－１　　**唐津藩時代別村高表**（玄海町関係）

（続く）→

集落名	古高	寺沢広高時代 元和検地 (1616)	寺沢堅高時代 寛永7年改帳 (1630)	正保国絵図 (1647)		大久保忠職時代 明暦2年石高帳 (1656)
値賀川内村	石斗升合 193.295	石斗升合 217.430	石斗升合 217.430	石 194.余	（今村組）	石斗升合 値加河内村217.430
今村	値賀村581.445	値賀村653.920	今村653.920	561.余		値賀村653.920
外津浦						
普恩寺村	324.314	364.810	364.810	294.余		379.294
向島				30.余		
平尾村	165.523	186.190	186.190	165.余		186.190
浜野浦村	157.069	176.680	176.680	157.余		176.680
大薗村	122.269	129.180	129.180	122.余		129.180
仮屋村	75.606	狩屋村79.880	借屋村79.880	75.余		狩屋村79.880
石田村	162.145	171.310	171.310.	162.余		171.310
小加倉村	124.700	小賀倉村171.970	171.970	124.余		171.970
有浦上村	601.678	635.180	635.160	有浦村 948.余	（有浦組）	635.160
有浦下村	346.324	366.350	366.350			366.350
諸浦村	235.366	248.670	419.424	235.余		424.928
新田村		うち新田増＝元和9年検地増 170.754				
長倉村	288.522	304.830	304.830	288.余		304.830
轟木村	98.758	114.420	114.420	58.余		114.420
牟形村	142.975	150.000	150.000	141.余		150.000
大串新田						
座川内村	37.657	座河内村96.110	座川内村100.010	(ママ)805.余	（切木組）	100.480
湯野尾村	59.577	71.650	71.650	59.余		72.397
田代村	87.870	171.110	171.110	149.余	（馬部組）	171.110
藤平村	41.791	81.380	81.380	41.余		藤野平村81.380
合計	3,846.884	4,391.070	4,565.724	3,803.余 805.余(ママ)		4,586.929

別表１－２　　**唐津藩時代別村高表**（玄海町関係）

延宝7年石高 (1679)	松平、土井引き継ぎ高帳 元禄4年(1691)	土井周防守利益代　御内高 (1691～1713)	土井大炊守代村高帳(利里代か) (1745～62)	土井、水野御高帳引渡　宝暦13年 (1763)	文化年中 唐津領惣寄高 (1804～18)
石斗升合 218.余	石斗升合 193.296 (小物成)米5.677	石斗升合 値河内村218.892	石斗升合 218.892	石斗升合 193.295 (新田)1.075	石斗升合 218.892
660余	値賀村568.662 (小物成)14.961	今村660.480	661.138	値賀村568.662 (新田)16.331	今村661.138
	20.000 (小物成)2.830			20.000	
382.余	315.730 (小物成)7.620	382.124	386.224	315.730 (新田)6.760	381.824
	30.000 (小物成)784		30.000	むく島30.000 (新田)25.600(ママ)	
188.余	165.523 (小物成)5.096	188.435	188.435	165.523 (新田)719	188.435
177.余	浜浦村157.069 (小物成)4.310	浜浦村177.419	177.741	157.069 (新田)5.972	177.741
128.余	122.269 (小物成)2.777	130.136	130.136	122.269 (新田)2.838	大園村130.136
80.余	狩屋村75.606 (小物成)1.556	80.078	81.324	狩屋村75.606 (新田)3.075	81.324
171.余	162.145 (小物成)3.915	171.726	171.726	162.145 (新田)1.682	171.726
174.余	124.400 (小物成)4.282	174.004	174.004	小賀倉村124.400 (新田)1.169	174.004
638.余	948.002 (小物成)22.681	638.724	638.724	948.002 (新田)9.040	638.724
367.余		(ママ) 有浦村367.793	367.793		367.793
248.余	273.884 (小物成)7.403	248.894	248.894	273.884 (新田)4.519	248.894
		214.552	214.552	214.552 —	214.552
307.余	288.522 (小物成)4.613	307.963	307.963	288.522 (新田)2.355	307.963
115.余	(ママ)58.758 (小物成)2.542	115.980	115.980	(ママ)58.758 (新田)3.625	115.980
151.余	155.132 (小物成)3.206	151.806	163.157	155.132 (新田)106.275	163.157
					104.313
102.余	91.432 (小物成)2.382	102.256	102.256	座河内村91.434 (新田)913	座川内村102.256
72.余	59.577 (小物成)1.611	72.397	74.850	59.577 (新田)3.199	74.850
173.余	87.870 (小物成)3.908	173.413	173.473	87.870 (新田)479	173.413
83.余	41.791 (小物成)1.930	83.624	83.624	41.791 (新田)224	83.624
4,434.余	3,939.666 (小物成)104.084	4,690.750	4,710.886	4,154.221 (新田)195.850	4,780.739

別表１－３　**唐津藩時代別村高表**（玄海町関係）

（続く）→

集落名	文政元年石高帳(1818)	天保郷帳天保2年(1834)	小笠原御領高(1815～69)	旧高旧帳明治3年(1870)
値賀川内村	石斗升合 218.892 (新田)4.274	石斗升合 値加河内村223.251	石斗升合 218.890 (新田)4.340	石斗升合 223.251
今村	値賀村661.138 (新田)102.186	763.414	今村値賀661.340 (新田)110.190	今村767.970
外津浦				
普恩寺村	381.824 (新田)36.668	418.492	381.820 (新田)36.670	418.492
向島	むく島4.400 (新田)25.693(ママ)		向島4.400 (新田)25.690(ママ)	向島30.093
平尾村	188.435 (新田)14.591	203.026	188.430 (新田)14.590	203.026
浜野浦村	177.741 (新田)20.437	198.178	浜野浦177.740 (新田)20.440	207.168
大薗村	130.136 (新田)28.561	158.697	130.140 (新田)28.560	159.440
仮屋村	81.324 (新田)21.647	103.443	仮屋81.120 (新田)21.650	111.587
石田村	171.726 (新田)82.820	254.546	171.730 (新田)82.280	256.778
小加倉村	174.004 (新田)5.314	小賀倉村179.318	小加倉174.000 (新田)5.310	179.318
有浦上村	638.724 (新田)43.144	有浦村 1,062.206	638.720 (新田)43.140	687.268
有浦下村	367.793 (新田)12.545		367.790 (新田)12.550	381.035
諸浦村	248.894 (新田)19.892	270.393	248.890 (新田)19.890	273.026
新田村	諸浦村之内214.552 (新田)15.228	229.920	214.550 (新田)15.230	229.920
長倉村	307.963 (新田)30.088	338.204	307.960 (新田)30.090	338.249
轟木村	115.980 (新田)39.352	156.377	115.980 (新田)39.940	159.418
牟形村	163.157 (新田)90.908	256.503	163.160 (新田)90.910	278.437
大串新田	牟形村之内104.313	117.965	104.310	104.313
座川内村	102.256 (新田)5.710	108.504	102.260 (新田)5.710	110.106
湯野尾村	74.850 (新田)7.555	84.793	74.850 (新田)7.560	95.891
田代村	173.413 (新田)6.596	180.009	173.410 (新田)6.600	187.363
藤平村	83.624 (新田)4.668	89.137	83.630 (新田)4.670	94.266
合計	4,785.139 (新田)616.967	5,396.376	4,785.120 (新田)626.010	5,496.415

別表１－４　**唐津藩時代別村高表**（玄海町関係）

備考
(1) 古高は元和検地以前のもの。(『松浦拾風土記』)
(2) 元和検地は寺沢広高実施のもの。(元和2年9月23日、各村へ渡した水帳高)。(『松尾文書』)
(3) 寛永改帳は寺沢堅高時代の寛永７年11月11日の石高帳。(『松尾文書』)
(4) 正保国絵図は、江戸幕府が正保元年(1644)12月、諸大名に命じて作らせた地図で、正保4年の肥前一国絵図。これに記載の石高数。(『佐賀県地名大辞典』)
(5) 明暦２年石高帳は、明暦２年７月石高。(『松尾文書』)
(6) 延宝７年石高は『佐賀県地名大辞典』による。
(7) 松井、土井藩引き継ぎ高帳は、元禄４年５月６日、松平侯から土井侯へ引き渡し郷村高帳。(『松尾文書』)
(8) 土井周防守利益代御内高は『松尾文書』による。
(9) 土井大炊守代村高帳は『松尾文書』による。
(10) 土井、水野御高帳引き渡しは宝暦13年５月引き継ぎ村高帳。(『松尾文書』)
(11) 唐津領惣寄高は『松浦拾風土記』による。
(12) 文政元年石高帳は、文政元年６月、水野、小笠原引き継ぎ石高帳。(『松尾文書』)
(13) 天保郷帳は、天保２年11月、幕府が勘定奉行に命じて調製させた石高帳。
(14) 小笠原御領高は『村松文書』による。
(15) 旧高旧帳は、明治3年5月、各府藩県の石高を上申記録した石高。(『旧高旧領取調帳』)
(16) 唐津領内組発生は寛永12年（1635）から。
(17) 座川内村の寛永７年改帳高は、元和検地高に留関(堰)高３石９斗を加えたもの。元和２年から寛永７年までの間に、座川井堰が造られた。
(18) 外津浦は値賀村(今村)の内としてあり、元禄４年高帳と宝暦13年引渡帳だけに分記してある。
(19) 向島は普恩寺村に属し、江戸中期に独立村として現れ、明治22年(1889)入野村大字となった。
(20) 記載石高は資料文献作製の折、原本転記の誤記があったと推測され、計数的に不符合のところもある。

表２－１　戸数人数など調べ

（続く）→

年代区分	文化年中（1804～18）『松浦拾風土記』								
家数など／集落名	家数	人数			家畜数		漁業		鉄砲
		男	女	計	馬	牛	船数	諸網	
値賀川内村	56	141	116	257	11	31			威鉄砲 1
今村	値賀村 168				33	69			威鉄砲 1
内（外津浦）	109	(ママ) 262	(ママ) 215	(ママ) 477	—	18	65	7	
普恩寺村	77	187	154	341	12	46			
内（向島）	むく島 19	58	48	106	—	—	11	8	
平尾村	47	128	98	218	10	28			
浜野浦村	42	102	83	185	14	30			
大薗村	36	(ママ) 95	(ママ) 79	(ママ) 175	4	28			
仮屋村	145	329	271	600	—	24	104	31	
石田村	44	117	97	214	9	33			
小加倉村	小賀倉村 25	67	55	122	6	14			
有浦上村	51	153	130	283	22	36			猟師鉄砲 1
有浦下村	43	117	82	199	22	30			猟師鉄砲 1
諸浦村	35	126	99	225	7	34	天当船 3		猟師鉄砲 1
新田村	17	45	36	81	—	15	天当 1		
長倉村	37	93	73	166	5	20			
轟木村	30	76	63	139	11	18			猟師鉄砲 1
牟形村	27	?	?	?	5	12	天当 1		
大串新田	1	1	3	4	2	1	船 1		鉄砲 1
座川内村	座河内村 19	54	43	97	4	16			
湯野尾村	9	30	28	58	2	8			
田代村	25	(ママ) 57	(ママ) 47	(ママ) 99	12	20			
藤平村	11	29	20	49	2	12			1
合計	964	2,267	1,840	4,095	193	543	186	46	8

備考(1)　ママ表示は間違いかとも思われる数字で、原本史料に記載のまま
(2)　？表示は原本資料に記入洩れの分。
(3)　外津浦の人数は今村の記載間違いか。

表２－２　戸数人数など調べ

正保５年（1648）		嘉永年中（1848～1854）			明治３年（1870）	明治11年(1878) 戸口帳		明治21年(1888) 『県統計書』		
漁業		人数	うち		家数	戸数	人口	漁家数	人口	漁船数
戸数	人数		農業	漁業						
					59	59	239			
					154	137	630			
15	18	393	203	190	今村のうち	今村のうち	今村のうち	60	うち 248 (専業67)	86
					82	73	325	27	101 (農業)	27
					19	22	145	明治22年から入野村となる		
					46	45	210	6	17 (農漁業)	6
					40	33	151	8	31 (農漁業)	8
					35	36	158			
56	90	592	302	290	151	145	619	102	うち 410 (専業30)	89
					?	52	224			
					26	32	142			
					54	75	346			
					41	50	197			
					46	69	284			
					16	22	82	3	10	3
					36	49	203			
文政５年（1834）					33	40	174			
人員		家畜数			29	47	204			
戸数	人員	馬	牛		1	3	15			
21	89（男50 女39）	9	20		21	34	161			
12	59（男34 女25）	7	10		?	20	90			
					23	27	140			
					13	13	57			
					925	1,083	4,796			

を記した。

二、明和元年＝一七六四）、明和三年の水害、同五年の干害、同七年の大水害、同八年の凶作というように天災が続き農民は泣いた。そしてこの明和八年、力弱い農民は「虹ノ松原一揆」で藩政に抵抗した。

生活苦のために流浪人となったり、赤子間引きも行われていた。労働に弱い女児がその対象になっていたのか。江戸期も末期に近い文化年間（一八〇四～）の男女別人数（別表、戸数人数調べ）では、町内全部で男二、二六七人に対し女一、八四〇人で、女が四二七人も少なかった。ちなみに昭和六十年（一九八五）十月の町内人口は男三、七八八人、女三、八三五人で、女が四七人多くなっている。とにかく旧藩時代の農民は「生かさず殺さず」の哀れな藩行政の対象でしかなかった。（別表〝戸数人数など調べ〟参照）

村民の総代という性格もあった村々の庄屋は、藩行政の執行人としての官僚的性格もあわせ持っていた。家格を守り栄転を願うためには、藩行政に迎合する態度さえあった。文政元年（一八一八）十二月、農民は和多田の大土井に集まり、庄屋に対する不満を訴えようとした（大土井一揆）。なかでも上場の農民は、唐津商人の横暴と派手な生活をにくみ、商家打ち壊しをしようとさえした。

大政奉還、明治の新時代となり、藩政の重圧から免れることは出来たが、今度は国民皆兵の徴兵制が施行され、それまで軍に関係なかった一般農漁民も兵として徴集され、日清、日露、第一、二次の世界大戦へと、どの集落からも出征、多くの戦死者を出し、泣く家族が多かった。

また用水不足に苦しむ農作業。数多くのため池を造った不屈の努力。忍従と過酷な生活。それらに耐え忍んで、その集落に住みついたわれわれ先祖の姿でもあった。

しかしいっぽう、岸岳末孫のたたりを恐れ、庚申、初午、大師巡礼、山の神、田の神祭りなどの民俗信仰に心の安らぎを求め、煤取り雑炊、歳木節句、臼休み様、正月の弓祭りなどの素朴な民俗行事に、ひと時の楽しみと

喜びを求めてきていた。これらは今にも伝えられていて、集落の特色ともなっている。

第二次世界大戦後の高度成長と、それに対応した農業基本法農政の登場で、農村にも消費ブーム、機械化ブームの波が押し寄せ、農村は大きくさま変わりしていった。そのため重要な動力だった農作業用の牛馬の姿が、ほとんど見られなくなった。

藩政時代も人力を補うため牛馬が多数飼育されていた。牛馬を持たない小農家は、人が牛馬の代わりをしていた。

別表、文化年間（一八〇四～一八）の家畜数を見ると町内全部で、馬一九三頭、牛が五四三頭を数える。今村が一番多く馬三三頭、牛六九頭。合計数でみると普恩寺、有浦上村がこれに次ぎ、有浦下村、浜野浦、値賀川内村へと続く。これら地区にはわりに大きい農家があったことがわかるが、牛馬の数は大体農家戸数に比例していたようだ。牛馬の排せつ物は、重要な肥料であった。田代村の山伏（田代やんぼし）が牛糞を大事に拾っていた民話が残っている。

第二項　集落の名字

日本人は皆名字（以前は苗字と書いた）を持つ。江戸時代には平民は名字を持てなかった。金の力で苗字、あるいは帯刀も許された平民もいたが。明治三年（一八七〇）、明治政府は平民に名字を名乗ることを許したが、避ける者がいたので、同八年二月十三日、太政官布告で「平民は苗字をつけるべし」と、強制的に名字をつけさせた。

集落に住む人の名字（別表、集落別名字数参照）をみると集落で最も多い名字が、かつてはその集落形成の主な

存在だったようだ。さらに集落内で分家を繰り返し、他集落からも家分かれしてきて、その集落を形成してきた様子がわかる。

多い名字からの集落順

町内の合計数（昭和六二年六月一日現在）で町内で一番多いのが山口姓（一一四戸）。石田集落が一番多く（二四戸）、小加倉（一六戸）、大薗（一二戸）、有浦上（一一戸）と広がっている。町内二十六集落中四集落で最多の名字。ちなみに山口姓は県内でも一位（昭和六一年三月、第一生命調査）、全国で十六位と多く、もともと山岳の多い島国日本の山、森林への入り口（水神を祭る所）に居を持つ庶民が、地形から選んだ名字という。藩政末期の安政四年（一八五七）、仮屋にいた商人山口源三郎（大庄屋格席）は、小笠原藩へ二十両、同じく山口勘介が十五両寄付している。

町内二番目に多いのが中山姓（八七戸）。これも五集落で最も多く、七地区に広がる。轟木（二七戸）、平尾（一三戸）、有浦上（一三戸）座川内（九戸）、下宮（七戸）などの順。轟木は代々中山庄屋家の世襲地であった関係でか、明治八年の苗字必称の折、中山庄屋家の姓を借用したものか。平尾集落も庄屋は世襲の中山姓であったので同様か。この例は各地に多い。有浦上、座川内、下宮は前記庄屋姓借用の系統か、他からも転入してきた名字とみてよさそう。

三番目の松本姓（七二戸）は浜野浦集落（一五戸）、仮立（一三戸）、平尾（七戸）、普恩寺（六戸）地区と続く。この名字は浜野浦に祭る大歳神社創始の松本良徹にちなんで、名乗られた名字だろう。松本庄屋家もあった。同集落で二番目に多い吉田名字も、この説話によるといえる。藩政末期、小笠原藩へ十両寄付した吉田民作という人がいた。

町内順位で四位が西姓（六一戸）。西姓は一集落内で最多の名字としては一番多く、仮屋（五六戸）に集中。他集

落のはここからの分家。

五位が渡辺名字（四八戸）。外津（二三戸）、有浦上（一二戸）、新田（七戸）と続く。古代は渡船を業とした部民だったという。平安時代の源頼光四天王の一人、渡辺綱にまつわる姓として広がり、全国で五位に多い名字。くしくも町内と全国が同順位の数。松浦地域では、松浦党にまつわる子孫に多いという。

六位の寺田名字（四七戸）は牟形に集中。一集落中の最多名字としては、仮屋の西姓に次ぐ二番目。同集落六十四世帯の六四％を占め、比率では町内一の存在。松浦党佐志寺田氏の系を引く者がこの姓を名乗り、多くがこれにならったか。有浦上村の初代、二代惣庄屋だった寺田氏の系もいて、同姓を名乗ったかとも思われる。安政四年（一八五七）、寺田吉兵衛という人がいて、小笠原藩に政治資金として十両寄付している。

七位が中島姓（四四戸）で、うち二十四世帯が仮屋に存在。藩政時代、神官職だった中島氏の名字が広がったものか。仮屋に次いで藤平（七戸）、長倉（三戸）に存在。ともに神職系の名字、あるいは分家であろう。県内順位で中島姓は五位、全国では四十五位に位置している。

八位の宮崎姓（四三戸）は諸浦（一二戸）、新田（九戸）、牟形（九戸）、有浦上（八戸）と続く。肥前町星賀八幡、町内牟形の若宮八幡、諸浦の有浦八幡（若宮八幡）、佐志八幡社への勧請にまつわる神職系の名字として多い。前記の寺田姓とともに、宗教に関係ある地名、姓名として発生した。

なお諸浦には宮崎吉蔵（大正二年十一月死去）という事業家がいた。二十六歳で県議、有浦電気、酒造、炭鉱、捕鯨、銀行などを創業した。また藩政時代末期、小笠原藩に対し、御手伝い金（寄付金）名目で百両、御借り入れ金（強制借用）名目で二百両出している川添治兵衛という商人もいた。

九位は池田姓（三九戸）。普恩寺地区（二九戸）に集中。県内では六位、全国では二十三位。普恩寺地域に池田と

いう小字名がある。農業の水利に関する地名が姓名に利用されたか。

十位は古舘姓（三六戸）。普恩寺地区（一六戸）、値賀川内（一四戸）と町北部地域に多い。遠い祖先は鎮西町名護屋の領主だった名古屋氏の代々家老職だった古館氏の子孫が広がったものと考えられる。唐津市、肥前町などにある古館姓もほぼ同系。名護屋地区には〝古館〟という小字名がある。町内ではこの名字に俗字の「舘」を使ってある。明治戸籍記載時に安易に考えて、この俗字を書いたのであろうか。

十一位の小野姓（三四戸）は中通（一六戸）、仮立（一二戸）と隣接集落に集まり、十二位の青木姓（三三戸）は有浦下（二六戸）に、同位の前川姓（三三戸）も諸浦（二〇戸）と有浦下（六戸）、新田の隣接集落に、十三位の小山姓（三〇戸）も諸浦（一八戸）と仮立（八戸）に、十四位の徳永姓（二九戸）は値賀川内（二三戸）集落に、広く他集落へは広がっていない。いたとしても一、二世帯程度。同位の吉田姓（二九戸）は前記したが浜野浦（一五戸）と隣接の大薗集落（八戸）に多い。

徳永姓は秀吉の朝鮮出兵の折、名護屋城築造の石工総監督をした徳永九郎左衛門が値賀川内に住みつき、その系が増えたもの。値賀川内は唐津石工の発祥の地であり、名工も出て、昭和中期ごろまでは、県内でも有数の石工の集落であった。

十五位には中里姓（二六戸）が外津（二一戸）と仮立（二戸）に、山崎姓（二六戸）これも外津（一七戸）と藤平（五戸）などに集まっている。

十六位の岩下姓（二五戸）は仮屋集落二百三十一世帯（昭和六二年六月一日現在）中に二三戸、前述の西、中島と合わせて四四・六％を占めており、同集落の三大名字になっている。

五位以内の名字

このほかに一集落五位以内にある名字としては外津の野崎姓（一七戸）、座川内の平山姓（一五戸）、外津の上田姓（一三戸）、値賀川内の谷丸姓（一二戸）、小加倉の平田姓（一〇戸）、平尾の菅原姓（九戸）、新田の鬼木姓（八戸）、長倉の越路姓（七戸）などがあり、他にあるとしてもこのごろの分家で数はわずか。五位の中には入っていない。

平山姓は平家の関係と伝え、菅原姓は公家関係の系か。越路姓は新潟、石川県に多い（地名がある）名字だが県内では珍しく、鬼木姓は小加倉や隣接の鎮西町名護屋野元分に小字名があるのでこれから出た名字か。さらに八島姓は宮崎、中島姓とともに神職系の名字として他市町村にもある。

藤浦姓は他所にも時にはあるが、藤浦の地名は全国的になく、珍しい名字の一つ。木場姓は値賀川内、座川内地区に小字名はあるが石田地区にはないので、石田の木場姓は先祖が他から転住してきたものか。第二次世界大戦後出来た栄集落の木場姓は、石田からの転住者であろう。木場姓は九州の西部、南部、奄美大島には特に多い名字という。

末武姓（一五戸）は長倉（一〇戸）にかたまり、肥前町その他にもあるが、これも珍らしい名字の一つ。町内では仮屋だけにある網代姓（三世帯）は漁業の関係から出来た名字、地名としても全国的にあり、海に面した町村に多い。

本町内でも少ない名字のうちに入る日高姓の遠祖は、もともと和歌山県日高から壱岐に入り、国主となったと伝える（『平戸藩史考』）。その系の日高入道宗任が永享年間（一四二九～四一）有浦下村に居住、現在の東光寺の本尊仏薬師如来を念持仏として小庵を建て祭ったが、その三代目喜左衛門は寺沢広高の代に同村の惣庄屋に取り立てられ、子孫は代々庄屋職であった。有浦下、長倉の日高名字はこの庄屋系の姓。松浦地域の日高姓はみな、この壱岐・日高氏に関係あるという。日高の地名は全国的にも多い。従って日高姓は多い。

現在の常楽寺の開基にかかわりの深い寺田氏、また念持仏が本尊となった東光寺にまつわる日高氏、一方は有浦上村、一方は有浦下村の惣庄屋系であった。

藤平集落にだけ一軒ある力石姓は、有浦上の小字力石（ちからいし）から祖先が庄屋として転住していった名字。同集落の藤田姓は一般的に多い姓だが、ここでは力石庄屋が管轄地だった藤平と隣接の田代の集落名の上だけ取ってつけた庄屋名字と伝え、名字発生説話としては珍らしい例の一つ。

多い転入者の名字

なお町内名字のうち、町外から転住してきたと思える名字が大変多く、殊に漁村の外津、仮屋は、他町村の漁村同様に、明治から大正、昭和にかけて移住してきた漁民が多いと思われ、人口が増加し、漁業振興に大変力になった。

また諸浦、新田集落は町内で最も街並み形成が進むように、転入者も多く、新田は町内で二番目、諸浦は四番目というように名字数が多い。さらに近年は原子力発電所建設の結果、殊に外津地区には転入者が多く、名字数は新田（八九姓）仮屋（七〇姓）、諸浦（六九姓）を断然抜いて百六十三姓。このうち一軒だけの名字が百三十五もあり、産業開発による人口増加の歴史の流れを示している。

とにかく名字は、明治八年の苗字（みょうじ）必称のとき、先祖ゆかりの姓を名乗るか、庄屋、神職、僧職などの姓にあやかるか、地名、職業などを姓にしたか、いずれにしても家の歴史を語り、集落の一面も語っているといってよい。

集落別名字数（あいうえお順、○囲いは主な姓）（昭和62年6月1日調べ）

小加倉	
浅田	1
鬼木	2
鎌田	1
瀬戸	④
千布	1
鳥越	1
中村	③
平田	⑩
平野	1
松本	1
迎井	⑥
山口	⑯

有浦下			
青木	㉖	荒川	④
鶴田	1	常盤	③
宮崎	1	八島	1
吉富	1	徳永	1
渡辺	1	仲秋	1
中川	2	日高	2
平田	1	福井	2
山口	⑨	藤井	2
前川	⑥	前川	⑥
中山	5	長嶋	1
谷崎	1	谷丸	1
先村	1	佐々木	1
金嶽	1	加茂	1
上野	1	大石	1
青木	4	有馬	1
森元	1	山口	⑨
藤瀬	1	古川	1
中島	2	中野	1
谷口	1	谷丸	1
坂元	1	坂本	2
小野	1	川島	1
青木	1	池田	1
山口	2	吉岡	1
坂本	1	佐々木	1
石井	1	伊藤	2
中島	3	中山	⑬
池田	4	稲葉	1
有浦上			
浅田	1	鬼木	2
鎌田	1	瀬戸	④
千布	1	鳥越	1
中村	③	平田	⑩
平野	1	松本	1
小加倉			

長倉			
石井	1	伊藤	2
坂本	1	佐々木	1
山口	2	吉岡	1
青木	1	池田	1
諸浦			
小野	1	川島	1
坂元	1	坂本	2
谷口	1	谷丸	1
中島	2	中野	1
藤瀬	1	古川	1
森元	1	山口	⑨
青木	4	有馬	1
上野	1	大石	1
金嶽	1	加茂	1
先村	1	佐々木	1
谷崎	1	谷丸	1
中山	5	長嶋	1
新田			
鶴田	1	常盤	③
宮崎	1	八島	1
吉富	1	徳永	1
渡辺	1	仲秋	1
中川	2	日高	2
平田	1	福井	2
山口	⑨	藤井	2
前川	⑥	前川	⑥
中山	5	長嶋	1
谷崎	1	谷丸	1
先村	1	佐々木	1
金嶽	1	加茂	1
上野	1	大石	1
青木	4	有馬	1
森元	1	山口	⑨
藤瀬	1	古川	1
中島	2	中野	1
谷口	1	谷丸	1
坂元	1	坂本	2
小野	1	川島	1
青木	1	池田	1
山口	2	吉岡	1
坂本	1	佐々木	1
石井	1	伊藤	2
中島	3	中山	⑬
池田	4	稲葉	1
有浦上			
鶴田	1	常盤	③
宮崎	1	八島	1
吉富	1	徳永	1
渡辺	1	仲秋	1
中川	2	日高	2
平田	1	福井	2
山口	⑨	藤井	2
前川	⑥	前川	⑥
中山	5	長嶋	1
谷崎	1	谷丸	1
先村	1	佐々木	1
金嶽	1	加茂	1
上野	1	大石	1
青木	4	有馬	1
森元	1	山口	⑨
藤瀬	1	古川	1
中島	2	中野	1
谷口	1	谷丸	1
坂元	1	坂本	2
小野	1	川島	1
青木	1	池田	1
山口	2	吉岡	1
坂本	1	佐々木	1
石井	1	伊藤	2
中島	3	中山	⑬
池田	4	稲葉	1

地区										
	藤山 1	藤原 1	船岡 1	古舘 1	前川 4	前田 2	牧野 1	正木 1	松藤 1	松本 3
	丸山 1	宮崎 ⑨	宮原 1	元山 1	八島 1	山口 ⑧	山崎 1	山下 5	山添 1	山田 1
	山本 1	横山 1	吉原 1	吉村 1	與田 1	脇山 1	渡辺 ⑦	和田倉 6	平山 1	
牟形	井上 1	笠丸 1	清水 1	竹下 ④	寺田 ㊶	中山 1	林田 2	光武 1	宮崎 ⑨	宮本 1
	脇山 1	渡辺 1								
轟木	岡本 ⑥	末武 1	中山 ㉗							
大鳥	市丸 1	狩又 1	立松 1	中山 2	峯 1	村上 1	吉田 1	與田 1		
座川内	石橋 1	川島 1	堺 1	坂本 1	實方 1	田口 ④	徳田 1	中村 2	中山 ⑨	永井 1
	西 1	平松 1	平山 ⑮	藤浦 ⑥	古川 1	松本 1				
湯野尾	大浦 3	坂本 ⑩	中川 ⑦	平野 1	堀田 3	松本 3	溝江 2			
田代	岡本 ⑤	片山 1	坂口 1	清水 1	下平 1	中山 1	山口 ⑧			
藤平	力石 1	中島 ⑦	藤田 1	山崎 ⑤						
値賀川内	池田 1	石井 1	小野 1	金氏 1	谷丸 ⑫	徳永 ㉓	古舘 ⑭	松尾 2	山口 1	
仮立	池田 1	小野 ⑫	片山 ⑥	川内 1	熊本 1	小松 1	小山 ⑧	菅原 1	手島 1	中里 2
	中本 1	乗富 1	松本 ⑬	村中 1	村元 2	山口 2	山下 1			
中通	石本 ④	井上 2	上田 1	小野 ⑯	谷口 1	谷丸 3	鶴田 ⑩	寺田 1	徳永 1	藤田 1
	堀田 2	松本 3	峰 1	八島 ⑦	山下 2					
下宮	青木 2	井口 2	小野 2	片山 2	金谷 1	小出 1	小西 ⑥	小山 1	坂本 1	嶋村 1
	鶴田 3	中里 1	中山 ⑦	西川 ④	波多 1	樋口 2	前川 2	前田 ④	松本 3	宮城 1
	渡辺 1									

地区										
外津	秋元 1	浅尾 1	浅野 1	井川 1	石橋 1	井手 1	井上 2	猪口 1	今泉 1	岩崎 1
	岩田 1	上田 ⑬	植田 1	内門 1	内田 1	梅崎 1	浦田 1	江口 1	江藤 1	円城寺 1
	大川内 2	大久保 1	大津 1	大原 5	岡 1	岡崎 1	岡田 1	岡部 2	小潟 1	尾崎 4
	小田 1	小野 1	柿山 1	笠原 1	金色 1	金子 2	加納 3	椛島 1	上枡 1	蒲地 1
	川上 1	川北 1	川崎 3	川端 1	河津 1	北村 1	木村 1	草場 1	久保 1	倉原 1
	倉元 1	黒田 1	小出 1	古賀 2	木庭 1	小松 1	小森田 1	後藤 1	齊藤 1	坂口 1
	坂村 1	坂本 1	佐藤 2	猿渡 1	澤田 1	財前 1	財津 1	敷田 2	柴田 1	小豆 5
	白石 1	白倉 1	杉山 1	鈴木 1	須藤 1	園田 1	高尾野 1	高木 1	高岸 1	高橋 1
	竹川 1	竹下 1	竹原 1	武末 1	田島 1	立花 1	田中 1	谷口 1	伊達 1	千々岩 1
	辻 1	堤 1	天神 1	友廣 1	豊増 1	鳥越 1	鳥丸 1	中里 ㉑	中塩屋 1	中島 1
	中田 1	中野 2	中牟田 1	中村 2	楢畑 1	新村 1	西田 3	野崎 ⑰	野田 2	野中 3
	乗田 1	萩原 1	橋本 1	波多 1	濱池 1	浜崎 1	早原 1	檜枝 1	東 2	日野 1
	姫野 1	百武 1	平井 1	平田 1	平野 1	平山 1	福原 1	福山 1	藤井 1	藤川 1
	藤野 1	藤原 1	古舘 4	本多 1	本田 1	牧 1	牧原 1	松尾 2	松永 1	松藤 1
	松本 4	丸山 1	宮原 1	宮久 1	宮部 1	美山 1	森川 1	八島 1	柳川 1	矢野 1
	山内 1	山口 ⑪	山崎 ⑰	山下 1	山谷 1	山戸 1	山本 1	山領 1	湯浅 2	吉田 1
	力久 1	脇山 1	渡辺 ㉓							
普恩寺	井尾 1	池田 ㉙	伊藤 1	岩下 1	上原 1	内山 1	片山 1	金子 1	川内 1	坂口 1
	坂本 1	関口 1	中山 1	古市 1	古田 3	古舘 ⑯	松尾 ④	松本 ⑥	宮崎 2	村中 1
	山下 3	湯尾 2								
平尾	今村 1	川内 1	敷田 3	菅原 ⑨	中里 1	中山 ⑬	長井 1	船越 1	堀田 1	松本 ⑦

地区										
	八島 2	吉田 1								
浜野浦	新 1	熊本 1	杉谷 1	牧原 2	松本 ⑮	山田 1	吉田 ⑮	渡辺 1		
大薗	井上 1	中山 1	古川 1	前田 ⑩	増本 1	丸山 ⑤	八島 1	山口 ⑫	吉田 ⑧	吉村 1
石田	池田 1	石丸 1	井上 2	大草 ⑦	岡崎 1	草場 ⑥	木場 ④	下川 1	中島 1	中山 1
	松本 1	山口 ㉔								
花の木	石丸 2	加藤 1	木場 1	小山 1	菅原 1	松本 2	八島 ⑤	山口 1		
仮屋	網代 3	荒兼 1	池田 1	石崎 1	石丸 1	伊藤 1	井上 3	井本 1	岩下 ㉓	岩本 1
	牛草 1	歌丸 1	大木 1	甲斐野 1	海原 1	片波 1	片山 4	加藤 1	川口 1	久保 5
	倉本 1	黒川 1	齊藤 2	坂田 1	佐々木 2	重松 1	篠原 1	柴田 1	清水 2	杉山 1
	瀬戸 5	武谷 2	多田 1	立山 1	徳永 1	戸部田 1	友田 1	中島 ㉔	中西 1	中野 1
	中村 2	中山 3	西 (56)	野添 1	箱崎 1	長谷川 5	波多 1	花田 2	早田 1	樋口 1
	姫野 1	藤末 1	藤本 1	二木 1	古橋 1	本田 1	槙原 1	牧元 1	松浦 1	松尾 2
	松田 4	松本 6	溝添 6	峰 1	宮口 1	山口 ⑦	山下 6	山崎 1	吉田 1	脇山 ⑩
栄	狩野 1	川崎 1	川原 1	岸本 1	草場 1	木場 ③	敷田 1	高橋 1	谷丸 1	中里 1
	中山 1	西田 1	福田 2	藤尾 1	前川 1	前田 1	松下 1	八島 2	山口 2	山崎 1
	山下 1									

第二節　わが町の動植物

第一項　玄海町の水中小動物

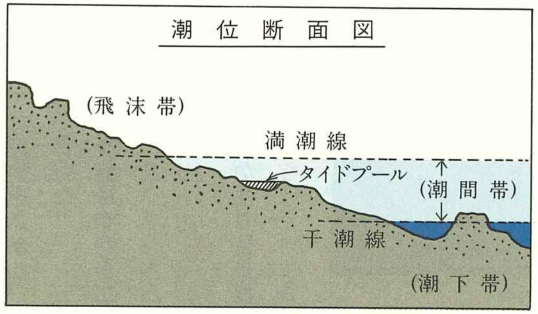
一　玄海町海辺の小動物

はじめに

海岸が磯(いそ)か、砂浜か、あるいは泥干潟か。また外洋に面して波浪が強いか弱いか、どんな海流の影響を受けているのか。さらに内湾に流れ込む河川水があるのか、などの多くの条件で海辺の生物は全く異なった相を示す。

さらには、満潮時に海水の飛沫(ひまつ)のかかる潮上帯(飛沫帯)か、それとも露出と浸水を繰り返す潮間帯か、常に海面下にある潮下帯かによっても、また生活している生物は異なっている。

ここでは、わが町の海辺での春の潮干狩り、夏の磯遊びの折に、ちょっと注意して見ると、ごく普通に観察のできる海辺の小動物を、磯遊びのガイド的な意味ももたせて述べてみることにした。



そのため、磯や干潟を歩きながら、時には岩陰をのぞき、あるときは石を起こし、泥を掘って獲物をさがし、目に触れるものを分類などにこだわらず、潮上帯から潮間帯、潮下帯へと引き潮を追うかたちで書いた。

また、海岸についても町内の海岸を概観し、次いで観察地点の海岸の特徴に触れながら、小動物を見ていくことにした。

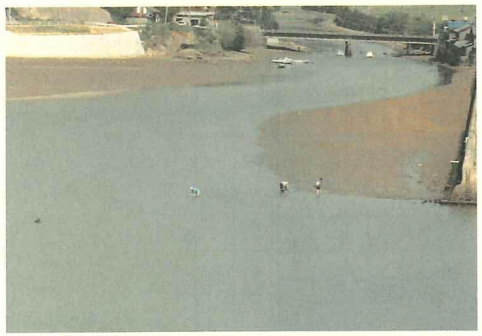
(1) 玄海町の海岸

わが町の海岸は志礼川、有浦川、座川(切木川)の河口に発達している泥干潟と戸崎から高岩鼻にかけて見られる岩礁、さらに値賀崎あたりに見られる岩場の三つに大別される。

泥干潟　泥干潟海岸は、外津湾の奥、仮屋湾の有浦川河口付近に見ることができる。いずれもそこに流れ込む川が運んでくる土砂でつくられつつある海岸ともいえるもので、運び込まれるもののちがいで、外津湾の干潟(写真No.1)と有浦川河口(No.2)のそれとの底質はやや異なっている。

岩礁と岩場　岩礁と岩場はいずれも台地の端に見られるが、仮屋か

1　外津湾の干潟



2　有浦川河口

ら高岩鼻、戸崎、白瀬にかけての入野層(第三系・佐世保層群)の砂岩、泥岩、シルト岩、礫岩の露頭や三紀層を貫いて噴出した第四系の玄武岩の岩脈が、柱状節理を見せたまま、あるいはその転石が岩礁を形づくるなどしている。

磯までの道は細く険しいが、磯そのものは足場もよく、小物釣りや磯物採りに格好の海岸となっている。(No.3)

値賀崎、トリカ崎では高岩鼻付近に見られた火山岩と同じような、第四系の無斑晶質玄武岩が壁のように海中からそそり立つ岩場となっていて、磯釣りや海の景観を楽しむ人が絶えない。(No.4)

値賀崎に連なる外津湾岸は、カンラン石粗粒玄武岩と中部砂岩、泥岩互層の第三紀層岩石とで形づくられた岩礁である。(No.5)

(2) 海岸に見られる主な小動物

外津湾の磯　まず外津湾の磯から見てみよう。外津大橋を玄海町側の取り付け部から下に降りると外津湾に沿った海岸道路に出る。そこから磯に下りる。

そこには、砂岩の露頭上に大小の玄武岩塊が転がり、潮間帯を埋めている。その幅は、大潮の時でもさして広くない。それは、台地が崖となって海に落ちこんでいる岩場の下部に、崩落によって生じた大小の岩塊で転石帯ができているからだ。

満潮時に、波しぶきのかかる飛沫帯付近の岩のくぼみや、すき間には、白く乾いた殻を見せて、あたかも死んだように動きのない、殻高が五ミリほどの小さな巻き貝が点々と、時にはびっしりと付着している。岩が焼けるほど強い日射しにさらされていても動かない。アラレタマキビ(地区での呼び名はギソミナ)である。(No.6)

飛沫帯からほんのわずか低くなると、光を避けたように岩のすき間、石の下の穴を埋めて、アラレタマキビを

一回り大きくしたような、殻高が一センチぐらいの巻き貝がかたまってついている。岩の間に打ち寄せられたホンダワラなどの集まっている所では、軽く手のひらいっぱいになることも珍しくない。殻の模様の変化が大きく白いバンドを巻いたもの、斜めに黒線の入ったもの、全体が黒っぽいもの、茶褐色のものなどが目につく。タマキビ（ギソミナ）である。（No. 7）

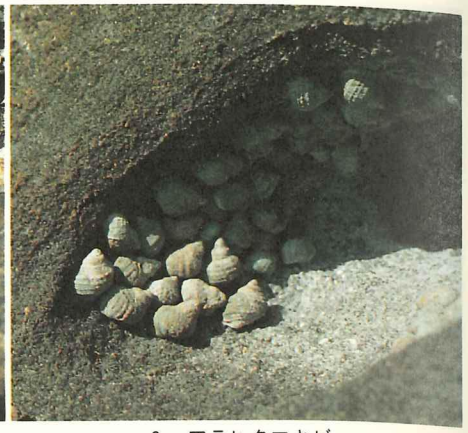
そのあたりから低潮線付近まで、岩を白く覆いざらざらしたものはイワフジツボの仲間。干潮時は固く殻を閉じていて、生きているのか死んでいるのかわからないようだが、満ち潮になり海水が浸し始めると、殻を開き蔓脚を出し、盛んに振り動かして餌となるプランクトンを集める様子を見ることができる。（No. 8）

3　高岩鼻の磯物採りの海岸

4　値賀崎の磯釣り岩場

5　外津湾の岩礁

9　マツバガイ

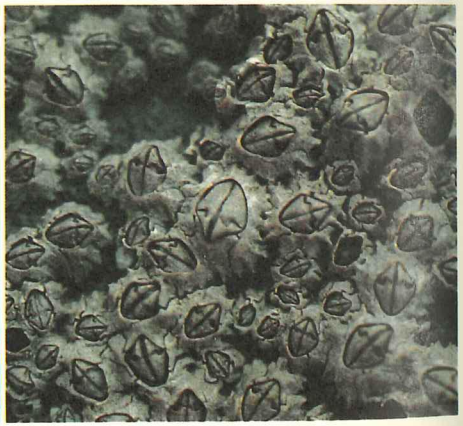


6　アラレタマキビ

10　ベッコウザラ

7　タマキビ

11　ヤッコカンザシ



8　イワフジツボ

15　トコブシ

12　イソゴカイ

16　バフンウニ

13　イソニナ

17　イトマキヒトデ

14　マンジュウボヤ

また、このあたりの岩肌にはかさ貝（カタキャー）の仲間のアオガイ類がびっしり付着している。その他、マツバガイ（No.9）、ベッコウザラ（No.10）、ウノアシ、カラマツガイ、キクノハナガイなどが自分の殻に合ったくぼみにはりついているのもごく普通に見られる。

ちょっと油断をすると、手足を傷つけやすいヤッコカンザシ（No.11）はゴカイの仲間だが、日のあまり当たらない所に付着している。白い小さな点をまき散らしたように石の表面やイタボガキの殻の上などにくっついている直径一・五ミリから三ミリほどの渦巻き状の殻を持つウズマキゴカイ、石を起こすと石の裏をすべるように移動したり、石の下の砂利混じりの土に作った巣穴にすばやく、もぐり込もうとするイソゴカイ（No.12）なども見られる。

岩の下や岩と岩のすき間をのぞいて見ると、濡れた所、下に少し残った海水の中にイソニナ（No.13）、タマキビ、イシダタミなどがゆっくりはい回り、そこに付着している藻類を歯舌ではぎとっている。丈夫な足糸で岩のすき間に体を固定して重なり合っているのがイガイ。イガイと同じように固着生活を送っているのがカメノテ（方言＝タカンツメ、オンノツメ）、その近くには、八枚の殻板を持った八枚貝とも呼ばれるヒザラガイ（クズマ）の仲間も数多く目につく。また、岩の間に鮮やかなオレンジ色のつややかな球体をくっつけているマンジュウボヤ（No.14）もいる。イタボヤ、チゴケムシもそのあたりに見られる。

潮下帯に近い岩のすき間をのぞくと、長径が八センチ、短径が六センチほどのトコブシ（No.15）が静かに動いている。他地区の磯にくらべてここの磯は個体数が多い。重要な水産資源であるバフンウニ（コガゼ＝No.16）も、よその磯にくらべて大変多く、ちょっとした石の下、すき間に四、五個は見つかる。

星形をした背中に、血のように鮮やかな紅色の斑点を散らしたイトマキヒトデ（ナマコンカサ、タコンマクラ＝No.17）もウニと同じように管足を使ってゆっくり移動している。オオシマヒメヒトデ（No.18）、クモヒトデ、ヤツデヒト

デ、アカヒトデもいる。

潮間帯の底質が泥がかった所にはスガイ（イシベタミナ＝No.19）がいるし、同じ仲間のウラウズガイ（No.20）、潮下帯にはサザエ（シャージャ）が同じ仲間のものとして生息する。

ふたが角質円形で螺旋状の筋をもっているものの仲間には、オオコシダカガンガラ（シリタカミナ、ミチミナ＝No.21）、クマノコガイ、コシダカガンガラ、クボガイ、エビスガイ（No.22）、ヒメクボガイなどがおり、磯遊びの獲物として喜ばれる小型から中型のまき貝（一般的に〝ミナ〟と呼ぶ）。ここでもごく普通に見られ、レイシ（ニシミナ＝No.23）、イボニシ、レイシダマシなども多い。

石の下には白い甲を持ったもの、まわりの小石と全く見分けのつかない保護色の甲を持ったものなどの小さなカニが陰から陰へと走る。ヒライソガニである。低潮線付近にはやや大きいイワガニ、食用となるイシガニ（No.24）などもいる。

ヤドカリの仲間ではイソヨコバサミ、スガイやイシダタミの殻を背負っているホンヤドカリ（脚に一カ所、イソヨコバサミは二カ所の黄色の部分がある）などベラ、カサゴ、アイナメ釣りのよい餌となるものも多い。

また、ホヤの仲間のイタボヤや、鰓冠を広げたケヤリムシ、干上がった岩肌に鰓冠をすぼめてぶら下がるもの、足糸でしっかりと体を固定しているトマヤガイ（No.25）、岩の表面に殻を固着させているオオヘビガイ（No.26）、フジツボの仲間でアカフジツボなども見られる。

有浦川川口付近の干潟

有浦川の川口付近に広がる泥干潟は、道路沿いに幅数メートルは砂混じりでややかたいが、そこを少し離れると、ぬかるんで膝までめり込む。干潮で露出した泥地には、大小無数の穴がうがたれ、そこには特徴のある折れ曲がり方をしたはさみと眼柄を持つヤマトオサガニが、はさみを振り上げ振り下

21　オオコシダカガンガラ

18　オオシマヒメヒトデ

22　エビスガイ

19　スガイ

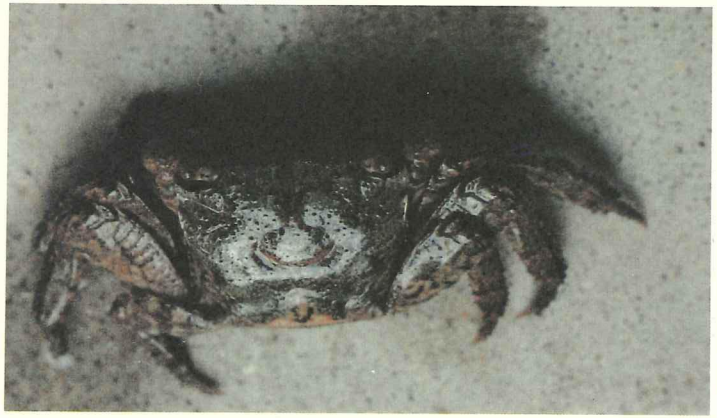
23　レイシ

20　ウラウズガイ

24　イシガニ

26　オオヘビガイ

25　トマヤガイ



27　カクベンケイガニ

ろしながら、ときどき口に餌を運んでいる。それらに混じって、甲の長さ六～七ミリ、幅九～一〇ミリほどの本当に小さいやや青味を帯びたチゴガニが、穴のすぐ傍らで、両方のはさみを振り上げ振り下ろしている。数えきれないほどいるのに、ほぼ同じリズムで上げ下ろししている姿は見ているだけでも楽しい。また、チゴガニは大変用心深く、わずかな動きや物影にもおびえて、いっせいに巣穴に走り込む。

護岸に近い所の石の陰には、カクベンケイガニ（No.27）が捕えたチゴガニや小魚の死がいをはさみで引きちぎり、口に運んだり、二匹で奪い合ったりしているし、アカテガニ、ベンケイガニもこの干潟のカニの仲間。土地の人たちがツガネと呼んでいるモクズガニも、川水が冷たくなるとこの干潟に下る（No.28）。干潟ではカニたちが主役である。

ここの岩や護岸の石垣、流木などすべてが泥土に覆われ、その物本来の色を示していないが、汀線近くの岩に付着するシロスジフジツボ（No.29）もちょっとみただけでは、イワフジツボと見間違えそう。また、岸近くの岩についているまき貝も、そのままの姿では、何かすぐには判別できないほど泥にまみれているが、手にして汚れを落して見ると、アマガイ（No.30）であったり、イシダタミ（No.31）であったり、タマキビであったりする。

ここではアマガイは潮線近くに、さらに川に向かってさかのぼれば、淡水産の同じ仲間のイシマキガイが多い。タマキビは三島の岩石のくぼみに多い。イシダタミ、スガイ、クマノコガイ（No.32）は数が少ない。

三島周辺の干潟は砂質で人が歩いてもめりこむことはあまりない。ここではどこを掘ってもアサリ貝が素手で、まるでバラス置き場で小石を取るかのように採れる。しかし、数が多過ぎるためか殻が小さい。ここではアサリに混じってオキシジミ（ハマグリ＝No.33）を掘り出すこともある。

三島にかかる橋脚、砂岩のくぼみ、護岸の石垣にはマガキ（No.34）、シロスジフジツボ、カリガネエガイ（No.35）

がすき間なく付着している。

潮が差しはじめると、七～八センのトビハゼが水面を跳びながら岩から波打ち際へ、そこから海中の岩へと、跳び移るのを見ることができる。ちょうどそのころ波打ち際では、水面に二本の眼柄を潜望鏡のように立て、体は完全に水中に没して餌を採るヤマトオサガニたちがいる。(No.36)

このほか、ここには干潟の泥に不規則なはい跡を残すフトヘナタリやヘナタリ(No.37)、泥を掘ると巣穴の中に体をくねらせて進むイソゴカイも生息する。

とにかく、有浦川川口から三島周辺への海岸は格好の潮干狩り場。干潮時ともなると大人、子供たちが、色さまざまな服装で集まり、貝採りでにぎわっている。

28　モクズガニ

29　シロスジフジツボ

30　アマガイ

34　マガキ

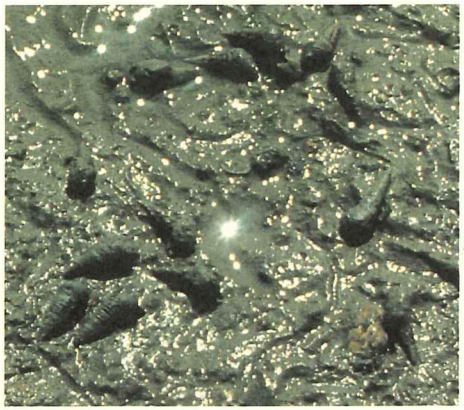
31　イシダタミ

35　カリガネエガイ

32　クマノコガイ

36　ヤマトオサガニ

33　オキシジミ



37　ヘナタリ

39　イボニシ

40　クロフジツボ

高岩鼻付近の磯

仮屋の集落から天狗岳に向かう急な道を登り、杉林や雑木林の中の急傾斜の細道を下ると、対岸に肥前町の京泊、北に蝦蟇瀬、平瀬、小平瀬を望む高岩鼻付近の磯に出る、岩礁磯である。(No.38)

岩の表面には、白く乾いた殻を見せるアラレタマキビが、今まで見てきたどの海辺よりも数多く付着しているし、地層の断面に生じている波浪による浸食でできたくぼみには、盛り上がるようにカメノテが固着生活を送っている。イガイの付着も随所にある。

崖からしみ出す淡水にぬれた岩肌には、多くのイシダタミが群れている。乾いた岩にマツバガイが一カ所に二、三〇個もついている。そこらのくぼみには、カキなどを食害するイボニシの小群も多い。(No.39)

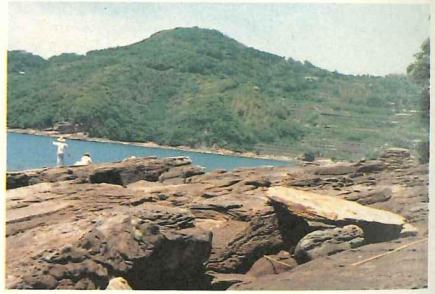
カサガイの仲間では、キクノハナガイ、ベッコウザラ、ウノアシ、カラマツガイなど、ここは多彩である。ま

たフジツボの仲間では、イワフジツボが岩肌を覆っているし、それより大きめのクロフジツボ(No.40)は低潮線付近になると増える。フナムシ(アママ＝No.41)の姿も多く、交尾しているもの、岩面を群れて歩いているものなどさまざま。

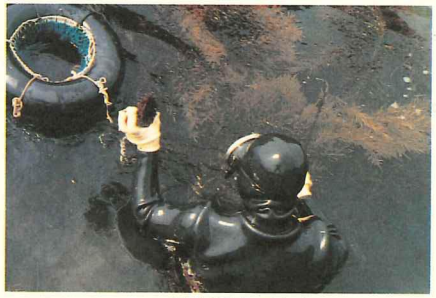
そのほか、ヒザラガイ、クロヅケガイ、ヨロイイソギンチャク(No.42)、アメフラシ、アメフラシの卵塊いわゆるウミゾウメンと呼ばれているもの(No.43)など小動物の種類も豊富である。

岩礁の間に茂るホンダワラ類を分けて潜水して、ムラサキウニ(No.44)やバフンウニ、サザエを採る海士(No.45)。波打ち際近くの石の下を探る女たち。ざるの中にはバフンウニやニシ、クマノコガイ、キクスズメの付いたクボガイ、オオコシダカガンガラ、コシダカガンガラ、スガイなどがはいっている(No.46)。この人たちは「サザエもアワビもウニもトコブシも数がめっきり減って採れなくなった」という。年々磯ものは急減しているようだ。

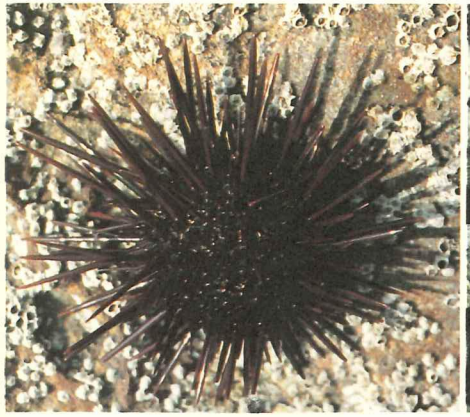
低潮線付近はイトマキヒトデ、マンジュウボヤ、イタボヤ、ヤッコカンザシに埋まったようにしているセミアサリ。とぐろを巻いたヘビのように見えるオオヘビガイ、細い糸をはり付けたようなシライトゴカイ、チコケムシに覆われた岩がほとんどである。岩の間の砂利を掘るとイソゴカイ、フジナマコなども見つかる。なお、隣接の市や町の磯で観察できるウミウシ類、オトメガサ、スカシガイ、カモガイ、カイドウチグサ、マダコ、テナガダコなどは調査地点の



38　高岩鼻付近の磯



45　潜水服姿の海士



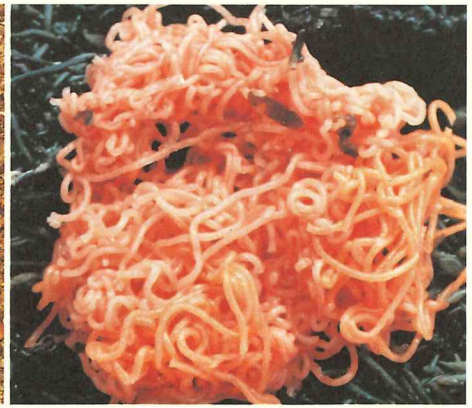
44　ムラサキウニ

41　フナムシ

46　女たちの採った磯もの

42　ヨロイイソギンチャク

47　カブトガニ



43　ウミゾウメン

選択が悪かったのか、個体数が少ないのか見つからなかった。呼子、唐津の海岸で見つかる、対馬暖流にのって流れてくるアサガオガイ、オウムガイ、カイダコなども不幸にも目にすることができなかったが、地理的にみて漂着は間違いないものと思われる。

玄海町の海岸小動物のなかで特筆されるものに、カブトガニ（地方名＝ウンキュー）がいる（No.47）。古生代（五億七〇〇〇万年前から一億二五〇〇万年前）に栄えた三葉虫類からの進化といわれ、生きた化石とされている。全長約六〇㌢。砂泥中のゴカイを餌（えさ）とし六、七月ごろ産卵のため浅いところに群れ来る習性がある。有浦川にも泳いでいるのを見た。産卵受精したものは五～六週間でふ化、幼虫は三葉虫型で尾剣はない。産卵時にはたいがい、つがいで泳いでいるので、仲の良い夫婦のことを「ウンキューのようだ」と、その例えにもされている。

全国的には天然記念物に指定されている岡山県笠岡湾が有名。仮屋湾奥・牟形や大串海岸には、昭和中期ごろまでは大変多く生息していた。年々減少の傾向。

(3)　結び

以上、三カ所の海岸を調査地点に選び、そこに生息する小動物を記したが、町内の他の海岸も巨視的な視点で見るとき、ほぼ同様な生物群集の分布が見られるものと考えられる。

東松浦半島は、沈降によって生じたと考えられる複雑な出入りの多い海岸で、三方を海に囲まれ、岬あり入り江あり、奥深い湾、大小の数多い島が散在している。海岸のほとんどは崖（がけ）になって、陸地が海にせり出している格好。玄武岩の基部が波浪に浸食され、上部が節理にそって崩落して出来た荒磯。それに花崗（かこう）岩の風化で生じた白砂の堆積による浜。泥土の流入堆積でできた潟が入り込む。すなわち、変化に富む海岸線であって、生息環境の違いで異なる多くの生物群集を見せることにもなっている。

もともと大陸の東縁であった日本列島は、およそ千七百万年ほど前、マントル対流によって大陸から分離、次第に押し離され、北方から流入した海水による内海としての日本海を、大陸と日本列島の間に形成したといわれている。東松浦半島の前面に広がる海域を東北方へ流れる対馬海流は、数十万年前の氷河期に、大陸から完全に日本列島が分離され、海峡が形づくられた時から流れ込み、日本海を外海と連結させたといわれている。日本海には寒暖の二つの海流があるが、東松浦半島は暖流の影響を強く受けており、水中小動物もその影響下にあるものがほとんどといってよい。

(4) 海岸の小動物の呼び名（方言）

いくつかのものを一まとめにした呼称で呼ばれ、細かに分類した名称はつけられていないものが多い。アラレタマキビ、スガイ、ヘナタリなどの巻き貝はすべてミナと呼ばれ。何種かに○○ミナなどと固有名が上につけられている。カサ貝類はすべてをカタキャーで呼び、岩に付着し石灰質の鋭い殻を持ったものは全部、カキブセでまとめられている。カニ類はガネ、ウニの仲間はガゼ、特定するときには、○○ガゼとガゼの上に固有の呼び名がつく点、ミナの場合と同じである。アサリなどの二枚貝類はキャーと呼ばれている。キャーはカイのなまり、ミナはニナの、ガネはカニの、シャージャはサザエのなまりと思われる。

以下に若干の種類の和名と玄海町の中で呼ばれるそれらに対する呼称とを対比して、書き出してみた。

和名	地区での呼称
アラレタマキビ	……ギソミナ
タマキビ	……ギソミナ
スガイ	……イシベタミナ

ウラウズガイ	……ハナクサレ
オオコシダカガンガラ	……ミチミナ、シリタカミナ（マキ貝類はミナと一般的に総称）
レイシ	……ニシミナ（レイシ類はニシミナと総称）
イソニナ	……ホウジャ、ヒョウジャ
フトヘナタリ	……ヒョウジャ
ヘナタリ	……ヒョウジャ
アワビ	……ツボギャー、メタギャー
マツバガイ	……カタキャー（カサ貝類はカタキャーと総称）
サザエ	……シャージャ
イガイ	……イギャー
アコヤガイ	……シンジュガイ
オキシジミ	……ハマグリギャー
マテガイ	……マテギャー
オオヘビガイ	……マガリ
ケガキ	……カキブセ
マガキ	……カキブセ
ヤッコカンザシ	……カキブセ
クロフジツボ	……カキブセ（フジツボ類はカキブセと総称）

ヒザラガイ……クズマ
カメノテ……カミナリノツメ、タカンツメ
バフンウニ……ウマンクソガゼ、コガゼ
ムラサキウニ……オニガゼ、ムラサキガゼ
アカウニ……オニガゼ、アカガゼ
イトマキヒトデ……イトマキ、タコンマクラ、ナマコガサ
イソゴカイ……ノムジ、モジナ
ヒライソガニ……ガネ
イワガニ……ガネ
カクベンケイガニ……ガネ
イシガニ……ガサメ
ヤマトオサガニ……タウチガネ
チゴガニ……タウチガネ
アカテガニ……ベンガネ
モクズガニ……ツガネ
ベンケイガニ……ベンガネ
アメフラシ……ウミウジ
オオユムシ……クロムシ

フナムシ……アマメ
イソヨコバサミ……ガネミナ
ホンヤドカリ……ガネミナ
ケヤリムシ……オトヒメサマノボボ

二　玄海町の川・池の小動物

はじめに

町内には上場で最大河川の有浦川のほかに八ッ田川（前田川）、志礼川、浜野浦川、石田川と肥前町と川口で境界を接する座川（切木川）などがあり、これらの源をなす溜池が無数に点在する。どの水系の小動物もほぼ同じ生物群集と考えられるので、有浦川水系のごく一部についての調査と、地元民からの聞き取り調査とをもとにして町内の淡水生物について述べてみる。昆虫類、植物プランクトンなどはごく一部について記すことにした。

(1)　有浦川水系小動物

淡水に住む生物は海水に住む生物にくらべてその種類は少なく、貝類などもモノアラガイ、シジミ、カラスガイ、サカマキガイ、イシマキガイ（有浦小学校前の河川の両側の石垣、川の中の大きな石に付着している親指の頭大のアマオブネ科の巻き貝＝写真No.1）、カワニナ（カワミナ＝No.2）などわずかの種類しか見られない。陸産の軟体動物（マイマイの仲間、キセル貝の仲間）もいくらか見られるが、もともと日本全国で亜種も含めて百種ほどしかいないので、当然に町内ではわずかしか見ることができない。

水生昆虫ではアメンボ、ミズスマシ、ミズカマキリ（No.3）、サホコカゲロウ（No.4）などが観察される。

甲殻類ではモクズガニ（ツガネ）、サワガニ（No.5）なども観察されるが、種類も個体数も少ない。

川底は花崗岩の風化が進みかけた岩で、その上を砂や粘土が覆っている川底を調べてみると、サホコカゲロウ、アシマダラブユ、シマトビケラ、イトミミズ（No.6）、イシビル（No.7）などが生息している。これらの生物の存在は、この川の水が相当に汚れていることを示している。その理由として、周りに水田その他あり、そこから無機質、有機質を含んだ排水が流れ込んでおり、富栄養状態となっているものと考えられる。

また、水田やその周辺で、ツチガエル（ドロビッキ）、トノサマガエル（アオビッキ＝No.8）、アカガエル（アカビキ）、ニホンアマガエル（No.9）などを見ることができる。有浦上の上の方の地区では、ハコネサンショウウオも、ごく普通に見ることができる。

トンボの仲間ではカワトンボ、イトトンボなどが川水中に突出した岩に止まっていたり、イワゼキショウの茂る川岸を飛び交っているのを見ることもできる。

(2) 轟木地区の小動物

どの水系地区でもほぼ同様だが、ここでは轟木地区一帯を対象にして観察した。そこの生物には、カニの仲間としてベンケイガニ、モクズガニ。エビの仲間としてスジエビ（シラガエビ）。二枚貝の仲間としてカラスガイ（タメガイ）、シジミ（ほとんど見られなくなった）、マルタニシ（No.10）。汚水の流れる溝にもモノアラガイなどが生息している。水辺の夏の昆虫として人々の目を楽しませるホタルは一時減っていたが、最近増えてきている。幼虫の餌となるカワニナもいくらか生息している。また他地区では少なくなったタガメもここでは増えてきている。こういった水生昆虫類の増加は低毒性の農薬の利用と無縁ではない。増えてきているものにゲンゴロウ、イモリ（アカハラ、イモリャー）、とくに増えてきたものにウシガエルなどがいる。しかし、牟形地区などに多いアメリカザリ

4　サホコカゲロウ

1　イシマキガイ

5　サワガニ

2　カワニナ

6　イトミミズ

3　ミズカマキリ

ガニ、チスイビルなどはこの轟木地区には少ない。

また数は少ないが、ミズカマキリ、コオイムシなど。トノサマガエル、ツチガエルはどの水田にも見られる。

轟木地区の溜池（ためいけ）、小川の水を調べてみると、ケイソウ類ではハリケイソウ、ハネケイソウ、ツノケイソウ、クサビガタケイソウ。緑藻類ではセネデスムス、ミクロキスチスなど。ミジンコの仲間、ゾウリムシの仲間などが観察された。

9　ニホンアマガエル

7　イシビル

10　マルタニシ

8　トノサマガエル

第二項　玄海町の野鳥

はじめに

野鳥は他の動物と異なり、自由に移動する。その行動範囲は地上を移動するそれとくらべ、けたはずれに広い。したがって玄海町の野鳥と言っても、当然に周辺の市町村に生息する野鳥と密接な関係にある。このため今までに調査した周辺部の資料も参考にして、玄海町で観察できる野鳥について述べてみる。なお、資料及び調査期間は昭和四十二年（一九六七）四月以降のものであり、一般からの情報はほとんど加えていない。

一　玄海町の野鳥の概観

東松浦半島の西の一角に位置する玄海町は、野鳥生息環境から見て、大きく二つに分けられる。すなわち、野高山から北へ延びる低い丘陵地帯と、入江に面してわずかに広がる平野部とである。

参考文献

『改訂増補　日本動物図鑑』（北隆館）◆『原色日本海岸動物図鑑』（保育社）◆『原色日本貝類図鑑』（保育社）◆『自然観察と生態シリーズ』、『海辺の生物〈水の生物〉』（小学館）◆『エンサイクロペディア　エポカ』（旺文社）◆地質調査　五万分の一地質図唐津図幅　◆佐賀県炭田地質図　◆『アニマ』一九七七年八月No.3、一九八二年八月No.114　◆『自然観察と生態シリーズ9　川・池の生物』（菅野徹著、小学館）◆『川と湖』（『The living earth』）（ピーター・クレランド著、川野信彦監訳、講談社）◆『生物から見た河川の水質調査法』佐賀県公害センターほか。

丘陵地は畑地として開かれ、大小の溜池が点在する。ところどころに雑木林が残され、ここが野鳥の生息地の一つになっている。平野部の川はいずれも小さく、水量も少ない。海岸は砂質で、泥質の潟はほとんどない。内湾には養殖事業が行われており、船舶の航行が多い。

以上の様相から、野鳥の種類や生息羽数は、他の地区に比べると少ない。山が浅いため大型の鳥の飛来は特に少ない。シギやチドリ類も遠浅の泥質の潟が少ないため多くの渡来は望めない。ただ注目される点は壱岐、対馬、韓国を結ぶ最短距離にあることから、渡り鳥のコース上にあることである。マナヅルの休息や、肥前町で見つかったツメナガホオジロなどが、その具体的な事例の証明となる。

二　玄海町の野鳥の種類

(1) アビ（冬鳥）

数は少ないが飛来。内湾にも姿を見せることがある。潜って魚を捕る。

(2) オオハム（冬鳥）

外海に冬季渡来する。多いとき千羽をこえる集団が見られる。内湾にはあまり姿を見せない。

(3) シロエリオオハム（冬鳥）

値賀崎沖合での記録がある。

(4) カイツブリ（留鳥）

町内の溜池には二十羽ほどの群れで行動しているときもある。

(5) オオミズナギドリ（冬鳥）

外海に多い。値賀崎沖から馬渡島間の海上にはきわめて普通。ただし主として冬の間のみである。

(6) カツオドリ（冬鳥）

馬渡島から値賀崎間の海上で、一羽だけ見つかった記録がある。

(7) ウミウ（冬鳥）（写真No.1）

値賀崎沖の海上に冬季観察できる。数羽で潜水しながら魚を捕っていたり、海上に浮かんでいることが多い。内海にはめったに入って来ない。ほおが白いのが目立つ。

(8) ヒメウ（冬鳥）

ウミウより数が少ない。単独でぽつんと海に浮いている。岸には近寄らない。ウミウよりやや小型。ほおの部分は白くない。

(9) ゴイサギ（留鳥）（No.2）

溜池にはたいてい見られるずんぐりしたサギで、通称夜ガラス。湾内のいけすにもよく見られ、魚をねらう。繁殖している。

(10) アマサギ（夏鳥）

外津大橋の鎮西町側の近くの森で営巣、繁殖している。数は少なく、頭部から首や肩にかけてオレンジ色になる時期があり、分かりやすい。

(11) ダイサギ（夏鳥）（No.3）

繁殖は未確認。大型のサギで他のシラサギの中によく混じる。数は少ない。

(12) コサギ（留鳥）（No.4）

1　ウミウ（冬鳥）

2　ゴイサギ（留鳥）

3　ダイサギ（夏鳥）

4　コサギ（留鳥）

6　マガモ（冬鳥）

5　オシドリ（冬鳥）

最近は増えてよく見られるようになった。前記のアマサギと同じ場所で繁殖。

(13) クロサギ（留鳥）
海岸に生息する全身黒色のサギ。珍しくはないが少ない。

(14) アオサギ（玄海町では夏鳥）
大型のサギ。時々海岸や広い溜池に姿を見せる。

(15) コウノトリ（冬鳥）
東松浦半島には二回記録があり、広い溜池に飛来する。韓国―対馬―壱岐―東松浦半島のコースで渡ってきたと思われ、今後も記録は増えるだろう。

(16) オシドリ（冬鳥）（No.5）
周辺の樹木の多い山中の溜池に飛来する。十羽前後の群れで観察されるが、とにかく美しい。手厚い保護の手を加えれば、オシドリの里も夢ではない。カシやマテバシイなどの林が多い池が候補になる。

(17) マガモ（冬鳥）（No.6）
広い溜池や内湾に飛来する。別名アオクビと呼びハンターにねらわれる。

(18) カルガモ（冬鳥）
マガモ同様溜池に住む。最近は安全を求めてか海上にも多い。オシドリと同じような環境を好む。

(19) コガモ（冬鳥）
顔の模様がかわいく、尾部にある△形の黄色の斑が鮮かな小型のカモ。しかし、ハンターに追われてあちこちに移動する。谷間の流れや溜池などにも住みつく。

(20) オナガガモ（冬鳥）
雌雄とも、他のカモとくらべて尾が長いからすぐ見分けがつく。カモとしては大型。玄海町では数は少ない。

(21) キンクロハジロ（冬鳥）
広い溜池に飛来。潜水して餌を捕る。数は少ない。頭部の羽毛がフリルのように後に長くなっている。

(22) ミサゴ（留鳥）
魚を主食とするタカ。海岸を主に生息の場所としている。下から見上げると、一見カモメのように見える。高いところから急降下して、水面近くの魚をつかみ捕る。

(23) ハチクマ（旅鳥）
春と秋の渡りのシーズンに上空を通過する。トビに似ているが、尾の形が異なるし、翼の模様も違う。

(24) トビ（留鳥）
かなりの数が生息している。繁殖もしており、ピーヒョロロと鳴く。尾は三味線のバチ状をしている。

(25) オジロワシ（冬鳥）
上空を通過した記録がある。

(26) ツミ（冬鳥）
小型のタカでハトより小さい。山間部の樹林帯に生息し、小動物を餌とする。少ない。

(27) ハイタカ（冬鳥）
野鳥の集まる溜池の周辺の林で見かける。時には送電線にも止まっていることがある。ハトより大きめ

に見える小型のタカ。足が長い。

(28) サシバ（夏鳥）
よく鳴く中型のタカ。繁殖していると思われる。渡りのときは多い。

(29) ウズラ（冬鳥）
山手の草原に少数飛来する。渡ってきても長くは滞在しない。

(30) コジュケイ（留鳥）
最近増えている。通称チョットコイ。

(31) ヤマドリ（留鳥）
山地の林ややぶに生息。草原にはほとんど出ない。最近数が増えている。

(32) キジ（留鳥）（No.7）
国鳥である。繁殖期にはオスがケーンケンと威勢よく鳴く。

(33) マナヅル（旅鳥）
昭和五十九年（一九八四）に一羽保護されたが、同六十年には鎮西町で一羽休息しているのが見つかった。韓国を飛び立ったマナヅルの群れが肥前町の上空で観察されているから、玄海町を含めた東松浦半島はマナヅル渡来のコースにあると推察できる。マナヅルのコースはナベヅルのコースとも考えられ、ナベヅルが玄海町で羽を休める確率は高い。

(34) バン（留鳥）
池や堤の周辺のアシや丈の高い草地に生息。なかなか人の目に触れないが珍しい鳥ではない。全身黒っ

ぽく、くちばしが赤いのが目立つ。泳ぎもうまい。

(35) シロチドリ（夏鳥）
海岸や砂れき地で見られる白っぽいチドリ。唐津市湊では繁殖しているから、玄海町でもその可能性はある。胸の黒い線が中央で切れている。

(36) クサシギ（冬鳥）
川の中流や小さな池の岸辺にも住むシギで、色彩は目立たない。一羽でいることが普通で警戒心が強い。

(37) タカブシギ（旅鳥）（No.8）
ピッピッとよく鳴く小型のシギ。渡り時期の五月と九月ごろが多い。

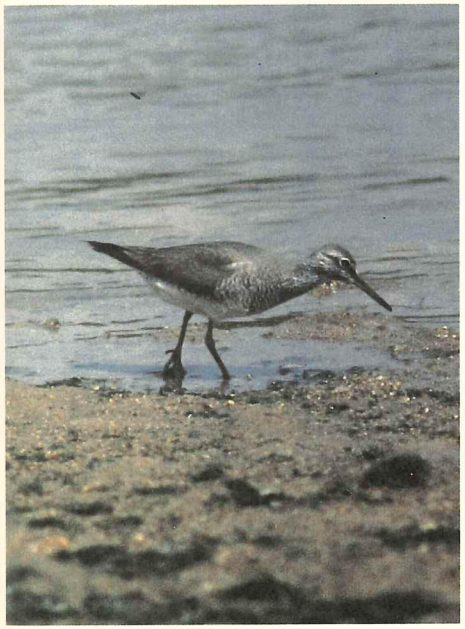
(38) キアシシギ（旅鳥）（No.9）
海岸の磯（いそ）や有浦川口などに飛来する。足が黄色でピューイと鳴く。ハトより小さな地味な鳥で、春と晩夏の渡りの時に多く見られる。

(39) イソシギ（冬鳥）
海岸や有浦川などが生息地。群れでは生活しない。チーリーリーと涼やかな声で鳴く。白い線が肩の方へくい込んでいるのが特徴。

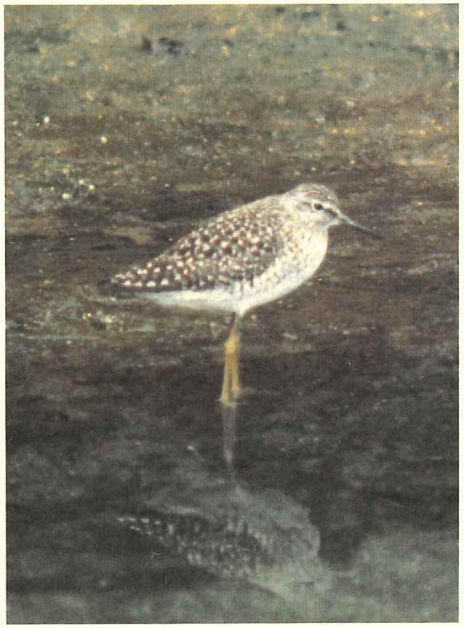
(40) チュウシャクシギ（旅鳥）（No.10）
くちばしが下へ湾曲した大型のシギ。河口にできた潟にいることが多い。春先には畑の虫も追いかける。

(41) ヤマシギ（冬鳥）
山に住むシギで、山間部の林の草地などに見られる。頭が大きく丸く見え、くちばしが長い。

7　キジ（留鳥）



9　キアシシギ（旅鳥）



8　タカブシギ（旅鳥）

(42) タシギ（旅鳥）

春には水田地帯に多いが、秋は川のほうに多い。小さな農業用水路でも見られる。体色が保護色となって目につきにくい鳥。

(43) アカエリヒレアシシギ（旅鳥）

四月の玄界灘（げんかいなだ）に出現する。海面をくるくる泳ぎ回って餌を捕る。多い時は数百羽を越す。岸近くにはあまり来ないが、内陸の水田や溜池（ためいけ）に来ることがある。

(44) セグロカモメ（冬鳥）

ウミネコとともに内湾深く飛んで来る。数は少ない。尾の先端に黒い筋がなく白い。

(45) ユリカモメ（冬鳥）（No.11）

唐津湾や松浦川口には多いが東松浦半島西側には少ない。くちばしの赤いカモメがいたらこの鳥である。

(46) オオセグロカモメ（冬鳥）

セグロカモメやウミネコの中に混じる大型のカモメで、背中が黒っぽい。非常に少ない。

(47) ウミネコ（冬鳥）

カモメの中では一番多い。尾の先端に黒いバンドがあり、成鳥の場合すぐ見分けがつく。ミャウミャウとネコのような声で鳴くので、声でもそれと知れる。

(48) ミツユビカモメ（冬鳥）

海岸近くには来ないカモメで、値賀崎沖の荒海が住みかである。船の上からでないとまず見られない。

(49) ウミスズメ（冬鳥）

10　チュウシャクシギ（旅鳥）

12　キジバト（留鳥）

11　ユリカモメ（冬鳥）

スズメとは名づけられていても、スズメとは全く異なる。スズメよりずっと大きく泳ぎもうまい。岸近くにはあまり来ない。海上が生活の場で群れていることが多い。

(50) カンムリウミスズメ（冬鳥）

ウミスズメと同じく外海に多い鳥。大きさはウミスズメと同じ。頭部に冠毛がある。

(51) カラスバト（留鳥）

人の住まない小島の林を好む全身黒いハトで、天然記念物である。繁殖は未確認。海岸近くの雑木林にも飛んで来る。ハトより少し大きい。通称ウシバトとかクロバトともいう。

(52) キジバト（留鳥）（No.12）

最近増えてきている。通称ヤマバト。首に独特のしま模様がある。冬季その数を増す。山間部だけでなく畑地にもよく降りている。

(53) アオバト（冬鳥）

全身グリーンに包まれた美しい鳥。つがいでいるときもあれば、数羽の群れのときもある。年によって数の変動が大きい。

(54) ホトトギス（旅鳥）

五月ごろ渡って来てよく鳴く。聞きようによってはホキョキョキョキョと聞こえる。繁殖はしていないようである。

(55) カッコウ（旅鳥）

五月に渡って来て、高原状の台地で鳴いている。カッコウと聞こえる声は知られる通り。繁殖は未確認。

15　コゲラ（留鳥）

13　アオバズク（夏鳥）

14　カワセミ（留鳥）

渡りのときだけ出現するようである。

(56) アオバズク（夏鳥）（No.13）

ホッホッとかコーコーという声で鳴く。明け方もよく鳴くので知る人は多い。神社の境内が好みで、セミや甲虫などが好物。大木のうろに巣づくりする。

(57) フクロウ（留鳥）

ドーコドリで知られている大型の鳥で、森のあるところに住みつく。以前ほどはいない。声はホウホウ、ゴロスケホーコーというように聞こえる。ネズミが主食で農家の味方である。

(58) ヨタカ（夏鳥）

夜もふけて活動する鳥で、昼間はなかなか見つからない、キョキョキョキョキョと単調な声で長く続ける。大良地区では昭和六十年（一九八五）七月にヒナが保護された。

(59) アマツバメ（旅鳥）

呼子町の鷹島や烏帽子島に多いが、曇った天候や雨天のときは翼を鎌のようにしならせて飛行する。電線などに止まることはまずない。ツバメよりずっと大きい。

(60) ヤマセミ（留鳥）

鹿の子模様の美しい渓流の鳥。ハトほどの大きさ。くちばしが太くて長い。町内の溜池に姿を見せる。

(61) カワセミ（留鳥）（No.14）

コバルトブルーの美しい鳥。川の小魚を捕らえて主食とする。川の汚れの影響を直接に受ける鳥で、この鳥が川からいなくなれば、人間にとっても用心が必要となる。スズメ大。

17　キセキレイ（留鳥）

16　ヒバリ（留鳥）

18　セグロセキレイ（冬鳥）

(62) コゲラ（留鳥）（No.15）

小型のキツツキで、山に入ればかなり見ることができる。ギィーという鳴き声と、木の幹に縦に止まることを知れば識別は容易。

(63) ヒバリ（留鳥）（No.16）

春の季節感を一番にうたいあげるのがこの鳥でスズメ、ツバメ同様に親しまれている。町内各地に住む。

(64) ツバメ（夏鳥）

町内各地に飛来。値賀川内には白いツバメがいた。巣立ちした幼鳥のねぐらはまだはっきりしていない。

(65) キセキレイ（留鳥）（No.17）

通称イシタタキ。渓流には珍しくない。尾を上下に振る習性があり、石をたたいているような動作からこの名がつけられた。黄色味の目立つ鳥。春のさえずりはすばらしい。

(66) セグロセキレイ（冬鳥）（No.18）

山の渓流を好むセキレイで、下流にはいない。小さい川では冬にしか見られず、数も少ない。ハクセキレイより黒色部が多く、声に柔らかな濁りがある。

(67) ハクセキレイ（冬鳥）

キセキレイと同じ大きさだが、これは白色部が目立つイシタタキである。水辺だけでなく畑にも多い。

(68) ビンズイ（冬鳥）

山林内を住みかとするホオジロ大の鳥。生まれ故郷は高山である。渡去前にヒバリに似たような声でさえずる。ツィーッという声ですぐ逃げるので、姿がなかなか見られない。

(69) タヒバリ（冬鳥）

耕地に多いセキレイ科の鳥。別に珍しくはないが、土の色にそっくりなので気づかない。

(70) サンショウクイ（旅鳥）

年によって見られないこともある。南方からの渡り鳥で、白と黒のスマートな鳥。ヒリリンと鳴き、群れで見ることが多い。若葉のころを過ぎると見られない。ホオジロより少し大きめ。

(71) ヒヨドリ（留鳥）（No.19）

ピーヨピーヨと鳴くこの鳥は、以前は夏には見られなかったが、現在は一年中見られる。目の後ろにある茶色の紋があいきょうである。庭先でも営巣する。

(72) モズ（留鳥）（No.20）

初秋にキイキイと高鳴きをして回る鳥。モズのことを百舌とも書くように、いろいろの鳥の声、人の声、機械の音までまねする。モズの生けにえはよく知られている。

(73) キレンジャク（旅鳥）

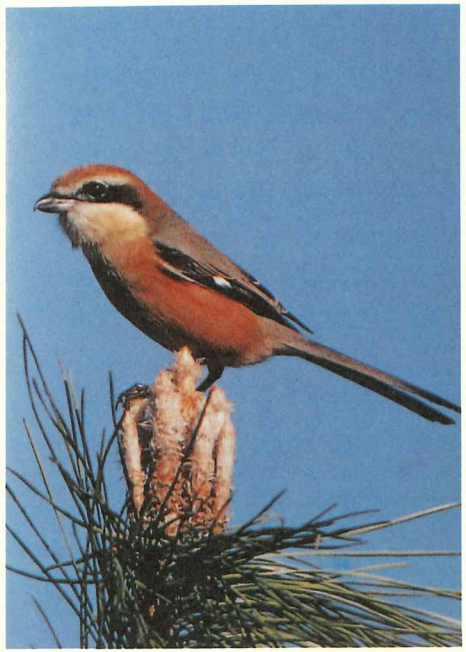
主に三月から四月上旬に一時的に姿を現わし、庭先のピラカンサスやクロガネモチの実などをついばむ。ヒレンジャクより数は少ないが、年によってその数は増減する。

(74) ヒレンジャク（旅鳥）（No.21）

キレンジャクと同様だが、こちらの方が数が多い。

(75) カワガラス（留鳥）

渓流に住む黒い鳥。尾をピンと上に立てている。数は少ない。早春のさえずりはすばらしい。



20　モズ（留鳥）

19　ヒヨドリ（留鳥）

21　ヒレンジャク（旅鳥）

(76) ミソサザイ（冬鳥）

家の裏庭のすみや、納屋まで入って来る小さな黒褐色の鳥。人の手の届くところまでやっては来るが、動きが敏速で捕えることはできない。チュッという声はスズメと聞きまちがえたりする。

(77) ルリビタキ（冬鳥）

川近くの崖地（がけち）のやぶなどでひっそり越冬する。場所の移動はしない。上面ルリ色をした美しい鳥。

(78) ジョウビタキ（冬鳥）

木の実にひかれて庭先にまで遊びに来る。ヒッヒッカタカタという声からハタオリドリの名もある。翼の白い紋が目立つところから、モンツキドリという名もついている。下面の赤褐色はよく目立つ。

(79) ノビタキ（旅鳥）（No.22）

秋の渡りのときに多く出現する。一見スズメに似ていて見過ごしやすい。十月中ごろの稲穂によく羽を休めている。

(80) イソヒヨドリ（留鳥）（No.23）

海岸、特に岩の多い場所を好み、値賀崎の磯（いそ）にも普通にいる。美しい声で鳴く。玄海町三鳴鳥の一つにしたい。

(81) アカハラ（冬鳥）

腹部に赤色の部分のあるツグミ科の鳥。ヒヨドリ大で雑木林が住みか。人影を察するとクワックワッと鳴いてすぐ逃げる。

(82) シロハラ（冬鳥）

23　イソヒヨドリ（留鳥）

22　ノビタキ（旅鳥）

24　ウグイス（冬鳥）

ちょっとした茂みには普通。アカハラより数が多く、別称カッチョ。同じ環境に住むツグミに対してもこの呼び名を使うが、シロハラを指すことが多い。クワックワッと鋭く鳴いて姿を消すことが多い。

(83) ツグミ（冬鳥）

寒が増すにつれて数が多くなる。ツグミ科の代表種。前の二種と違って少々厚かましく、庭の木の実などゆうゆうとつつく。

(84) ウグイス（冬鳥）（No.24）

日本三鳴鳥の一つ。また、玄海町三鳴鳥の一つにもしたい。冬の間はチャッチャッと鳴いている。山間部では七月までホーホケキョを聞かせてくれる。

(85) センダイムシクイ（旅鳥）

青葉のころわずかに通過していく。スズメより小さな鳥で、チヨチヨジューイという声がその存在を教えてくれる。数は少ない。

(86) キクイタダキ（冬鳥）

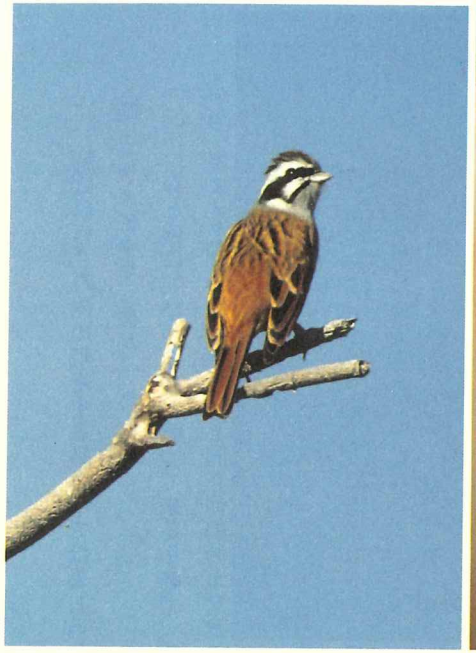
松かさと同じほどの大きさ。松林を好む。頭頂にキクの花のような黄色の線がある。群れで行動し、珍しい鳥ではないが、あまり知られていない。

(87) セッカ（夏鳥）（No.25）

草原を好む一〇ムグラほどの鳥で、ヒッヒッヒヒヒと鳴き、下降時にジェッジェッと鳴くから間違えにくい。

(88) オオルリ（旅鳥）

渓流沿いの山の斜面を好む。こずえや枯れ木に止まってよく鳴く。日本三鳴鳥の一つ。背中はルリ色で



27　ホオジロ（留鳥）

25　セッカ（夏鳥）

26　シジュウカラ（留鳥）

胸は白い。町内に飛来する鳥の中では美しい鳥の一つ。しかし数はいたって少ない。

(89) コサメビタキ（旅鳥）

春と秋に、ひっそりと渡って来る小鳥で、数は少ない。秋の渡りのときは鳴かないので見つけにくい。スズメより小さい。これと同じ仲間のエゾビタキ、サメビタキも渡って来ているようだ。

(90) エナガ（留鳥）

名前通りの尾の長い鳥で、ジュリジュリと鳴きながら、冬の雑木林を群れで渡り歩く。コースも決まっており、シジュウカラやメジロと群れをつくるときがある。夏はあまり見られない。

(91) シジュウカラ（留鳥）（No.26）

山の鳥では一番ポピュラーな鳥。石垣の穴などを利用して巣づくりをする。

(92) メジロ（留鳥）

一番よく飼育されている鳥。しかし、これは捕るのにも、飼うのにも許可がいる。

(93) ホオジロ（留鳥）（No.27）

町内にごく普通に住む鳥で、山地ではスズメより多い。春、見はらしのよい所でゲンペイツツジ、シロツツジとよくさえずっている。冬は小群で行動し、天気がいいときにはさえずることもある。玄海町三鳴鳥の一つに入れたい。日本三鳴鳥の中に入れる人もある。

(94) ホオアカ（冬鳥）

海岸近くの耕地の草むらにごく少数渡来する。北風の強い日や雪の日に、この鳥と出合うとほっとする。

(95) カシラダカ（冬鳥）（No.28）

28　カシラダカ（冬鳥）

29　アトリ（冬鳥）

一見スズメと見まちがうほど。畑地に多く、数十羽の群れは珍しくない。有浦川流域にもけっこう多く、チッチッという地鳴きは、スズメとの見分けに役立つ。春の渡去前にはオスの頭部が黒くなり、体の茶色も心なしか鮮やかになる。

(96) ミヤマホオジロ（冬鳥）

町内に点々と残る雑木林が住みか。広くて明るいところは好まず、地上で餌を採る。冠毛を立て冬日のなかでチッチッと鋭く鳴く。この時が一番美しい鳥で、特に目の上の黄色の線と目の上を通る黒線が鮮やか。十月ごろから四月ごろまで滞在。

(97) ノジコ（旅鳥）

全身淡い黄色味の強いグリーンで、眼の周辺がメジロのように白い。見る機会の少ない鳥だが、渡りの時期にはかなり飛来する。それも、人気のない山地や草原にひっそりと。ホオジロくらいの大きさ。

(98) アオジ（冬鳥）

スズメをほっそりした形のダークグリーンの鳥。人家の庭先の茂みにも生息していて、親しみやすい鳥である。チッと鋭い声を出すが、春先にはさえずり出す。安心できる居場所からはひと冬中動かない。

(99) オオジュリン（冬鳥）

秋の冷え込みが厳しさを増すころ、いつのまにかアシ原に渡って来る鳥。数羽で暮らしている。ホオジロに似るが、腰が赤茶けてなく、胸が白いから分かる。ただ、アシ原から出ようとしないので、目につきにくい。飛び立っても、アオジ同様、また元の場所に戻って来ることが多い。

(100) ツメナガホオジロ（冬鳥）

これは肥前町だけでの記録だが、玄海町にも飛来していることは十分に考えられる。佐賀県だけでなく、九州でも一回だけの記録である。

(101) アトリ（冬鳥）（No.29）

毎年、佐賀平野に数万の大群で押し寄せ、話題になる有名鳥である。本町には大群の確認はないが、数十羽の飛来はある。年によっては全く見られなかったりもする。近くで見るアトリは非常に美しく、びっくりする。山林、平地いずれにも生息する。大きさはスズメぐらい。

(102) カワラヒワ（留鳥）（No.30）

町内にはごく普通。山間部や平野部にもその姿が見られ、美しいのどを披露してくれる。特に春の繁殖期には声や姿につやがあって美麗である。スズメ大。

(103) コイカル（冬鳥）

以前は珍しいとされていたが、唐津、東松浦地区にはかなり飛来していることが分かってきた。数は少なく数羽で行動している。スズメよりやや大きめ。

(104) マヒワ（冬鳥）

年によって渡って来る数が異なる。群れで暮らしており、平野部より山間部で見られる。スズメより小さめで一見カワラヒワのように見える。松のある林にも住みつくが目には触れにくい鳥の仲間に入る。

(105) イカル（冬鳥）

冬でも澄んだよく通る声で鳴くから、声さえ分かればそれとすぐ知れる。お宮やお寺のように、木立と広い空間のある場所を好み、止まる場所は高い。キョッキョッと鳴くが、アケキーコーキーと聞こえる声

30　カワラヒワ（留鳥）

32　ミヤマガラス（冬鳥）

31　カササギ（留鳥）

でも鳴く。太いくちばしが特徴。ずんぐりした形で、ヒヨドリを縮めたように見える。

(106) シメ（冬鳥）

イカルに似た小鳥で、やはり同じような環境を好む。チイッという鋭い声やシーウという声も出す。おどけた顔つきに見えるのは、ずんぐりした体つきに加えて、太いくちばしと胸の黒いエプロンのためである。姿さえ目に入れば親しみの持てる鳥だろう。イカルと同じくらいの大きさ。

(107) スズメ（留鳥）

一番身近な野鳥である。普通に繁殖しており一年通して見られる。夏の終わりごろから、夕方になるとねぐらに集まって集団を作る。このときは非常にやかましいが、彼らにとっては交流の場となる。このねぐらは徐々に大きくなるが、場所が狭くなると別の場所にも作る。

(108) コムクドリ（旅鳥）

秋の渡りのときに少数姿を現す。濁った声を電線から送ってくるが、滞在期間が短く、めったに見られない。モズ大。

(109) ムクドリ（冬鳥・旅鳥）

ごく普通の鳥だが、玄海町では移動のときに見られるくらいで親しみがない。くちばしが黄色で、しわがれた声が特徴。ヒヨドリの大きさ。

(110) カケス（留鳥）

ちょっとした林なら生息している。最近、上場開発のため雑木林が切り倒されて、以前のようには見られなくなった。ジャージャードリといえばとおりがよい。カラス科の美しい鳥だが、声はいただけない。

(11) カササギ（留鳥）（No.31）

この十年ほどの間に玄海町にも入り込み、繁殖しているカラス科の鳥。佐賀の県鳥で、別名カチガラス。出身地は朝鮮半島。白と黒の対比の美しい鳥で、民家のカキの木や電柱などに巣づくりをする。自分の縄張り内に数個の巣を作ることがある。

(12) コクマルガラス（冬鳥）

クワァとかキャとかに聞こえる声で鳴くハト大のカラス。次に述べるミヤマガラスの中にいることが多い。非常に珍しい鳥とされていたが、最近はかなり渡来していることが分かってきた。黒色型と淡色型の二種類が見られ、黒色型はカラスそっくりで、淡色型は白色が混じっている。

(13) ミヤマガラス（冬鳥）（No.32）

俗に千羽ガラスといい、大挙して渡って来る感じがする。冬、畑地に数十羽から数百羽の群れのカラスがいれば、だいたいこの種と思ってよい。くちばし基部の上のほうが灰色に見える。日本にいるカラスよりやや小さめ。声も少し違う。

(14) ハシボソガラス（留鳥）

玄海町ではごく普通に見られるカラスでくちばしが細い。次のハシブトガラスと同じ環境に混じりあっているため、慣れないと区別がつかない。声はやや濁り気味で、ハシブトガラスよりやや小さめ。

(15) ハシブトガラス（留鳥）

ハシボソガラスにくらべて、くちばしが先まで太い。そして心臓も強いようで、人が近づいても恐れず見ている。ハシボソガラスともども一年中生息している。繁殖する。

(16) その他の野鳥

以上のほか、ミゾゴイ、チュウサギ、ウミアイサ、ヒドリカモ、ハヤブサ、チョウゲンボウ、クイナ、ヒクイナ、ムナグロ、ダイゼン、タゲリ、ハマシギ、オオソリハシシギ、アオアシシギ、ソリハシシギ、ダイシャクシギ、ホウロクシギ、ウズラシギ、ツツドリ、アジサシ、コアジサシ、オオコノハズク、イワツバメ、コシアカツバメ、アカモズ、トラツグミ、オオヨシキリ、コヨシキリ、メボソ、エゾビタキ、サメビタキ、ツリスガラ、ヤマガラ、クロジ、ベニヒワ、ウソなども飛来する。

以上、玄海町内に生息する野鳥を挙げたが、実際にはもっと多数生息しているはずである。従って、ここに書き加えられなかった種については、今後の調査や資料提供で明らかになることであろう。その折には、必ずきちんとした記録を残しておかれたい。

参考文献

◆『馬渡島の生物』（福田司、一九七二年）◆『東松浦の野鳥』（鴨川誠、福田司、一九七九年）◆『佐賀の野鳥』（佐賀県環境整備課、一九七八年）◆「佐賀の野鳥たち」（福田司、一九七六年から朝日新聞地方版連載分）◆「佐賀の野鳥」（福田司、一九八四年から佐賀新聞連載分）◆「虹の松原とその周辺の野鳥」（福田司、「新郷土」に連載分）◆『生物大図鑑　鳥類』（世界文化社）◆『日本の野鳥』（日本野鳥の会）◆『原色鳥類図鑑』（小林桂助、保育社）◆『日本産鳥類図鑑』（東海大出版会）◆『日本鳥類図説』（内田清之助、講談社）◆『日本鳥類大図説』（清棲幸保、講談社）◆『野鳥識別ハンドブック』（高野伸二、日本野鳥の会）◆『日本の野鳥』（高野伸二、山と渓谷社）◆『A. Field Guide to the BIRDS of South-East Asia』

第三項　玄海町の植物

概況

玄海町の海岸は玄界灘に臨み、対馬暖流の影響を受けて一年中温暖。海岸地帯および山の下層部はシイ、タブ、アラカシなどの常緑樹林で覆われ、台湾、琉球あたりから北上して分布している樹木や草本類が多い。またこれらの植物の中には、さらに東北に進んで本州、四国、関東地方まで及んでいるものもある。

これらの海岸地域や山の下層部に分布する植物を一括して暖地性植物と呼び、そこには常緑広葉樹林で占められ、特色ある暖地性の植物が分布している。

外津、有浦下、有浦上、轟木、牟形、座川内さらに湯野尾まで続く台地は、百メートル前後の山々が海岸線近くまで迫っていて、そのほとんどは畑や果樹園に開墾され、自然林が残っている所はほとんどないといってよい。わずかに残っている山林でも、燃料用の薪として何度も伐採された二次林、三次林で、そのほとんどは雑木林。タブノキ、シロダモ、マテバシイ、スダジイ、ツブラジイ、ヤブニッケイなどの常緑樹が優先種となっている。

これらの樹木に混じってヤマモモ、ホルトノキ、ヤブツバキ、クロキなどが見られ、さらにナワシログミ、アキグミ、マンリョウ、タマゴバアリドオシ、クチナシ、オオイタビカズラ、イタビカズラ、テイカカズラなどの低木やつる性植物が自生している。

草本類では、コウボムギ、ハマグルマ、オカヒジキ、ダルマギク、ホソバワダンなどの海岸性のものから、ムサシアブミ、ノシラン、ヤブラン、ジャノヒゲなどの林内植物や、オドリコソウ、スミレ、キジムシロ、ハルノ

ノゲシ、オオバコなどの路傍の植物も見られる。

これらの中で、注目されるものに、暖地性の樹木では、分布が県西部に片寄るハマセンダン、唐津―肥前町星賀の線が分布の北限に当たるアオモジ、本県が分布の南限となっているツクバネウツギ。草本類では、暖地性のチクシキケマン、旧満州・朝鮮系のキクタニギク、県下でも分布が非常に少ないラン科のナギランなどがある。

一　木本類

東松浦半島は、高い山や深い谷などが少なく、小高い山や丘陵地が多いため、人手が入りやすく、そのほとんどが開墾されて畑やミカン園、あるいは杉などの植林地となっている。また、わずかに残っているマテバシイ、スダジイ、アラカシなどの雑木林も、昔から繰り返し伐採されてきたために、そのほとんどが樹齢の若い二次林となっている。

そのため原生林、自然林と呼ばれるものがほとんどなく、わずかに神社や神社周囲の森に残されているていどのため、神社や神社の森を中心に植物誌をまとめることにしたが、これが玄海町の植物の一般的姿とみてよい。

(1)玄海町樹木林の特徴

東松浦半島は、暖帯林の常緑広葉樹林帯（照葉樹林）の中にあって、アラカシ、スダジイ、ツブラジイ、タブノキ、シロダモ、ヤブニッケイ、マテバシイなどの樹木がそのほとんどを占めている。

玄海町でも町全体の木本類の分布を見ると、同じようなことがいえる。神社の森とか、点在する雑木林にはスダジイやマテバシイが大半を占め、海岸近くの神社や森になると、アラカシなどが多く見られる。

(2)巨木の部

町内の山林部にはこれという巨木は少ないが、代々聖域となっている神社、仏閣の境内、あるいはこれに隣接

する森には、すばらしいものが残っている。開発が進められて名木、巨木が少なくなっているとき、地域の信仰の対象、財産としても永久に残されるよう期待したい。

㋐クスノキ（くすのき科）の巨木

県木がクスノキであるように、県内にはいたる所にクスノキの自生が見られる。県の天然記念物に指定されている川古（武雄市）や佐嘉城跡のクスノキは見事な巨木であるが、玄海町にも神社などにクスノキの巨木を見ることができる。

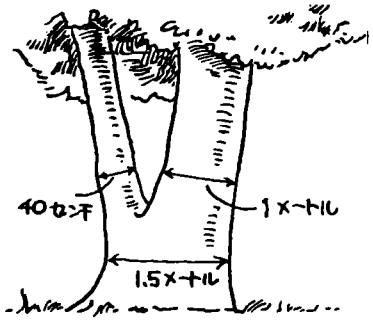
●天満神社（有浦上）のクスノキ（写真No.一）

同社の広場の南側に一〇本の大木が西から東へと一列に並んでいる。その中で一番大きいのは胸径一㍍、高さ約八㍍ある。

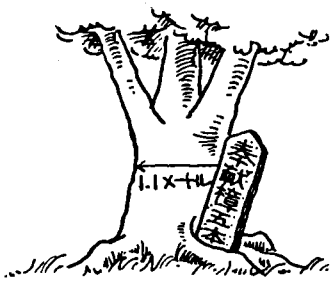
●若宮八幡神社（諸浦）のクスノキ（No.2）

境内の西側に数本植わっているが、最大のものは胸径一㍍一〇、高さ一〇㍍。地上一・五㍍の所から三本に枝分かれをしている。根は四方に広がり、そのためにかたわらに立ててある石柱（「奉献樟五本還暦記念」の銘）を巻き込んでいる。珍しいので、このまま保存してほしいと思う。

㋑スダジイ（ぶな科）の巨木



天満神社（有浦上）のスダジイ



若宮八幡神社（諸浦）のクスノキ

●天満神社（有浦上）のスダジイ（No.3）

地上一㍍ほどの所から二つに枝分かれして、一方の枝の幹は、胸径（大人の胸の高さくらいの所の幹の直径）一㍍、もう一方の幹の胸径は四〇㌢、高さ一〇㍍の巨木。

●有浦神社（有浦下・権現山）のスダジイ（No.4）

胸径一㍍一二、高さ一二㍍、地上六㍍の所から左右に枝分かれして、根元には実生苗が生長したと思われるスダジイ（胸径二〇㌢、高さ一〇㍍）を抱き込んでいる。

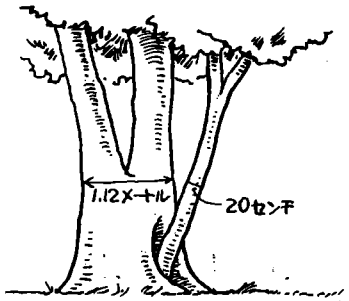
もう一本は胸径一㍍、高さ八㍍、地上から一・五㍍の高さの所から二本に枝分かれをしている。

●厳島神社（仮屋）のスダジイ（No.5）

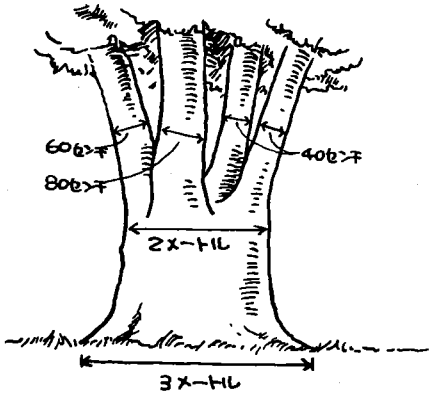
胸径一㍍、高さ七㍍、樹齢百年以上はあろうか相当古い木で、上の方の幹は老木のためか折れている。長い石段の中腹の左手に立っている。

●大山祇神社（田代・大権現）のスダジイ（No.6）

ここには大きなものが二本あるが、そのうちの一本は胸径二㍍、根元の直径三㍍、高さ八㍍もある巨木である。地上一・五㍍の所で四本に枝分かれし、それぞれの枝の直径が八〇、六〇、四



有浦神社（有浦下）のスダジイ



大山祇神社（田代）のスダジイ

No.3　天満神社(有浦上)のスダジイ

No.2　若宮八幡神社(諸浦)のクスノキ

No.1　天満神社(有浦上)のクスノキ

No.7　小加神社(小加倉)のスダジイ

No.5　厳島神社(仮屋)のスダジイ

No.4　有浦神社(有浦下・権現山)のスダジイ

No.6　大山祇神社(田代・大権現)のスダジイ

〇、四〇センチとなっている。もう一方は胸径一メートル、高さ一〇メートルもある。

このほかに胸径八〇、七〇、六〇、五〇センチなどの巨木がずらりと生育している。

●小加神社（小加倉）のスダジイ（No.7）

鳥居のすぐ後ろの石段の側に、大きな二本のスダジイが接近して立っている。ちょっと見ると一つの根元から二つに枝分かれした連理のスダジイのようであるが、それは両方の根元がくっついていて、一つの根のように見えるためであって、別々の樹木である。

大きい方は胸径一メートル二〇、高さ一〇メートル。小さい方は胸径一メートル、高さ一〇メートル、根元の直径が六メートルもある。

●白山神社（値賀川内）のスダジイ

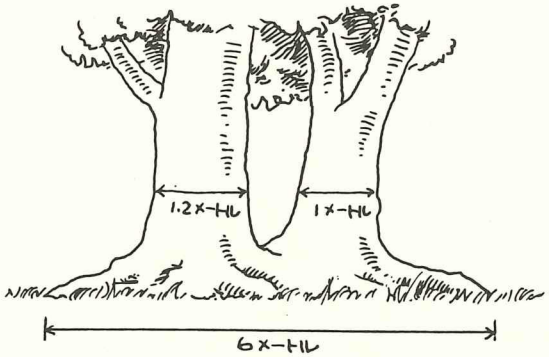
神社左手の裏にあり、胸径一メートルから四〇センチまでのスダジイが点在している。その中で一番大きいものは、胸径一メートル三〇、高さ一二メートルのものである。

㋒タブノキ（くすのき科）の巨木

暖帯林を形成する主木の一つ。山野に自生し、特に海岸近くでは普通に見られる樹木。葉は蚊取り線香に、樹皮は仏事用の線香などにも利用される。

●大山祇神社（大薗）のタブノキ（No.8）

神社には、胸径三〇センチ以上のタブノキが六本ほどある。その中で一



小加神社(小加倉)のスダジイ

番大きいものは、胸径一㍍二〇、高さ八㍍。地上に出ている根元の広がりは、直径三㍍もある。

木の高さの半分ほどの所で上の方の幹が折れ、折れたところから小枝が伸びて今のような樹形になったようだ。

ここから少し西の方のやぶにはこれより小さいが、胸径一㍍、高さ八㍍のものがある。これも幹の上の方が朽ちたようになっている。根元には、高さ五㍍のヤブツバキを抱き込んでいる。

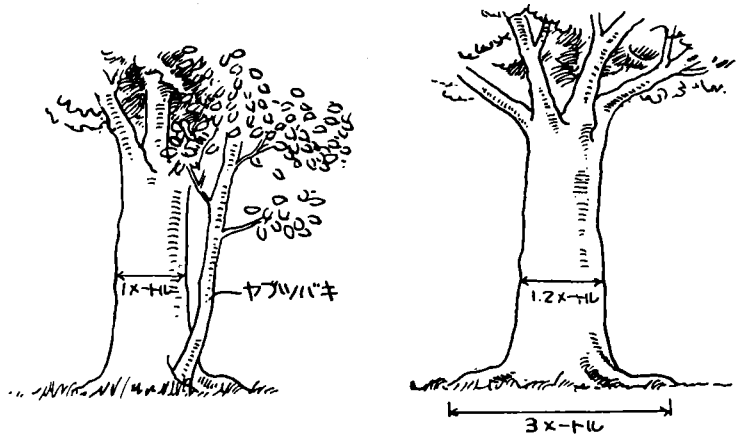
㋓ホルトノキ（ほるとのき科）の巨木

ホルトノキはヤマモモによく似た樹木であるが、千葉県以西の四国、九州に分布する。県内では東松浦郡、唐津市、伊万里市などの沿海地に多い。

しかし巨木といわれるものは、神社や公園などにしか残っておらず、とくに玄海町では大薗の大山祇神社のものが最大である。次いで、牟形の八幡神社入口の右手にあるもので、先の方の大きな枝を切り落とされているが、立派なものである。

●大山祇神社（大薗）のホルトノキ（No.9）

ここには、胸径四〇㌢以上のものが七本ほどあり、その中



大山祇神社（大薗）のタブノキ

でも　一番大きいものは、神社裏側の民家の前のもので、胸径一㍍一〇、高さ一〇㍍もある。

●八幡神社（牟形）のホルトノキ（No.10）

社の石段上の右手にあるもので、胸径一㍍、高さ八㍍、むくむくと地上に盛り上がった根茎は四方に広がり、その広さは直径六㍍ほどもあり、根の張り具合や四方に広げた枝ぶりは見事である。

㋔ムクノキ（にれ科）の巨木

山地に生えるが、社寺の境内、路傍に普通に見られる樹木である。

玄海町では浜野浦から大薗、座川内、湯野尾などに大きな木のまとまりが見られる。

果実が甘いので子供も食べ、ムクドリなどの小鳥にはよいえさとなる。

●常楽寺（有浦上）下のムクノキ

常楽寺下の金比羅堂に続く道のわきに、胸径一㍍、根元の直径一㍍五〇、高さ一〇㍍のムクノキがある。

町内最大のムクノキのようである。

(3) 珍木の部

ここでは県内でも分布まれな樹木や、他地区には分布しているが、玄海町では分布がまれだという、珍しい樹木について調べてみた。

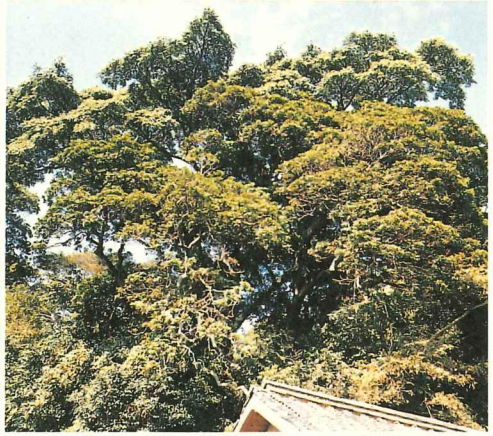
㋕イスノキ（まんさく科）

各地の山に生育する常緑高木。玄海町にも普通に見られる。

●鎮守神社（湯野尾）のイスノキ（No.11）

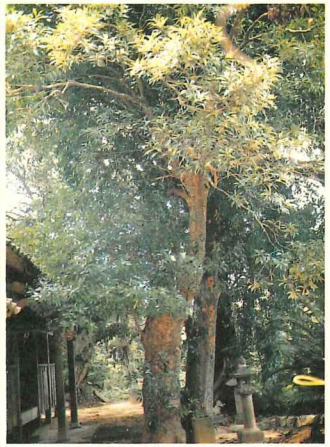
第二の鳥居をくぐると、石段の両側にそれぞれ一本ずつ植えてある。左手の方（東側）がやや大きく胸径

No.11 鎮守神社(湯野尾)のイスノキ



No.8 大山祇神社(大薗)のタブノキ

No.14 白山神社のケヤキ



No.12 有浦神社(有浦下)のカゴノキ

No.9 大山祇神社(大薗)のホルトノキ

No.13 有浦神社(有浦下)のカシワ

No.10 八幡神社(牟形)のホルトノキ

六〇㌢、高さ一二㍍。右手のものが胸径五〇㌢、高さ一二㍍ほどある。この木の葉には虫が寄生し、大きいものでは赤子のこぶし大の虫えい（こぶ状にふくれたもの）を作るので、この虫えいを取って開いた穴から息を吹くと、ヒョウと鳴るのでヒョンノキともいう。

●大歳神社（浜野浦）のイスノキ

胸径六〇㌢、高さ八㍍、胸径三〇㌢、高さ六㍍、胸径二〇㌢、高さ六㍍ほどの大きいのが三本植わっている。

㋖カゴノキ（くすのき科）

●有浦神社（有浦下）

社殿の前に植樹されている（No.12）。各地にあるが、胸径六〇㌢、高さ八㍍の大きいものは町内では珍しい。樹皮が円い薄片となって落ち、その跡が白く鹿の子文様になるので、カゴノキ（鹿子の木）といわれている。

㋗カシワ（ぶな科）

●有浦神社（有浦下）のカシワ（No.13）

鳥居をくぐると参道のすぐ右手に植えられている。ここのカシワは胸径三〇㌢、高さ六㍍ほどのもので、おそらくここの神社を建てるときに、植えられたものであろう。

各県に自生し、以前は県内に自生が少ないといわれていたが、現在は天山、七山村滝川、桑原のわずか三カ所に自生が確認されている。社域などのほか、人家にも　植えられている。

カシワとは炊葉の意味で、葉で食物を包んで蒸したり、葉の上に食物をのせたり、それを神仏に供えたり

するために以前はよく使われていた。

㋕ケヤキ（にれ科）

日本各地の山野、川岸、社寺の境内に普通に見られる樹木である。

●白山神社（値賀川内）のケヤキ

町内でも各地で見かけるが、ここのが一番大きい。真っすぐに伸びた樹形はすぐ目につくが、石段を上がりこの木のかたわらまで行くと、あらためてその高さにびっくりさせられる。およそ二〇㍍はあろうか、胸径約五〇㌢。（No.14）

湯野尾にもケヤキの大木がある。胸径四〇㌢、高さ一〇㍍のが二本植わっている。ほかにムクノキもあり、道路際のこの場所は、村人の話では、元禄時代の墓があったというので、寺社の跡かもしれない。

また、ケヤキとはケヤケキ木。すなわち目立つ、際立つ木の意味という。他の木よりも真っすぐに抜きん出て遠くからでもすぐにそれとわかる。町制施行三十年記念に「町木」に選ばれた。

㋖ナギ（まき科）

●有浦神社に生育しているもので、カゴノキの横に並べて植えられている。胸径五〇㌢、高さ一〇㍍ほどあり、ここの木は雌木で八月ごろには実をいっぱいつける。

一般に暖帯のもので、国内では山口県から南の四国、九州に分布しているが、県内には自生のものはない。一般に古代から社叢に植えられ、千年くらい生きる長寿の樹木である。有毒植物でウサギやシカはこの葉を食べない。葉は横に切れないくらい強いのでチカラシバの別名もある。

㋗バクチノキ（ばら科）

本州（関東以西）、四国、九州の南の方に分布するもので、県内では主に県の西部から南部にかけて分布している。バクチノキは幹肌の紅黄色（赤さびの色）から、すぐそれとわかる。

町内では座川内の道路ぞいに、シロダモ（胸径一五㌢、高さ六㍍）、ムクノキ（胸径三〇㌢、高さ八㍍）と並んで生育している。胸径二〇㌢、高さ六㍍くらいの中木である。玄海町では、この大きさのは珍しい。

バクチノキの名の由来は、樹皮が鱗片状に離れて落ち、樹肌が紅黄色の斑紋となることからきたもので、樹皮がはがれるのを博奕打ちが、ばくちに負けて裸になるのに例えたといわれている。

㋙ハルニレ（けやき科）

●有浦神社の東側に一本生育している。（No.15）

道路から見上げると、ちょうど桜の木が立っているように見える。この木が一般にニレとも呼ばれるもので、植樹されたものと思われるが、神社の東側の土手の傾斜地に生育している。地上二㍍ほどの所で二本に大きく枝分れをしている。その一本一本の幹の直径は四〇㌢ほど。胸径一㍍一〇、高さ一〇㍍ほどの巨木で、分布まれな樹木である。

県内では武雄市、有明町、塩田町、嬉野町、鹿島市の五カ所で確認されているくらいの少ない樹木。日本では北国に多い落葉高木である。

二　草本類

玄海町で注目されるのにキクタニギク（アワコガネギク＝きく科）があるが、玄界灘に接する本町では山野、路傍の植物とともに、海岸（海浜）植物にも目を向けなければならない。

(1) 山野、路傍の植物

早春に海岸の土手、道路のかたわらなどに見られるものに、野性化したスイセン、スミレ、コスミレ、フモトスミレ、ナズナ、カラクサナズナ、オオイヌノフグリ、イヌノフグリ、フラサバソウ、オドリコソウ、セイヨウタンポポ、シロバナタンポポ、ハルノノゲシ、キランソウ、ナンテンハギ、メハジキ、ルリハコベ、ナンバンギセル、ハナミョウガ、アキノタムラソウ、チクシキケマン、トウダイグサ、ウツボグサ、ヤクシソウ、ホトケノザ、ヒガンバナ、ムサシアブミ、ヤマハギ、ツクシハギ、ニシキハギ、オグルマ、キセワタ、カエデドコロ、レモンエゴマ、ハッカ、ヤマジノギク、コオニユリ、キジムシロ、ヒメハギ、ヤハズソウ、ウマゴヤシ、コメツブウマゴヤシ、ネコハギ、メドハギ、ヌスビトハギ、オオバヌスビトハギ、コマツナギ、ミソナオシ、ミヤコグサ、クサネム、カワラケツメイ、キランソウなどがある。とくにここで注目されるのは、キクタニギクが自生していることである。

これまで、本県だけでなく九州各地でも、シマカンギクだけが分布していると考えられていたが、昭和二十九年(一九五四)ごろ、仮屋湾周辺で採集されたキク科の植物の中に、従来のシマカンギクとは異なるものがあることがわかり専門家に調べてもらったところ、キクタニギクであることがわかった。

キクタニギク(No.16)は、別名アワコガネギクともいうように、シマカンギクよりやや小さい黄色い花を多数つけ、花茎を深々と垂れて、まるで黄色の泡が密集しているように見える。

このキクは中国北部、旧満州、朝鮮には広く分布し、日本では関東、近畿、対馬、壱岐に分布していて、日本海沿岸や北海道、中国、四国にはなく、九州では仮屋とほか二、三カ所が知られている程度であったが、その後の調査で、県内では東松浦郡、唐津市の西北部、伊万里市の一部にも分布していることがわかった。

唐津市浦と玄海町仮屋を結ぶ線以北には、キクタニギク、シマカンギクの分布が重なるところが多く、浜野浦、

大薗、仮屋などには、両者が隣り合わせに混生しているところが多い。

ススキの生える山すそ、道路側の土手、波しぶきのかかるような道路際(仮屋)などに、九月の中ごろから十一月にかけて、小さい黄花を咲かせているのが見つかる。キクタニギクである。シマカンギクはこれより少し遅れて、十月ごろから咲き出し、十二月の終わりごろまで花が残っている。

他に仮屋では、県内でも非常に分布のまれな、ラン科のナギランの自生が確認されている。

(2)海岸性の植物

玄界灘(げんかいなだ)にのぞむ玄海町には、いろいろな海岸性の植物が自生している。ここでは、その海岸の浜辺から内陸までの植物を、水平に見ていくことにする。

値賀崎、仮屋の海岸にはハマニガナ、コウボムギ、オカヒジキ、タイトゴメ、ダルマギク、ケカモノハシ、ハマウド、ソナレムグラ、ハマボッス、ハマゴウ、ホソバノハマアカザ、ハマゼリ、ボタンボウフウ、ホソバワダン、ツルソバ、ハマサオトメカズラ、ハマベノギク、ハマエノコロ、クコ、ハチジョウススキ、アイアシ、ヒトモトススキ、トキワススキ(牟形)、キスゲ、テンツキ、ナガボテンツキ、イソヤマテンツキ、ヤリテンツキ、ヤマイ、海岸から離れるとキセワタ、オオヒナノウスツボ、オオフユイチゴ、ナンテンハギ、ツタウルシ、ツルマメ、ハッカ、ヤマジノギク、オグルマ、コオニユリなどが見られる。

(3)その他の植物

コケ類

この中には鮮苔類、地衣類も含む。家の周りから庭、田、畑の周囲、道路の土手、ミカン園、池の周囲などあらゆる所にコケが生えているが、一般的に次のようなものが見られる。

ゼニゴケ、ケゼニゴケ、ジャゴケ、ハイゴケ、ヒョウタンゴケ、コスギゴケ、スギゴケ、ホソバオキナゴケなど。

シダ類

以前、仮屋に自生し、数が少なかったタマシダは絶滅したのか、自生が見つからなくなった。湯野尾の鎮守神社の森には、町内では他に見つけられなかったサイゴクイノデが自生しており珍しい。

町内には全般的に、同じようなシダが分布しているが、次のようなものがある。

ヒメクラマゴケ、トウゲシバ、ヒカゲノカズラ、スギナ、コシダ、ウラジロ、フモトシダ、イシカグマ、オオカグマ、オニヤブソテツ、ヤブソテツ、ベニシダ、オオイタチシダ、クマワラビ、オオクマワラビ、ホラシノブ、タチシノブ、ホソバカナワラビ、コバノカナワラビ、チャセンシダ、ホシダ、ミゾシダ、コモチシダ、ノキシノブ、マメズタ、コハシゴシダ、ヒカゲノワラビ、カタヒバなど。

淡水草

玄海町には、自然にできた湖や池はないが、かんがい用のため池は数多い。こうしたため池や湿田、湿地、有浦川などの川の流域に生育する沈水性や、湿地性の草本類には、次のようなものがある。

ウキクサ、アオウキクサ、クロモ、トチカガミ、ウリカワ、ミズオオバコ、エビモ、ヒルムシロ、ヤナギモ、

コナギ、オオカナダモ、ミジンコウキクサ、フトイ、ヒメサルダイコ、コシロネ、キカシグサ、アカバナ、チョウジタデ、アリノトウグサ、サワヒヨドリ、コバノウシノシッペイ、イヌビエ、タイヌビエ、コガマ、ドロイ、イ(トウシンソウ)、クサイ、イボクサ、カモジグサ、コヌカグサ、ヌカボ、スズメノテッポウ、セトガヤ、コブナグサ、カモジグサ、ヤマカモジグサ、ヤマアワ、トボシガラ、サツマスゲ、テンツキ、ナガボテンツキ、ヤマイなど。

三　社寺林の植物相

木本類では、玄海町内で、特に目立った巨木や分布上珍しい樹木を挙げてきたが、ここでは、こうした樹木を保護してきた神社や寺の植物相を記すことにする。

(1)値賀神社（下宮）の植物相

以前の社叢は現在よりもっと広く深い森だったが、樹木が伐採されて周囲の民家や畑が見える風通しのよい社叢となっている。それでもいくつかの大きな樹木は残っており、神社の古さを物語っている。

木本類ではスダジイ(胸径八〇㌢、高さ一〇～一五㍍のもの三本。胸径五〇㌢、高さ一〇～一五㍍のもの十本。胸径三〇㌢、高さ七㍍のもの三本)、その他大きなものとしてクスノキがあり、残りは中木から低木のもの。ヤブツバキ、ホルトノキ、クロキ、カクレミノ、トベラ、クロマツ、ツブラジイ、タブノキ、ヤブニッケイ、マテバシイ、ヒサカキ、ハマビワ、アオキ、ネズミモチ、アラカシ、クチナシなどがある。

草本類ではわずかにフウトウカズラ、チクシキケマン、ハナミョウガ、ツワブキ、シマカンギクなどが自生している。

(2)大歳神社（浜野浦）の植物相

神社の南東側から南、西、北側までの斜面は、スダジイとマテバジイが多く、これにアラカシ、ホルトノキなどが混生している混交林。スダジイとマテバジイの群度がほとんど同じのため、スダジイ、マテバシイ混交林といってよい。シイ、カシの萌芽林でもある。

神社は森の中にあって、社叢は神社をとりまく形で斜面をなしている。

木本類では、スダジイ、アラカシなどのほかマテバジイ（胸径六〇㌢、高さ一〇㍍。胸径三〇㌢、高さ八㍍三本。そのほか胸径三〇、二〇、二〇㌢の三本立ちで高さ八㍍のものが三本など、途中から株分かれして連立しているものが多い）、クスノキ（胸径六〇㌢、高さ八㍍）、タブノキ（胸径二〇～三〇㌢、高さ六～八㍍）、ヤブツバキ、シロダモ、ムクノキなどがある。

神社右手（北側）にイスノキ（胸径六〇㌢、高さ八㍍。胸径三〇㌢、高さ六㍍、胸径二〇㌢、高さ六㍍の三本）、ケヤキ（胸径六〇㌢、高さ一〇㍍）、カラスザンショウ（胸径八〇㌢、高さ八㍍。胸径四〇㌢、高さ八㍍のが六本）、ツブラジイ（胸径六〇㌢、高さ八㍍）、ホルトノキ、シロダモ、トベラ、タブノキ、イヌビワ、ヤマハゼ、ハマセンダン、ヤブニッケイ、マサキ、エノキ、クチナシ、ニワトコ、ツルウメモドキ、ハマビワ、オオイタビカズラ、テイカカズラなど。

草本類ではキクタニギク、シマカンギク、ツワブキ、ヒメヒオウギズイセン、ヘクソカズラなど。

(3)大山祇神社（大薗）の植物相

国道204号横にある大山祇神社の社叢には、大きな樹木が繁茂して昼間でも薄暗く、そのため、林床の植物はほとんどなく、わずかに林縁にヤマアイ、ムサシアブミなどが生えているていど。

木本類ではホルトノキ、ムクノキ、タブノキ、クロガネモチの巨木が多く、その大きさは他に見ることができないものばかりである。

ホルトノキ（胸径一㍍一〇、高さ一〇㍍。胸径七〇㌢、高さ一〇㍍。胸径五〇㌢、高さ六㍍が二本。胸径八〇㌢、高さ一〇㍍。胸径四〇㌢、高さ一〇㍍が二本）、タブノキ（胸径一㍍二〇、高さ八㍍。胸径七〇㌢、高さ一〇㍍。胸径六〇㌢、高さ八㍍。胸径三〇㌢、高さ一〇㍍のが各一本。胸径五〇㌢、高さ六㍍が二本。胸径四〇㌢、高さ八㍍が二本）、ムクノキ（胸径六〇㌢、高さ八㍍。胸径四〇㌢、高さ六㍍のが各一本。胸径五〇㌢、高さ一〇㍍。胸径五〇㌢、高さ八㍍が三本。胸径四〇㌢、高さ八㍍が二本）、シロダモ（胸径六〇㌢、高さ一〇㍍。胸径五〇㌢、高さ一〇㍍）、ヤブツバキ（胸径四〇㌢、高さ八㍍が二〇㌢、高さ六㍍が三本。それよりやや小さいものが三本）、クロガネモチ（胸径六〇㌢、高さ一〇㍍）、そのほか胸径五〇㌢、高さ一〇㍍級のカラスザンショウ、スダジイ。それより小さいマテバシイ、チシャノキ、ハマクサギ、ハマセンダンなどが生えている。

低木ではネズミモチ、ムラサキシキブ、イヌビワ、ニワトコ、サンゴジュ、マサキ、トベラ、ハマビワ、ヤマハゼ、テイカカズラ、ツルコウゾ、イタビカズラ、ツタウルシなど。

草本類ではヤマアイ、ムサシアブミ、ツワブキ、ヤブラン、カラムシ、フウトウカズラ、イノコヅチ、ヤブミョウガ、ハナミョウガ、ナワシログミ、ツクシキケマン、オニヤブマオなど。

シダ類ではホシダ、ホラシノブ、イシカグマ（No.17）、トラノオシダ、カニクサなど。

(4)天満神社（大薗）の植物相

タブノキ（胸径一㍍、高さ一〇㍍。胸径四〇㌢、高さ八㍍。胸径二〇㌢、高さ八㍍）が各一本、胸径五〇㌢、高さ八㍍が二本。ムクノキ（胸径八〇、七〇、六〇㌢、それぞれの高さが一〇㍍）、スダジイ（胸径六〇㌢、高さ一〇㍍）、マ

テバジイ（胸径四〇㌢、高さ八㍍）、ヤブツバキ（高さ八㍍、胸径がそれぞれ三〇㌢が九本、二〇㌢のが二本）、イヌビワ、サンゴジュ、ネズミモチとモウソウダケが自生しており、草本類はほとんど見られず、木本類以外には見るべきものがない。

(5)三島神社（石田）の植物相

仮屋湾に浮かぶ砂岩の層の上にできた社叢（しゃそう）で、暖帯性特有の植物が自生している三島神社境内である。この中で注目すべきものは、ツクバネウツギである。花の下のがくが四、五個に分かれ、そのがくの形がお正月につく羽子つきの羽根に似ているので、ツクバネウツギとつけられたという。本州、四国に多く自生し、九州では本県と宮崎県に分布が知られている。本県の自生地は、まだ数カ所しか知られていない。

また社叢は高木のスダジイがほとんどで、一見スダジイ林のように見えるが、中に低木のマテバシイ、カクシミノなども混じる混交林となっている。（No.18）

木本類ではスダジイ、ツブラジイ、マテバシイ、ネジキ、コバンモチ、モッコク、クロキ、モチノキ、ネズミモチ、アラカシ、ナナミノキ、ハクサンボク、ヤマハゼ、イヌビワ、タイミンタチバナ、カクレミノ、タブノキ、シャシャンボ、ヒサカキ、ニシキハギ、ツクシハギ、ハマセンダン、ツクバネウツギなどが自生している。

草本類では特別なものに、キクタニギク（きく科）が自生している。国内的にも特異な分布を示し、九州でも本県の東松浦半島を中心に、局地的に生育している。本町では三島神社周辺を中心にして、シマカンギクと混生しながら生育している。このほかシュンラン、ヤブラン、ノシラン、ジャノヒゲ、ヤブコウジ、ヌスビトハギ、ツワブキ、ハマボッス、ツルナなどの草本類が自生している。

シダ類ではウラジロ、コシダ、ワラビ、ゼンマイ、オオカグマ、ヒトツバ、マメヅタなどがあり、特にここは

No.19 天満神社（有浦上）のイチョウ

No.17 大山祇神社（大薗）のイシカグマ

No.15 有浦神社のハルニレ

No.18 三島神社のスダジイ混交林

No.16 キクタニギク

No.21 若宮八幡宮（諸浦）の樹木類

No.20 常楽寺（有浦上）のイセハナビ

ヒトツバの大群落地となっていて、これだけの集団自生地は珍しい。

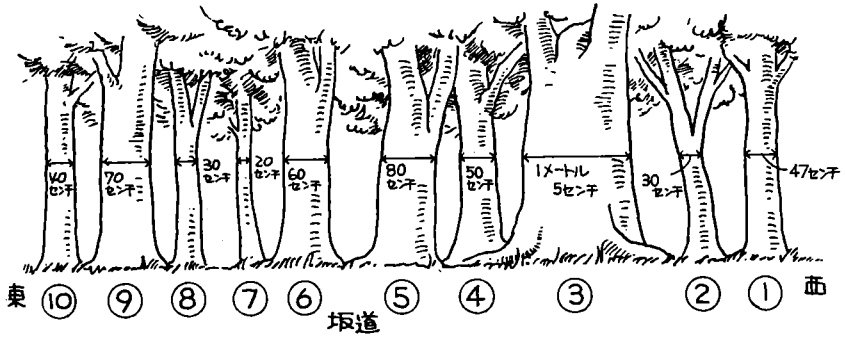
(6)天満神社（有浦上）の植物相

県道から見上げると、十本ほどのクスノキが見える。明治二十五年十一月吉日銘のある天満神社の鳥居をくぐると、左手に大きなイチョウが二本（胸径六〇㌢、高さ一六㍍・胸径七〇㌢、高さ一八㍍）植えられている。（No.19）

石段の正面には、大きなコブのできた古木といった感じの大きなスダジイ（胸径一㍍一〇、高さ一二㍍）が、どっしりと腰を落ちつけている。

神社の広場には西から東側にかけて一列に、クスノキの大木が並んでいる。西側から数えて三番目のが一番大きい。次いで大きいのが五番目、次が九番目。一番から十番目までの大きさは次の通りである。

一番＝胸径四七㌢、高さ六㍍。
二番＝胸径三〇㌢、高さ六㍍。
三番＝胸径一㍍五㌢、高さ八㍍。公民館建築のため妨げになると太い枝が切られた。
四番＝胸径五〇㌢、高さ八㍍。
五番＝胸径八〇㌢、高さ八㍍。
六番＝胸径六〇㌢、高さ一〇㍍。
七番＝胸径二〇㌢、高さ六㍍。



八番＝胸径三〇㌢、高さ六㍍。
九番＝胸径七〇㌢、高さ一〇㍍。
十番＝胸径四〇㌢、高さ一〇㍍。

このほかツブラジイ、イヌビワ、タブノキ、ヤマハゼ、植樹されたスギが生育している。

(7)常楽寺（有浦上）の植物相

天満神社から有浦まで坂道を下った所で、左に大きなムクノキが見える。胸径一㍍、高さ一〇㍍、根回りの直径一㍍五〇以上はある巨木。

ここから少し下ると、土手の下に大きなイチョウの木がある。下の方から三つに枝分かれして大きく枝を伸ばしている。常楽寺周辺はいろいろな面白い植物が生育している。

寺の入口の階段のたもとに、八月ごろ白かピンクの小さな花をつけるイセハナビ（No.20）が群生している。もともと中国から渡ってきたもので、栽培品ではあるが、珍しい植物である。

木本類ではムクノキ、ヤブツバキ、イヌビワ（イッソク）、イチョウ、タブノキ、シロダモ、ヤブニッケイ、アオキ、コリヤナギ、ヤマハゼ、カラスザンショウ、イタビカズラなど。

草本類ではイラクサ（触れると刺がささり痛い）、ツワブキ、キツネノマゴ、ヤブミョウガ、ツユクサ、カラムシ、カタバミ、ミゾソバ、カラスウリ、ボタンヅル、アキノメヒシバ、タチツボスミレなど。

シダ類ではマメヅタ、イノデ、オオバイノモトソウ、ホシダ、ゲジゲジシダ、クマワラビ、ヤブソテツ、イワガネソウ、イヌシダ、カニクサ、タチシノブ、イヌチャセンシダ、ヒカゲワラビ、ワラビ、ゼンマイ、ホラシノブ、ヒトツバなど。

コケ類ではハイゴケ、ジャゴケ、ゼニゴケ、コスギゴケ、オオスギゴケ、ヒョウタンゴケ、ヒメジャゴケなど。

(8)庚申堂（諸浦）の植物相

木本類では、スダジイ（胸径四〇、四〇㌢の双幹、高さ六㍍。胸径四〇㌢、高さ六㍍。胸径三〇㌢、高さ六㍍）、ハマセンダン（胸径四〇、三〇、三〇㌢の三つに幹が分かれ、高さ一〇㍍）、モチノキ、ツブラジイ、ヤブツバキ、クロキ、ハクサンボク、イヌビワ、ソメイヨシノ、クスノキなどが生え、草本類、シダ類はほとんどない。

(9)若宮八幡神社（諸浦）の植物相

有浦川のかたわらにあり、人為的に植えられた樹木類が多い。（No.21）

木本類ではクス（胸径一㍍、高さ一〇㍍。胸径八〇㌢、高さ一〇㍍。胸径五〇㌢、高さ八㍍。胸径四〇㌢、高さ六㍍。胸径二〇㌢、高さ六㍍の五本）、ケヤキ（胸径四〇㌢、高さ八㍍一本、この大きさのは珍しい）、スギ（胸径三〇㌢、高さ八㍍のが二本）、アラカシ、タブノキ、エノキ、ニワトコ、ノイバラ、ネコヤナギなど。

草本類ではジュズダマ、ヒメジョオン、ノチドメ、アレチマツヨイグサ、ヤブガラシ、セイヨウタンポポ、ノビル、オオイヌノフグリ、スイバ、カラスノエンドウ、ソクズ、フラサバソウ、タネツケバナ、ミゾソバ、ハナイバナ、ヒメウズ、センニンソウ、ヨモギなど。

シダ類ではイノモトソウ、カニクサなど。

(10)金比羅神社（長倉）の植物相

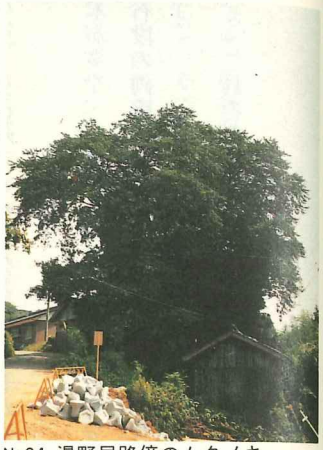
集落の家並から屋根が見える金比羅神社にもいろいろな樹木が生育している。

立派なのはヤマモモ、モッコク、クロガネモチなど。ヤマモモは胸径六〇㌢、高さ八㍍。地上一㍍二〇ほどのところから大きく四つに枝分かれしている。町内では一番大きいようだ（No.22）。モッコクは胸径四〇㌢、高さ六

No.23 大山祇神社（長倉）のスダジイ・イヌマキ

No.22 金比羅神社のヤマモモ

No.25 諏訪神社（牟形・大串）のヤマハゼ


No.24 湯野尾路傍のムクノキ

No.27 天狗岳南斜面のマテバシイ林

No.26 大山祇神社（田代・大権現）のシイ・カシ

㍍。クロガネモチは胸径四〇㌢と三〇㌢の双幹で高さ一〇㍍。その他、一般的な樹木としてアカメガシワ、マテバシイ、スダジイ、ツブラジイ、クロキ、サカキ、アラカシ、ネズミモチ、ヤブツバキ、ヤマハゼ、ヤブニッケイ、カクレミノ、珍しいコバンモチもある。また、この森の中にはアカシアの大きな木も何本かあり、植樹されたものであろう。

草本類ではヨモギ、ツユクサ、ツボクサ、スミレ、コスミレ、ネコハギ、ヤハズソウ、クサイチゴ、キランソウ、チガヤ、ススキなど。

シダ類ではコシダ、ウラジロ、オオカグマ、ベニシダ、オオイタチシダ、ノキシノブ、マメヅタなど。

(11)大山祇神社（長倉）の植物相

すぐ傍らを有浦川が流れ、反対側は田となり、平地の神社のため、社叢として見るべき樹木はないが、何本かのスダジイやイヌマキの巨木が残っている。(No.23)

木本類では、スダジイ(胸径四〇㌢、高さ一〇㍍)が二本。胸径二〇㌢、高さ八㍍のが二本。胸径四〇㌢、幹の中ほどで朽ちて、そこから直径が三〇、三〇、二〇㌢の直幹が出ているのが一本)、イヌマキ(胸径四〇㌢、高さ一〇㍍)、クスノキ(胸径五〇、四〇㌢の双幹、高さ八㍍)、クロガネモチ、イヌビワなどがある。

(12)鎮守神社（湯野尾）の植物相

この神社周辺は特にムクノキの巨木が多く、社叢(しゃそう)や道路ぎわなどに大きな木が見られる。(No.24)

神社にはイスノキとイヌマキが、石段の両脇に植えられているが、大きな木で他では見られない見事なものである。

木本類はイヌマキ(胸径三〇㌢、高さ一二㍍)、イスノキ(高さ一二㍍、胸径六〇、五〇㌢のが二本)、ムク

ノキ(胸径五〇㌢、高さ一〇㍍、七㍍の二本。胸径四〇㌢、高さ一〇㍍のが二本。胸径三〇㌢、高さ一〇㍍が一本)、カゴノキ(胸径三〇㌢以上、高さ一〇～一二㍍)、その他ケヤキ(四本)、シロダモ、ヤブニッケイ、マテバシイ、チシャノキがある。低木としてエノキ、ハクサンボク、ヤマハゼ、モミジイチゴ、アオキ、ムラサキシキブ、ニワトコ、イヌビワ、マサキ、ヤブツバキ、コウゾ、サンゴジュ、カクレミノ、ツルコウゾ、ハマクサギ、ヒノキなど種類は多い。

草本類ではチヂミザサ、ヤマノイモ、イノコズチ、ムサシアブミ、オモト、フキ、ツワブキ、カラスウリ、ハナミョウガ、ウバユリ、ヒヨドリジョウゴ、ヒヨドリバナ、マルバヌスビトハギなど。

鳥居が二つと、小さい社殿があるくらいのため、社叢(しゃそう)そのものは小規模だが、シダ類は他のところより種類が多い。とはいえ、一つ一つの個体数が少ないのは、社叢の樹木が伐採されたり畑に開墾されたりして、自生地が狭められてきたためだとも考えられる。

唐津、東松浦半島ではほとんど見られないサイゴクイノデ、自生地の少ないヒカゲワラビがそれぞれ四株ほど生育している。その他コバノカナワラビ、ベニシダ、カニクサ、イノデ、マメヅタ、フモトシダ、ノキシノブなどが見られる。

(13)諏訪神社（牟形・大串）の植物相

仮屋湾の大串新田防波堤かたわらの小さな神社。荒廃して、祭りごとはあまり行われていないもよう。社の裏手は開墾され、社叢は縮小されている。それでも暖帯性の特性を残し、他の社叢や森と違って、スダジイやマテバジイに代わりアラカシが優先し、タイミンタチバナ、シャシャンボなどがそれに次ぎ、ヤマハゼ、(No.25)、ネジキ、ヌルデ、コナラ、ヤマモモ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、アカメガシワ、クロキ、ミツバツツジ、クチナシ、

クサギ、マテバシイ、ツブラジイ、モチノキ、ハクサンボク、ナナミノキなどが生えている。

(14)大山祇神社（田代・大権現）の植物相

周囲を田に囲まれた社叢（しゃそう）で、スダジイの巨木が多い。シイ、カシ萌芽（ほうが）林である。（No.26）

木本類ではスダジイ（胸径二㍍、一㍍、高さがそれぞれ八㍍。八〇、七〇、六〇、五〇㌢、高さがそれぞれ八㍍）、ツブラジイ（胸径五〇、三〇㌢、高さ一〇㍍が八本）、クロガネモチ（胸径三〇～一五㌢、高さ八～一〇㍍）、カラスザンショウ、イスノキ、モチノキ、クスノキ、タブノキ、シロダモ、マテバシイ（非常に多い）、クチナシ、ミミズバイ、ネズミモチ、アラカシ、イヌビワ、シャシャンボ、シキミ、ハクサンボク、クリ、ハマクサギ、ムクロジ、ヤマハゼ、エゴノキ、マサキ、クロキ、アオキ、ヤブツバキ、アオモジ、ビナンカズラ、テイカカズラ、サザンカ、ヤブコウジ、ヤツデ、ネムノキ、ホソバタブ、ナツフジ、キヅタ、クサギなどが混生している。

ここの社叢は、東側から北、西側の斜面にかけてスダジイがだんぜん多いので、スダジイ混交林といってよい。

草本類ではツワブキ、ジャノヒゲ、サルトリイバラ、ヤブマオ、オニドコロ、キツネノマゴ、クサイチゴ、ヒヨドリバナ、ヌスビトハギ、ノブドウ、エビヅル、ウマノスズクサ、クズ、アケビ、ムベなど。

シダ類ではイノモトソウ、タチシノブ、クヌワラビ、ヒトツバ、カニクサ、ホソバカナワラビ、ゼンマイ、ホラシノブ、フモトシダ、シケシダ、コシダ、ウラジロ、ベニシダなど。

付記　右に列記した以外の社寺については、いずれもほぼ同様な植物相をしているため、省略した。

四　社寺林以外の植物相

(1)天狗岳のマテバシイ林

唐津市の一部を含む東松浦半島からなる上場台地にはスダジイ、ツブラジイ、マテバシイなどの雑木林が多い。

これらの中でもずっと以前は、シイ林が優先していたのであろうが、マテバシイの方が生長が早く、堅い木ということで、木炭や家庭用の薪としてよく利用されてきた。近来は燃料革命で、これらの雑木は家庭でもあまり利用されないようになったためか、かなり成長したマテバシイの純林か混交林が、あちこちに見られるようになった。

玄海町内では、仮屋の厳島（いつくしま）神社裏手から天狗（てんぐ）岳頂上にかけて、低木にタイミンタチバナ、ヤブツバキが一、二本見られるていどで、面積は広くはないが、マテバシイの純林となっている。（No.27）

(2)路傍の植物相

これまで、町内の巨木や珍木、あるいは社寺林の植物相を見てきたが、ここではそれら以外の山すそや路傍などで見られる一般的な植物について挙げてみる。

木本類ではイボタノキ、カンコノキ、イスノキ、ミツバアケビ、アケビ、ムベ、ウツギ、コガクウツギ、ヒサカキ、マサキ、ノイバラ、テリハノイバラ、ソメイヨシノ、ヤマザクラ、ツクシヤマザクラ、クロガネモチ、ツルウメモドキ、ヤマモガシ、タラノキ、ナンゴクオオクマヤナギ、ネコヤナギ、イヌコリヤナギ、センリョウ、マンリョウ、コバノチョウセンエノキ、エノキ、ヤマハギ、ハマボウ、ネズミモチ、ナワシログミ、アキグミ、マルバグミ、ハマヒサカキ、ハマビワ、トベラ、マルバシャリンバイ、タイミンタチバナ、ハクサンボク、コウゾ、オオイタビカズラ、イタビカズラ、ヒメイタビカズラ、イヌビワ、クヌギ、コナラ、ヌルデ、ヤマハゼ、クロキ、ツタウルシ、キヅタ、テイカカズラ、モチノキ、ニシキギ、コマユミ、ノウルシ、エビヅル、ノブドウ、ヤツデ、クマノミズキ、リョウブ、ヤマツツジ、ネジキ、イズセンリョウ、ハイノキ、クコ、チシャノキ、クサギ、イヌマキ、タマゴバアリドオシ、ジュズネノキ、ヘクソカズラ、スイカズラ、ニワトコ、サルトリイバラ、

イヌガヤ、フウトウカズラ、ヤマモモ、ヤドリギ、センニンソウ、オオツヅラフジ、ツヅラフジ、サネカズラ、ナワシロイチゴ、クサイチゴ、モミジイチゴ、ホウロクイチゴ、フユイチゴ、オオフユイチゴ、ネムノキ、チクシハギ、ヤマハギ、ニシキハギ、クズ、ナツフジ、ヤマフジ、サンショウ、カラスザンショウ、フユザンショウ、センダン、アカメガシワ、ユズリハ、イロハカエデなど。

草本類ではルリハコベ、キセワタ、ヒメサルダイコ、イノコズチ、ハスノハカズラ、ウバユリ、ニガガシュウ、カエデドコロ、ヤマノイモ、オオヒナノウスツボ、オグルマ、ヤマジノギク、ツルアズキ、ヤブマメ、レモンエゴマ、ハナカタバミ、フラサバソウ、オオイヌノフグリ、イヌノフグリ、タチイヌノフグリ、カラクサナズナ、ナズナ、タネツケバナ、オオバタネツケバナ、オニドコロ、コオニユリ、オニユリ、ヌスビトハギ、マルバヌスビトハギ、キスゲ、ハイビユ、ニオウヤブマオ、ヤブマオ、ドクダミ、カナムグラ、カラムシ、イラクサ、ママコノシリヌグイ、ミゾソバ、イヌタデ、オオイヌタデ、アキノミチヤナギ、ヒメスイバ、スイバ、ギシギシ、ミズヒキ、キンミズヒキ、イヌビユ、ホソアオゲイトウ、ザクロソウ、スベリビユ、ノミノツヅリ、オランダミミナグサ、カワラナデシコ、ノミノフスマ、ハコベ、ウシハコベ、センニンソウ、ウマノアシガタ、キツネノボタン、タガラシ、アキカラマツ、ハマハタザオ、イヌナズナ、マメグンマイナズナ、ミチバタガラシ、スカシタゴボウ、コモチマンネングサ、イヌガラシ、ヘビイチゴ、キジムシロ、オヘビイチゴ、ツチグリ、ミツバツチグリ、クサネム、カワラケツメイ、ミソナオシ、コマツナギ、ヤハズソウ、メドハギ、ハイメドハギ、ネコハギ、イヌハギ、マキエハギ、ミヤコグサ、ウマゴヤシ、ムラサキツメクサ、ツメクサ、スズメノエンドウ、カラスノエンドウ、カスマグサ、ゲンノショウコ、カタバミ、ヒメハギ、エノキグサ、ニシキソウ、コニシキソウ、コミカンソウ、ヒメミカンソウ、ヤブガラシ、オトギリソウ、タチツボスミレ、コスミレ、ヒメミソハギ、アカバナ、マ

ツヨイグサ、アレチマツヨイグサ、ウド、ミツバノチドメ、チドメグサ、ヒメチドメ、セリ、ヤブニンジン、ウマノミツバ、ミツバゼリ、ヤブジラミ、シャク、フデリンドウ、ツルリンドウ、コナスビ、オカトラノオ、イチヤクソウ、ガガイモ、ヒルガオ、コヒルガオ、ハマヒルガオ、ヒヨドリジョウゴ、イヌホオズキ、ハナイバナ、キユウリグサ、クマツヅラ、キランソウ、カキドオシ、ヤマハッカ、ホトケノザ、メハジキ、ヒメジソ、ウツボグサ、アキノタムラソウ、タツナミソウ、ウリクサ、ナンバンギセル、オオバコ、ヘラオオバコ、キクムグラ、ヤエムグラ、ヨツバムグラ、クルマバアカネ、ソクズ、オミナエシ、アマチャヅル、カラスウリ、キカラスウリ、アゼムシロ、ヨモギ、ノコンギク、ヨメナ、ヤマシロギク、センダングサ、アメリカセンダングサ、ヤブタバコ、ヒメヤブタバコ、ガンクビソウ、トキンソウ、ノアザミ、タカサブロウ、ヒメジョオン、アレチノギク、オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギ、ツワブキ、ハハコグサ、ニガナ、オオジシバリ、ジシバリ、フキ、コオニタビラコ、センボリヤリ、キッコウハグマ、ノボロギク、ツクシメナモミ、アキノキリンソウ、オニノゲシ、ノゲシ、シロバナタンポポ、セイヨウタンポポ、オニタビラコ、カズノコグサ、ギョウギシバ、カゼクサ、ニワホコリ、ナルコビエ、チガヤ、チヂミグサ、チカラシバ、アゼガヤツリ、コゴメガヤツリ、タマガヤツリ、カンスゲ、カヤツリグサ、ヒメクグ、ショウブ、カラスビシャク、ツユクサ、ヤブミョウガ、スズメノヤリ、ホウチャクソウ、ヤブカンゾウ、アマドコロ、ツルボ、ハマユウ、ヒガンバナ、ニワゼキショウ、キンラン、シュンラン、ネジバナなど。

シダ類ではコモチシダ、ゲジゲジシダ、オオイタチシダ、ヘラシダ、オニヤブソテツ、イワガネソウ、イワガネゼンマイ、オオハナワラビ、フユノハナワラビ、アマクサシダ、イノモトソウ、イシカグマ、サイゴクイノデ、ヒカゲワラビ、ミツデウラボシ、イノデ、ベニシダ、ヒメクラマゴケ、ミゾシダ、ホシダ、ホラシノブ、タチシ

ノブ、オニヤブソテツ、トラノオシダ、コハシゴシダ、シケシダ、ノキシノブ、マメヅタなど。

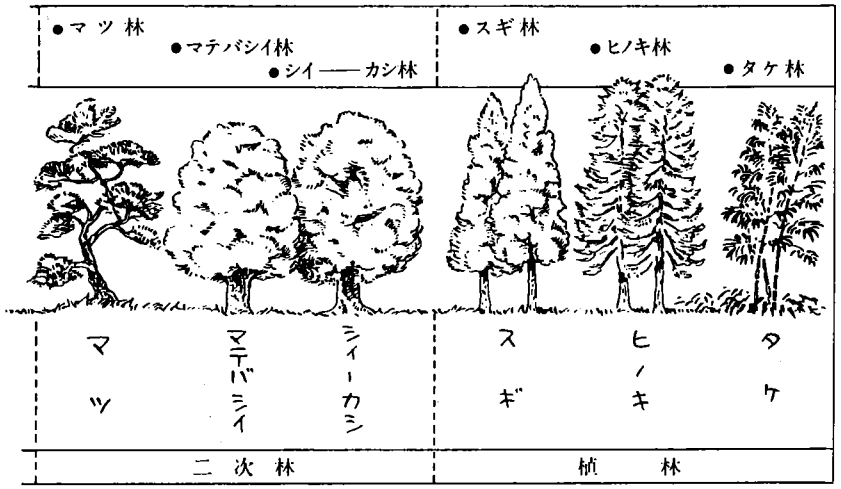
コケ類ではサナダゴケ、ナガハハリガネゴケ、キイウリゴケ、ハリガネゴケ、アオギヌゴケ、オカムラゴケ、コバノチョウチンゴケ、マルフサゴケ、ギンゴケ、ホリバオキナゴケ、ハイゴケ、コスギゴケ、ウマスギゴケ、など。

五　玄海町植物の植生図

暖地性の植物が生育する玄海町は常緑広葉樹林帯に位置するが、この樹林帯ならどこにでも生育している植物「ヤブツバキ」の名をとって、ヤブツバキクラスともいわれている。

ヤブツバキクラス林の自然林は、海岸沿いのシイ・タブ林と内陸のカシ林とに大きく分けることができる。海岸近くの平地や谷あいにはタブノキが優先し、林床にはホソバカナワラビ、イノデといった常緑性シダの優先する群落が断片的に見られる。また一般的に、尾根筋や乾燥した斜面には、海岸側ではシイ林が、内陸に入るとカシ林が見られる。

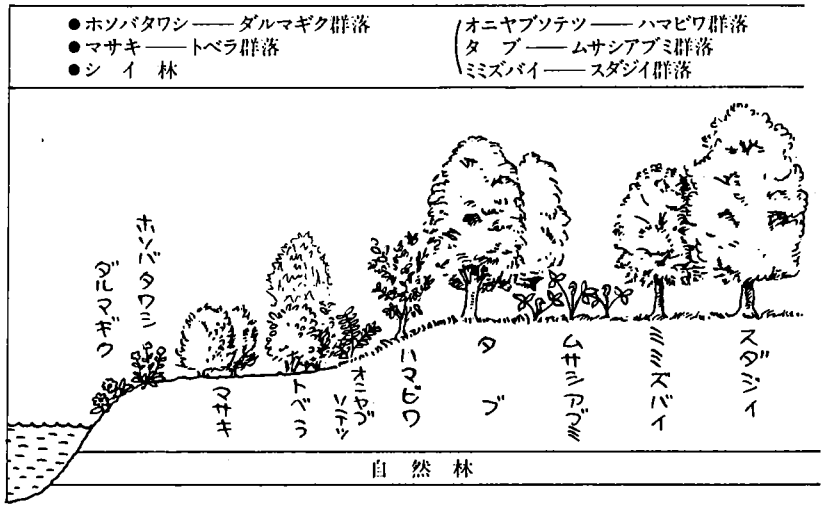
玄海町の植生図を自然林、二次林、植林の三つに分け、それぞれの植物群落を見ると下図のようになる。



六　玄海町植物方言

一般的に町内各地区とも、次のように使われている。

標準和名と科名	方　言
イスノキ（まんさく科）	サルフノキ（虫癭をサルフという。笛に使う）
イタビカズラ（くわ科）	イタブ（果実は食べられる）
イチョウ（いちょう科）	ギンナンノキ（雌木に実がなり食用にする）
イヌツゲ（もちのき科）	ヤマツゲ（網かごに入れ海底に沈めて、イカを捕る）
イヌビワ（くわ科）	イッソク（正月的射りの弓を作る。実は食べられる）
イノコズチ（ひゆ科）	モモガレ（ヒナタノコズチ、ハチジョウイノコズチと区別しない）
イワヒバ（いわひば科）	イワマツ（盆栽などの鑑賞用に使う）
ウシハコベ（なでしこ科）	ヒヨコグサ
ウラジロ（うらじろ科）	ヘゴ、モロモクなどと呼ぶ（正月飾りに使う）
ウンシュウミカン（みかん科）	昔はナカシマミカンと呼んでいた。



エビヅル（ぶどう科）
オクラ（あおい科）
オニタビラコ（きく科）
オニドコロ（やまいも科）
オヘビイチゴ（ばら科）
カエデ（かえで科）
カシ（ぶな科）
カボチャ（うり科）
カヤツバキ（つばき科）
カラスウリ（うり科）
カラタチ（みかん科）
キクタニギク（きく科）
キクラゲ（きくらげ科）
キノコ（総称）
クサイチゴ（ばら科）
クズ（まめ科）
ゲンノショウコ（ふうろそう科）
コウゾ（くわ科）

ガネブ、ヤマブドウ（果実を食べる）
ハタケレンコン（食用）
タンポポ
テングバナ（ヒゲ根をオゴといい、朔果（さくか）を鼻に付けて天狗のまねをして子供が遊ぶ）
クチナワイチゴ
モミジ
ドングリ、ドングリノキ
ボーブラ（野菜として食用）
カタイシ（実は油を採る）
ゴウリ、ゴーリゴーリ
ゲズノキ、ゲズ
ヤボギク、ヤマギク
ミミナバ（食用にする）
ナバ、例えばマツナバ、シイナバというように。
ノイチゴ、ヤマイチゴ（実を食べる）
カンネカズラ（根からでんぷんを採る。ツルはかごなどの細工物に使う）
イシャタオシ（薬用に使う）
カゴ、カゴノキ（表皮を和紙の原料とする）

コシダ（うらじろ科）
コスモス（きく科）
サツマイモ（ひるがお科）
サルトリイバラ（ゆり科）
サンゴジュ（すいかずら科）
シロダモ（くすのき科）
ススキ（いね科）
スダジイ（ぶな科）
スミレ（すみれ科）
ソラマメ（まめ科）
チガヤ（いね科）
トウモロコシ（いね科）
トロロアオイ（あおい科）
ナガバキイチゴ（ばら科）
ナズナ（あぶらな科）
ナワシロイチゴ（ばら科）
ネズミモチ（もくせい科）
ハマヒサカキ（つばき科）

ヘゴ
アキザクラ
イモ、トウイモ、カライモ（食用）
ダゴシバ、イゲンハ（五月節句のダンゴ包みに使う）
エームシノキ（実をおもちゃの鉄砲玉に使う）
ツズノミノキ（実をおもちゃの鉄砲玉に使う）
カヤ、チガヤ
シイ、シイノキ（実は食べられる）
スモトリバナ（花をひっかけ合って遊ぶ）
トウマメ（食用）
ズバナ、オナゴガヤ（幼茎を食べて遊ぶ）
トウキビ（食用）
オーレン（和紙すきのノリとして用いる）
キイチゴ、キンイチゴ（実は食べる）
ペンペングサ、ネコノシャミセン
タウエイチゴ（実を食べる）
タニワタシ（葉は胃カイヨウの薬になる）
イソシバ、イソシバノキ

ホルトノキ（ほるとのき科）　マゴゼ、マガゼ
マテバシイ（ぶな科）　マテ、マテノキ（実は食べられる）
ムベ（あけび科）　ウベ、ウーベ（実は食べられる）
メドハギ（まめ科）　メンドウ（精霊祭りのハシを作る）
モロコシ（いね科）　トウキビ（食用）
ユズリハ（とうだいぐさ科）　ツルシバ（正月飾りに使う）
ヨモギ（きく科）　フツ（餅に入れる。モグサの原料にする）
ラッキョウ（ゆり科）　ランキョ、ダンキョー（食用）

参考文献

『佐賀生物誌　植物編』（馬場胤義編）　◆『佐賀県植物目録』（馬場胤義編佐賀植物友の会発行）　◆『佐賀の植物方言と民族』（佐賀植物友の会編）　◆『原色日本植物図鑑』（保育社）　◆『現色現代科学大事典3　植物』（学習研究社）

第四項　玄海町の海藻

はじめに

海藻は海中に生育する植物である。大別して緑藻類、褐藻類、紅藻類の三つに区分されている。ほかに海草と微小藻類の藍藻類、黄藻類（硅藻類も含む）、炎色藻類がある。

緑、褐、紅藻類の構造は簡単で、根、茎、葉の分化はあまり進んでおらず、根はただの付着器官であるだけ。陸上の植物と違って、褐色とか紅色のものが大変多い。海藻の種類は世界に数千種ありとされ、日本近海には千数十種類が知られている。

日本国民は海藻をよく利用する国民といわれている。四面海をめぐらした生活環境のため、原始の時代から海藻はいろいろと利用されてきただろう。全世界で利用されている海藻の七〇％は、日本でも生産されているという。直接、食用に、加工食品原料に、あるいは薬品、洗剤、美容剤、染め物の原料に、また布や土壁ののりとして、飼料、肥料としても広く使われている。

これらの海藻のなかで、玄海沿岸に生育し、潮干狩りの折、目に触れ、または自家用として採集するものについて、記述することにした。生活に直接結びつかない海藻は、非常に種類が多く、詳しく知る必要もないのでいくつかを略記した。これらの海藻は一般的に玄海地方では「藻」または「海草」と呼んでいる。

一　海藻の分布

海藻の分布は、日本の沿岸海域を水平に見た水平分布と、生育する海中の深度から見た垂直分布の二つに分け

られる。

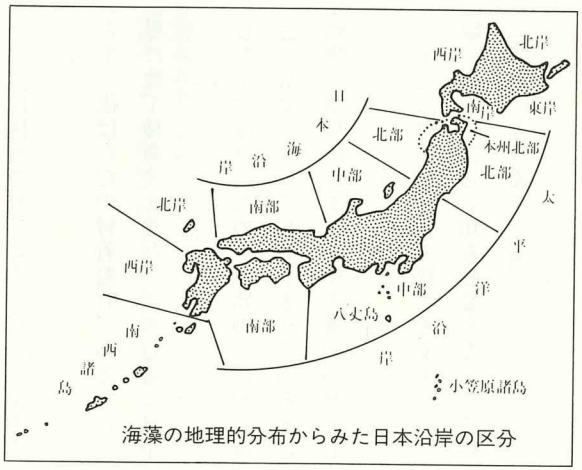
(1)水平分布　玄海海域の海藻は、鹿児島県野間岬から発し、九州西岸、北岸を通り、本州北端の津軽海峡に至る海域の海藻の種類の中に含まれ、地域によりいくらかの差はあるが、ほぼ同じ種類の分布となっている。

これは日本海流（黒潮）から分かれた対馬暖流による同一の影響下にあるためとされている。しかし本流の日本海流が流れ、東北から千島海流（親潮）が南下している太平洋沿岸にくらべると、種類全体の数はかなり少ないという。

(2)垂直分布　海藻は種類によって深い浅いの生育分布がある。その生育分布を飛沫帯（灌水帯ともいう）、潮間帯（干満帯）、漸深帯に分け、それより深い所を最深帯としている。

潮間帯は沿岸によって潮位が異なり、九州西北岸では二～五メートルである。漸深帯は潮間帯が最下部の低潮線（干満線）からさらに四〇メートル深い所までとされる。一般的に海藻がよく生育する深さは二〇メートルまでの所。潮間帯とこの深さまでが海藻が豊富な場所となっている。

潮間帯の上部にはヒトエグサ（アオサ）、アオノリ、アマノリなど岩上などに生える緑藻類が、総体的に多い。イシゲ、イワヒゲなどの褐藻類は中部石上に、ヒジキ、ウミトラノオ、アラメ、カジメ、ワカメ、ホンダワラな



海藻の地理的分布からみた日本沿岸の区分

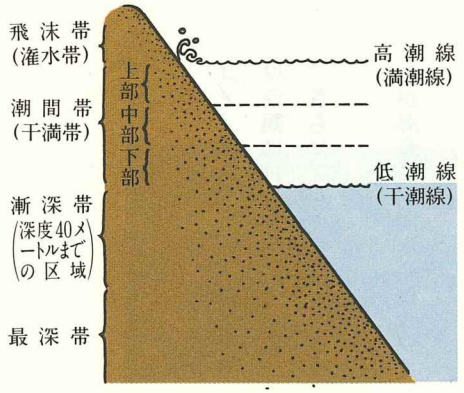
どの褐藻類は下部、低潮線あたりから漸深帯にかけて生育する。紅藻類のウミゾウメン、マフノリは上部に、オゴノリは中部から下部に、マクサ（テングサ）、マクリ（カイニンソウ）などは低潮線から漸深帯にかけ、オオムカデノリは漸深帯に生える。

二　玄海町の海藻

県水産試験場が昭和五十三年（一九七八）実施した玄海沿岸海域の藻場、干潟分布調査によると、海藻の種類は全部で、緑藻類一一、褐藻類五一、紅藻類八六、顕花植物一、計一四九種類が確認報告されている。詳細に調査を行えば、さらにかなりの数が挙がってくるのは確かとみられている。

(1)緑藻類　緑色の藻類は全世界に六七五〇種類が知られている。淡水生藻類が多く、海産のもの（海藻）は全体の約一〇％で、現在、日本で知られている種類は約二〇〇種類である。

アオサのような膜状、ミルのような袋状、アオノリのような糸状のものなどがある。多くは潮間帯の石の上に生えているが、少し深い所に生えているものもある。ボタンアオサ（写真No.1）、アオノリ、ジュズモ、シオグサ、イワツダ、ミル（No.2）などがあり、ヒトエグサ（アオサ）、アオノリ、ミルなどは食用に利用する。アオノリはせんべいの材料にもされる。



海藻の垂直分布から見た区分

(2) 褐藻類　褐色、暗褐色の色素体をもつ海藻で、全世界に約一〇〇〇種類が知られている。日本には約二三〇種類が生育する。

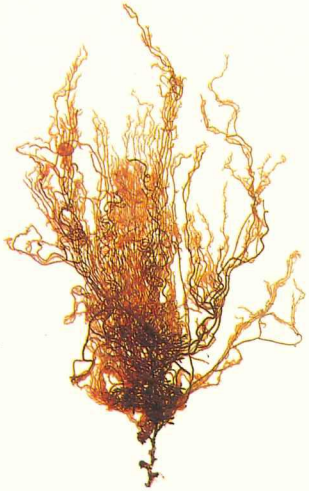
淡水産のものはきわめてわずかで、ほとんどが海産。形もさまざまで、扇の形をしたウミウチワから、外見上、根、茎、葉の区別があるワカメ類やホンダワラ類のように、複雑なつくりをもつものなどがある。

地球上のいたるところの海岸に生育するが、寒海には特に多く、しかも暖海にくらべて大形の種類が多い。北海道の釧路、根室付近から千島にかけて生育するナガコンブは、日本では最も大きい海藻、長さ二〇～三〇メートルにもなる。ちなみに世界でもっとも巨大な海藻は、褐藻類コンブ科のオオウキモという種類で、長さが六〇メートル以上、ときには一〇〇メートル以上のものもあるという。アメリカ太平洋沿岸やニュージランド沿岸などに生育する。また今まで世界でもっとも深い所から採集された海藻は、福井県若狭湾沖合の深さ一九九メートルの海底から引き揚げられた日本海だけに生育する褐藻類コンブ科に属するツルアラメ（普通長さ三〇～一〇〇センチ）といわれている。褐藻類は低潮線付近から漸深帯にかけて生育するので、これは特異な例という。

ウミウチワ（No.3）、アミジグサ、フクロノリ、モヅク（No.4）、ハバノリ、カゴメノリ（No.5）、アラメ、カジメ、ワカメ、ヒジキ、ホンダワラなどと種類が多い。モヅクは低潮線付近のホンダワラ類に付着生育する。モヅク、ハバノリ、カジメ、ワカメ、ヒジキなどは地域民には春磯の大事な食用海藻だ。さらにアルギン酸、ヨード、カリなどの原料になる種類も多い。ワカメはさかんに養殖されている。

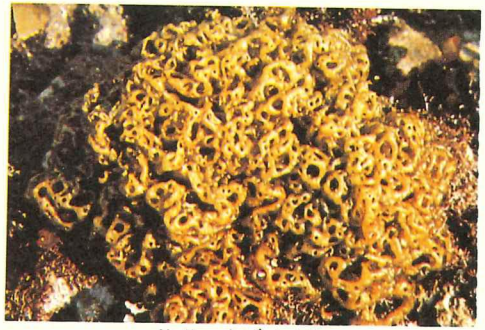
(3) 紅藻類　紅色または暗紅色の藻類で、全世界で約二五〇〇種が生育、ほとんどが海産藻、淡水産はカワモヅクなどがあるていど。日本には約六〇〇種が生育している。

九州西北部に生育しているものにはマルバアマノリ（イワノリ）、アマノリ（アサクサノリ＝No.6）、ウミゾウメ

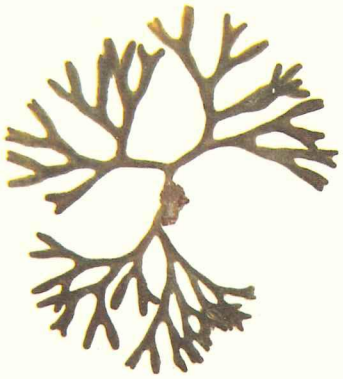


No.4　モヅク

No.1　ボタンアオサ



No.5　カゴメノリ



No.2　ミル

No.6　ひび網に繁殖したアマノリ

No.3　ウミウチワ

ン、マクサ（テングサ＝No.7）、マツノリ、マフノリ（フノリ）、トサカノリ（No.8）、オゴノリ、ツノマタ、マクリ（カイニンソウ＝No.9）など食用、衣類、壁土用ののり原料、薬品原料などと、直接人間に役立つものから、ただ岩に根づいて海中の景観を楽しませてくれるだけのものまで、ほとんどは潮間帯と低潮線近くの漸深帯に生育している。なかにはエゴノリのように、ホンダワラ類などの藻に付着、またからみついて生育しているものもある。アマノリは有明海などで広く養殖され、今や佐賀県は日本一の生産県となっている。マクリは昔から海人草といって、虫下し薬の原料。紅藻類は全国的にみても、褐藻類より種類がはるかに多い。

(4)海　草　陸上植物の稲の仲間の海草（顕花植物）で、低潮線から一〇㍍ぐらいの深さまでの海底の砂土や波静かな内湾、砂泥地などに生える緑濃い植物。日本沿岸には一五種類が知られている。

根、茎、葉の分化があり、砂泥中に根を下し、花を咲かせ実を結ぶ。アマモ（No.10）やウミヒルモなどがこの種。アマモ、コアマモは雌雄同株、エビアマモ（No.11）は異株。外津湾や仮屋湾奥に生えている。かむと甘いのでこの名がついた。

(5)その他の藻類　①藍藻類　岩の表面などによく生えている微小藻類。ぬるぬるして滑りやすい。プランクトン生活をするものもある。

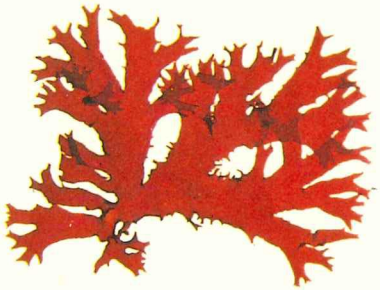
②黄藻類（硅藻類を含む）　主に水中に浮遊してプランクトン生活をしている。魚類の餌として水産上重要な役目を果たしている。

③炎色藻類　渦鞭毛藻類ともいう。大発生して海水を赤色やダイダイ色に変色させ、魚や貝類に害を与える。いわゆる赤潮の原因となる藻類である。

以上が玄海沿岸に自生する主な海藻類。その生育度は対馬暖流の影響を直接受ける離島の周辺海域がもっとも

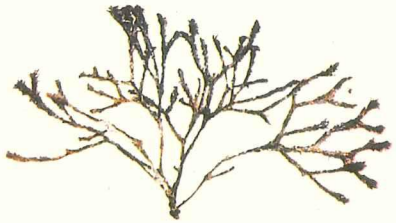
No.7　マクサ（テングサ）

No.10　アマモ



No.8　トサカノリ

No.11　エビアマモ



No.9　マクリ（カイニンソウ）

多く、次が本土側の呼子、鎮西、玄海町の地先全域。なかでも玄海町全域の地先の海岸は、陸水の影響もやや受ける関係もあって、唐津湾、伊万里湾周辺部よりはるかに種類が多く、波戸岬周辺よりも二種類多いと昭和五十三年の県水産試験場の調査で報告されている。

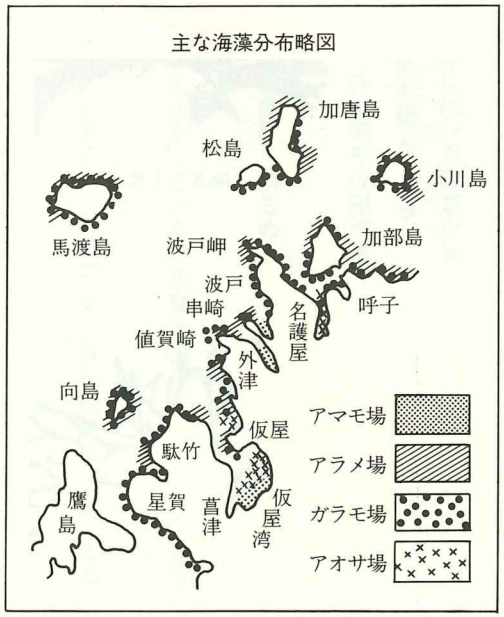
三　海藻自生場所

また玄海町海域全体からみて、種類別の藻場（海藻自生場所）が最も広いのはガラモ場（ホンダワラなどの自生場＝一五三カ所、約七八四㌶）。値賀崎では、沖出し幅六〇〇㍍、長さ六・四㌔の広さがあり、もっとも広い生育場所となっている。次がアラメ場（五七カ所、七五八㌶）、アマモ場（一一二カ所、一三四㌶）、アオサ場（二五カ所、二一㌶）の順。その他の海藻（一二カ所、六七㌶）も加え、一・七六四㌶の藻場面積となっていて、数多い海藻の種類と、このように面積も広いということは、それだけに魚類やウニ、貝類のよいえさ場、住みか、産卵場であり、まさに玄海町の地先はその最大の宝庫というわけだ。

四　利用される海藻

次に食料その他で、もっともよく利用されている海藻類について記してみる。

(1) **アオサ**



葉状・膜状。岩面、杭などに大きな群落をつくる。おもな種類はアナアオサ、ボタンアオサ、ナガアオサ、ヤブレグサなどで、若いものを食用とする。

(2) **アオノリ**

アオサに似るが、一層の細胞層からなり、細長く繊細。磯辺の岩などに生育。

(3) **ミル**

樹枝状。枝、茎ともにほぼ同じ太さ。主に低潮線付近から漸深帯の岩礁でみられる。

(4) **モヅク**

円形状。枝は不規則に分岐し全長30㌢に達する。ホンダワラ類に付着生育。主に岩礁地帯でみられる。

(5) **カジメ**

ササの葉状。二年目以降は茎の上部に羽状の葉をもつ。漸深帯に群生。アルギン酸の原材料で、夏に採取される。

(6) **ワカメ**

中央に太い中肋があり、その左右に幅の広い葉状部がある。生長すると茎の左右にひだができはじめ、それが「めかぶ」となる。日本近海の特産で、低潮線付近から漸深帯の岩上に生育。

(7) **ヒジキ**

茎は円柱状。葉は紡錘形で少しふくらみ、その中にはガスが含まれている。根は岩の上をはって、長く伸びる。潮間帯下部の岩上に群生。

(8) **ホンダワラ**

根から伸びる一本の茎から長い枝がほうぼうに出ている。葉はへら形等で、別に小さな俵型の浮き袋をもつ。高さ一㍍以上、ときには数㍍に達し、低潮線付近から漸深帯の岩上に生育。古くから新年の飾り物、食料、または肥料として用いられ、焼くとカリウムが採れる。

(9) アマノリ

膜状で、形はササの葉に似た円型など。アサクサノリもこの一種で、これは養殖もされている。冬から春にかけて潮間帯上部によく生育する。夏には糸状に分かれ、貝殻に穴をあけ、その中で生活する。

(10) マクサ

別名テングサ。直立しており、やや平たく細い。枝は羽状に規則正しく出ている。寒天の原材料としてよく知られている。低潮線から漸深帯の岩上に生育。

五　海藻の漢字（俗字も含む）

㋐ アオサ＝石蓴、蠣菜、苔菜。アオノリ＝青海苔。アマノリ＝甘海苔。アマモ＝甘藻。別名をアジモ、モシオグサ、リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシともいう。アラメ＝荒布。

㋑ ウミゾウメン＝海索麺。

㋒ オゴノリ＝於期菜、江籬、竜鬚菜、頭髪菜。別名をオゴ、ウゴ、ウゴノリともいう。

㋓ コンブノリ＝昆布。

㋔ トサカノリ＝鶏冠菜、鳥坂苔、紅菜、赤菜、苔錦。

㋕ ハバノリ＝羽根苔。

㋖ ヒジキ＝鹿尾菜。

㋗ フノリ＝海羅、鹿角菜、布乃利、布海苔、布糊、布苔。

㋘ ホンダワラ＝馬尾藻。

㋙ マクリ（カイニンソウ）＝海人草。

㋚ ミル＝海松、水松。

㋛ ワカメ＝裙帯菜、和布。別名をメノハ。ニギメ、キシメ、メギ、メと呼ぶところもある。

参考文献

『標準原色図鑑全集』（千原光雄著保育社）◆『世界大百科事典』（平凡社）◆『学研生物図鑑海藻』（千原光雄著学習研究社）◆「佐賀県玄海沿岸海域の藻場・干潟分布調査」（佐賀県水産試験場）

第五項　玄海町の陸上動物

はじめに

玄海町内の自然環境をみると、古くから農耕が発達していたため自然林とよべる森林はほとんどなく、スダジイ、マテバシイ、ヤブツバキ、クロマツなどの二次萌芽林が、町内各地に散在しているにすぎず、したがって植物の種類数はそう多くはない。

このことは町内のみならず、東松浦半島全域や離島についてもいえることだが、それでも陸上動物を数多く観察できるということは、農地が広い面積を占めているにもかかわらず、まだ自然が残されているということであろう。

生物地理学的には、日本が大昔に何回となく大陸と陸続きになったときに、大陸からいろんな生物が日本に渡って来たと考えられている。東松浦半島も朝鮮半島と陸続きであったことから、大陸との関係を調べるには重要な地域となっている。しかし、野鳥と植物の一部を除いた生物の調査研究は、ほとんどなされていないのが実状である。そこで詳しい調査研究は将来に待つことにして、いままで何回となく採集を行なってきた町内の陸上動物（除く野鳥）について概略を記すことにした。

一　両生類

東松浦半島台地に位置しているために、町内の水系は源流を持たぬ流れのゆるやかな河川のため源流性の両生類は分布していないが、町内各地に大小さまざまの農業用溜池（ためいけ）が散在しているので、止水系の両生類は数多い。

(1) カスミサンショウウオ（写真No.1）

町内各地の溝や水たまり、小さな流れなどの水のきれいな所に住んでいる。イモリに似ている。

体長は成体（親）で八～一二㌢、細長く、個体によっては背中から尾にかけて黄色い筋があるのもいる。

二～三月ごろ越冬から覚めて、清流のゆるやかな所や水のきれいな水田、浅い溝などに長さ五㌢ほどのバナナ状の透明な寒天質に包まれた卵塊（三〇～六〇卵）を産卵する。

No.1　カスミサンショウウオ

フ化した幼体（子供）はオタマジャクシによく似ているが、それより細長く、発達した鰓（えら）を持っている。十一月ごろから越冬に入る。越冬場所は水系近くの割合に湿った石の下や土の中。個体によっては水系からかなり離れているのもいる。

(2) イモリ（方言＝アカハラ）

町内各地の清流から割合に汚れた池などまで、広く生息している。

(3) ヒキガエル（ガマガエル・ワクド）

昭和四十年（一九六五）ごろまではよく町内で見かけていた。山麓部（さんろくぶ）の開発などで徐々に姿を消している。

二月には越冬から覚めて、すぐ産卵期に入る。産卵地は山麓の木漏れ日がさす、小さくて、落ち葉などが腐敗堆積している水深二〇㌢ほどの池で、次々と個体が集まって集団で産卵する。

(4) アマガエル

町内各地に普通に見られる。小型の緑色のカエルで、背面の色は環境によって著しく変化し、黄緑色、緑色、灰褐色などになり、五～六月ごろに池や水田に産卵、卵の直径は一㍉前後である。

(5) トノサマガエル（アオビッキ）

町内各地のいろいろな水系に生息し、個体数も多い。ウシガエルと同様にして食べられる。

(6) ウシガエル

名前のとおり、「モォー、モォー」と夏の夜に牛に似た声でやかましく鳴く大型のカエルで、体長は一八㌢にも達する個体もいる。

もともと日本には住んでいなかったが、大正八年（一九一九）に食用として横浜に輸入し養殖していたのが逃げ出して広まったもので、昭和四十四年ごろまでは町内にはいなかった。約五十年かかって輸入地（養殖地）から玄海町まで来たといえる。他のカエル類の二〇～四〇倍の約二万個の卵を産むことや、汚水中でも住めるために広まったものだろう。

食用ガエルともいい、食用の方法は、またの付け根から足を切り取って皮をはぎ、空揚げにして食べると美味。ニワトリのささ身に似ているが、生では寄生虫がいることもあるので注意。

(7) ニホンアカガエル（アカビキ）（No.2）

アラカシ、スダジイ、ヤブニッケイ、ヤブツバキなどの常緑広葉樹林内の小さな流れに住んでいて、個体数は多くなく、トノサマガエルよりやや小型の赤色のカエルである。

(8) ツチガエル（ドンザビキ）

町内各地に住んでいて個体数も多く、体表につぶつぶがあって独特の悪臭がある。

(9) シュレーゲルアオガエル

一見アマガエルに似ているが目の前後に黒色斑紋がない。三～四月ごろ山麓（さんろく）の水田に生息。数は少ない。

No.2　ニホンアカガエル

以上、九種類の両生類が町内には生息。県内では十二種類が分布しているので、町内でもう一種類ぐらいは発見できそう。

二　ハ虫類

(1) クサガメ

町内各地の溜池（ためいけ）や水田、河川に住んでおり、親になると甲長が二五㌢ほどにもなる。

甲や頭の横には黄緑色の模様があり、また腋下腺（わきしたせん）から悪臭を放つ。雑食性で飼育しやすい。子供のおもちゃにされる。

(2) イシガメ

クサガメ同様に町内の池、沼、水田、河川などに住み、親になると甲長は一八㌢ほどになるが、クサガメよりやや小型。クサガメのような黄緑色模様がなく、悪臭が少ない。甲の後ろ縁はのこぎりの歯のようになっている。

(3) スッポン

町内の河川で以前はよく見かけたが、個体数がきわめて少なくなった。甲の表面が滑らかで鼻の先がとがっている。食用になる。

(4) ヤモリ（カベチョロ）

夏の夜になると、窓の外側にとまって飛来してくる昆虫類をよくたべる。

カメ類を除くハ虫類の特徴は、体表面がうろこで覆われていることであり、ヤモリも手に取って見ると、全身小さいうろこで覆われている。

(5) トカゲ

民家近くに住み、成熟個体は胴から尾にかけて美しい青色をしているが、幼体や年をとった個体は全身茶褐色で、一見、別の種類かと思える。

ヤモリやトカゲは敵に襲われると、自らの尾を切って敵から逃げる。切られた尾はしばらくの間動き回るので、敵はその動く尾を見ている。なお尾は再び生長して元通りになる。

(6) カナヘビ

トカゲに似て四本の足があるが、トカゲよりも体全体が角ばっている。体色は褐色で、胴背面に四本以上の著しい隆状があるのでトカゲと区別できる。民家の付近に住み、個体数はトカゲより少ない。

(7) シマヘビ

体重は一・五㌔ほどになる。背中は緑色がかった黄褐色で、腹部は黄色。胴背に四本、尾背に二本の黒褐色の縦しまがあるので、他のヘビと区別できる。

(8) アオダイショウ（エーグチナワ）

小鳥やネズミを好んでたべるので、よく民家の中にも侵入してくる。軒下のツバメを襲うこともあるがネズミを捕るので、農家では役にも立つ。ヘビの仲間では、一番大型で、二㍍を越す個体をよく見かける。背中は緑褐色で四本の黒っぽい縦しまがある。

(9) ジムグリ

雑木林の湿った所に住み、花ノ木から諸浦にかけての林内や日の出松の林内で目にした。目につきにくい。

背中は、黄褐色から緑色がかった淡褐色で、小さい黒点があり、頭にはっきりした四本の黒しまがある。

(10) ヒバカリ

雑木林内に住みジムグリよりもやや乾いた所を好む。個体数はジムグリより多い。背中は褐色か暗灰褐色で、成長しても五〇㌢程度。

(11) ヤマカガシ

カエルなどを好むために水田や溜池などの周辺に多い。町内に分布するヘビの中では一番不気味な感じがする種類で、緑色を帯びた褐色か暗褐色の地色に不規則な黒斑が混じっている。

毒ヘビではないが、頭部皮下をさわると黄色い液を射出する。その液が目に入って失明した人もいる。

(12) マムシ（ヒラクチ）

町内に住む唯一の毒ヘビで、他のヘビよりも頭形が三角形であるから見あやまることはない。

越冬地は、山の斜面のわずかに湿り気がある所が多い。三月下旬から四月上旬ごろに越冬から覚め、気温が上昇するまで日なたぼっこをすることがあり、その後は水田や湿地、涼しい木陰などに住み、かまれる人も少なくない。強壮剤として、焼酎漬けにしたり、干物にして焼いて食したりする。

以上のほかにシロマダラやウミヘビ類、ウミガメ類もいるのは確かである。

三　ホ乳類

(1) キュウシュウモグラ

畑など土中に住み、昆虫類やミミズを食べる。モグラは十時間もえさを食べないと死ぬ動物で、一日に自分の体重と同じ量のミミズを食べるという。「モグラ打ち」の対象獣。農家からきらわれている。

(2) キクガシラコウモリ

町内に住むコウモリの中で一番大型で頭胴の長さが七㌢ほど。昼間は岩洞や朽木のうろに集団で過ごし、夕闇ころになると、空き地や畑の上空をかなりせわしく飛びかい、蛾などを捕える。

(3) コキクガシラコウモリ

キクガシラコウモリよりやや小型で炭鉱の廃坑や山の斜面の洞に住む。数は少ない。

(4) アブラコウモリ

神社の屋根裏や小屋の天井に下がることもある。他のコウモリにくらべて耳が小さくとがってない。

(5) ニホンザル

時折、町内で見たという話もあるが、家で飼っていたものが逃げたり、飼いきれずに逃がしたものであろう。また県内では、背振、作礼、浮岳一帯に野生のサルが群をなして住んでおり、その群から追い出されたものが、逃げてきたのかもしれない。

(6) ノウサギ

しだいに個体数が増えている。有浦小学校の校庭で糞を見ることもある。

(7) カヤネズミ

頭胴長七㌢ほどで背中は黄赤色で、腹は白色。

町内各地に住み、休耕田、草原に多く、ススキなどの葉の上二〇～五〇㌢の所にこぶし大の球状の巣（一見、小鳥の巣のようにしているが球状であり区別でき、材料はススキ、カヤなどイネ科植物が主体となっている）を作る。人間には全く害を与えず、雑草の種子や昆虫を食べる。

(8) ジネズミ

頭胴長は七㌢、尾の長さ約四〇㌢。鼻先がとがってひげが生えているので、他のネズミと簡単に見分けがつく。山林や畑に住み、昼間は土中にひそみ、夜間出て昆虫類を主に食べる。

(9) クマネズミ（イエネズミ）

胴長一八㌢、尾の長さ二〇㌢程度。伸びつづける歯をすり減らすために壁、柱、衣服などをかじる害獣。

(10) ドブネズミ

頭胴長二〇㌢、尾の長さ一八㌢程度で、尾の長さが頭胴の長さより短かければこのネズミ、長ければクマネズミ。水辺を好み、溝、下水道などで見るネズミはこれである。

(11) タヌキ

畑、果樹園の近くに住み、ミカンが熟すると、うまいミカンからかじり農家を泣かせる。しかし普通は雑食性で、ネズミを好む。ショックを与えると仮死状態、いわゆるタヌキ寝入りをする。

(12) アナグマ（ムジナ）

タヌキによく似ているが、タヌキより足が短かく、前足の指が五本はっきり見える。タヌキの前足の指は四本しか見えない。タヌキより悪臭が強く、雑食性。

(13) キツネ

昔はよくいたという。夜行性でウサギ、ノネズミ、モグラなど農家にとっては害になる動物を捕食する。

(14) テン

頭胴長四五㌢、尾長二〇㌢程度。体色はやや黄色みがかった暗色で、木登りが上手、ノネズミを好む。

(15) イタチ

テンより小型。冬毛は赤褐色、夏毛はチョコレート色。ノネズミ、カエル、昆虫を捕食する。

(16) ニホンシカ

古老の話では昭和初期ごろまで町内で見かけたという。このころまで東松浦半島の各地にいたというから狩りつくされたかもしれない。

なお前記のほかにネズミ類もコウモリ類もあと数種類が町内には生息していると推測される。

四　昆虫類

地球上の動物の種類数は、一二〇万とも一四〇万種類ともいわれ、そのうちの約四分の三は昆虫類であるという。現在、町内にはどれほどの昆虫類が分布しているか推測できないが、その中でもチョウ、トンボ、セミなどについてはほぼ判明した。それらを中心に概略記してみる。

(1) 玄海町のチョウ

今までに町内に生息しているのが判明したチョウ（冬でも卵、幼虫、サナギ、成虫のいずれかで住んでいるもの）は五十二種類である。

県内には八十四種類が分布しているが、高い山もなく、町の面積や植物の種類も少ないことからみると、玄海町はチョウが少ない町とはいえないようだ。これから後、まだ何種類か生息が発見されるかもしれない。

以下記す種名の下の番号は写真番号、植物名は成虫が卵を産みつけ、卵からフ化した幼虫が食べる植物名（産卵植物、食草）

春から秋にかけて見かけるチョウ

① モンシロチョウ

キャベツ、ダイコンなどのアブラナの仲間。サナギで越冬したものは三月中旬に成虫となる。町内では普恩寺付近がもっとも早く、二月上旬ごろには成虫が見られる。

② モンキチョウ（No.3）

クローバー、ミヤコグサなど。三月下旬ごろから見かける。

③ キチョウ

ハギ、ネムノキ。五月上旬から見かける。成虫で越冬する。

④ ツマグロキチョウ

カワラケツメイ。六月上旬から見られ、成虫で越冬する。キチョウよりはねの先が黒い。

⑤ ムラサキツバメ（No.4）

マテバシイ。成虫で越冬する。

⑥ ムラサキシジミ

アラカシ。成虫で越冬。ムラサキツバメには尾があるが本種にはない。

⑦ ベニシジミ（No.5）

スイバ、ギシギシ。二月下旬から成虫を見かける。

⑧ ウラナミシジミ（No.6）

マメの仲間。春から夏にかけて少なく、秋に開花するマメ科植物がある所に多く飛んでいる。

⑨ツバメシジミ
野性のマメ科植物。三月下旬ごろから空き地や草原を飛んでいる。小型のため目につきにくい。

⑩ヤマトシジミ
カタバミ。三月下旬から道路、空き地などの地表近くを飛んでいる。小型のため目につきにくい。

⑪ルリシジミ
フジ、ハギ。三月下旬ごろからマメ科植物の近くを飛んでいるルリ色の小型チョウ。

⑫アカタテハ
イラクサ。成虫で越冬する。

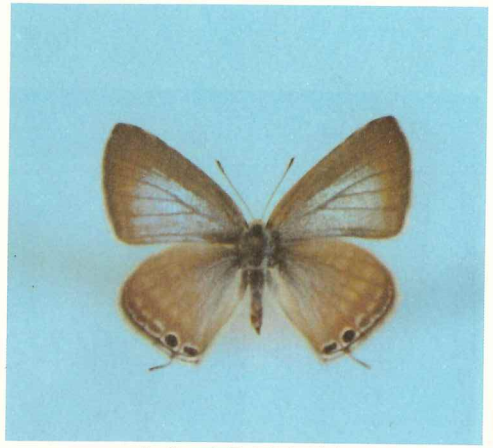
⑬ヒメアカタテハ（No.7）
ヨモギ。成虫と幼虫の二通りで越冬。幼虫はヨモギに巣を作る。暖冬の時は一月でも親になる。

⑭ウラギンシジミ
クズ。秋に多く見ることができ、はねの裏は銀色。成虫で越冬する。

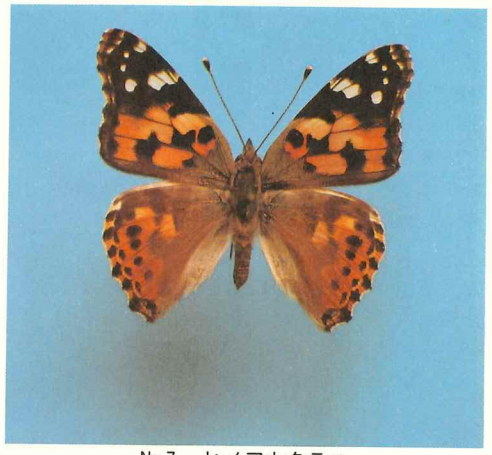
⑮イチモンジチョウ
スイカズラ。四月下旬から見かける。

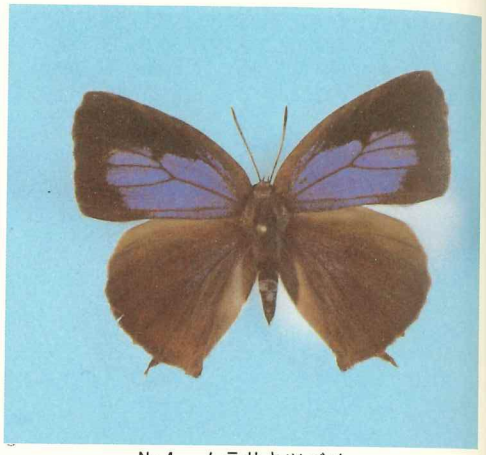
⑯コミスジ（No.8）
ハギ。四月中旬から見かける。

⑰スミナガシ（No.9）
ヤマビワ。五月下旬から見かける。数は少ない。


No.6　ウラナミシジミ

No.3　モンキチョウ


No.7　ヒメアカタテハ


No.4　ムラサキツバメ

No.8　コミスジ

No.5　ベニシジミ

⑱ツマグロヒョウモン（No.10）
スミレの仲間。三月下旬から見かける。

⑲コムラサキ（No.11）
ヤナギ。五月上旬から見かけ、ヤナギやクヌギの樹液などにカブトムシやカナブンと、一緒に集まっている。オスは紫色に輝く。

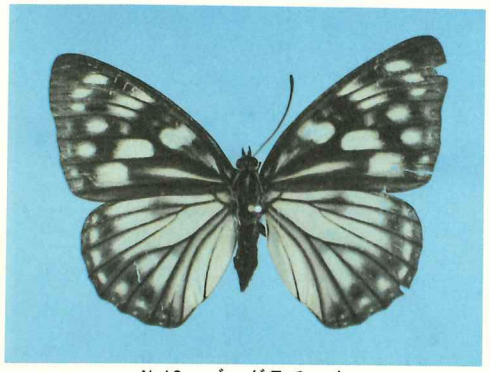
⑳ゴマダラチョウ（No.12）
エノキ。四月下旬から見かける。

㉑クロヒカゲ
タケの仲間。四月中旬から薄暗い林内などで見かける。

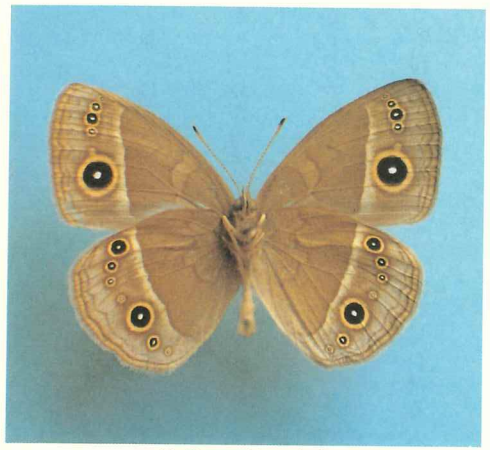
㉒ヒメウラナミジャノメ
イネ科の雑草。四月下旬から見かける。
このほかに眼状紋をはねに持ち、イネ科の雑草を幼虫が食草とするチョウに、ヒメジャノメ、コジャノメ（No.13）、ウラナミジャノメがいる。

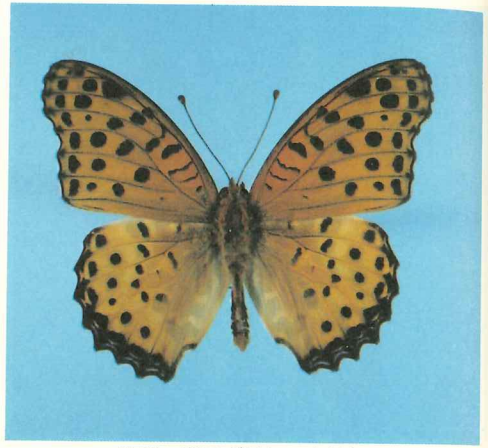
㉓キマダラセセリ
イネ科の雑草。五月下旬から草原で見かける。

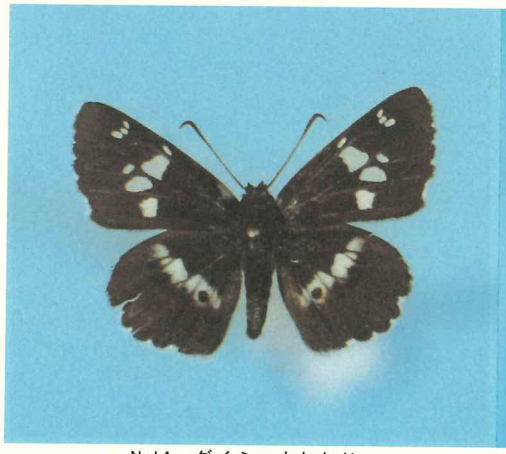
㉔ダイミョウセセリ（No.14）
ヤマノイモ。四月下旬ごろから林の近くで見かける。
このほか幼虫がイネの大害虫であるイチモンジセセリ、ハナミョウガを食草とするクロセセリがいる。


No.12　ゴマダラチョウ

No.9　スミナガシ


No.13　コジャノメ


No.10　ツマグロヒョウモン


No.14　ダイミョウセセリ

No.11　コムラサキ

㉕アゲハチョウ（No.15）
ミカンの仲間。三月下旬から見かけ、幼虫はミカンの若葉を食害する。

㉖アオスジアゲハ（No.16）
クス、タブノキ。四月上旬から、見かける。

㉗カラスアゲハ
サンショウなど。四月上旬から見かける。ノアザミ、ツツジなどの花などに飛来する。

㉘モンキアゲハ（No.17）
カラスザンショウなどのミカン科類。四月下旬ごろから見かける大型のチョウ。クサギなどの花によく集まる。

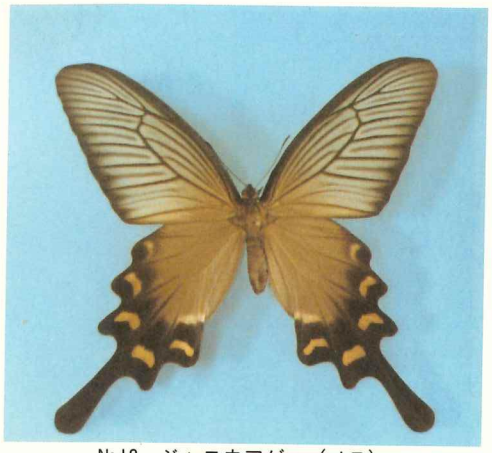
㉙キアゲハ
パセリ、ニンジンなど。三月下旬から見かける。

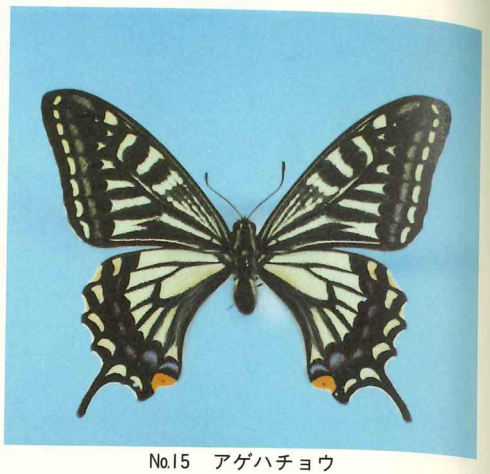
㉚クロアゲハ
ミカンの仲間。四月上旬ごろから見かける。

このほかに、ジャコウアゲハ（オスは黒色、メスは黄褐色＝No.18。四月上旬から見かける）、ウラギンスジヒョウモン（茶色の地色に黒色の紋があって、ヒョウの模様をしている＝No.19。六月上旬から草原の花によく集まる）、キタテハ、ルリタテハ、サトキマダラヒカゲなどがいる。

成虫で越冬するチョウ

キチョウ、ツマグロキチョウ、ムラサキツバメ、ムラサキシジミ、ウラギンシジミ、キタテハ、ルリタテハ、

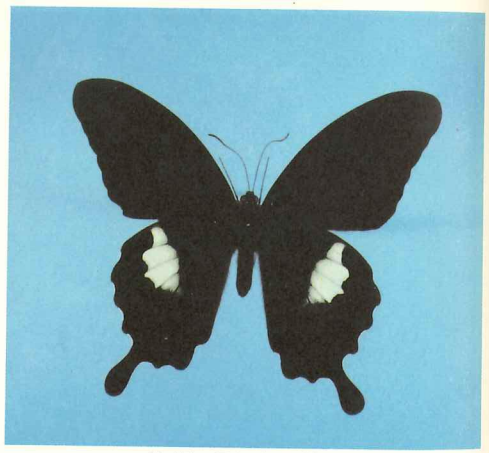

No.18　ジャコウアゲハ（メス）


No.15　アゲハチョウ

No.19　ウラギンスジヒョウモン

No.16　アオスジアゲハ

No.20　ミカドアゲハ


No.17　モンキアゲハ

アカタテハ、ヒメアカタテハ、イシガケチョウの十種類。小春日和には飛び交うこともあり、枯草の中や軒下などが越冬場所。

珍しいチョウ

㉛ ミカドアゲハ（No.20）

南方系のチョウ。国内でも珍しく、県内では別図の個所からだけ採集された。その数も少ない。町内からは昭和四十四年（一九六九）五月十一日、一雄だけ採集。昭和六十一年有浦小のタイザンボクに幼虫が発生した。

㉜ イシガケチョウ（No.21）

昭和五十五年（一九八〇）までは県内でも珍しい種類であったが、その後増えはじめ、町内でも同五十八年秋ごろから各地で見かけるようになった。

㉝ ツマキチョウ（No.22）

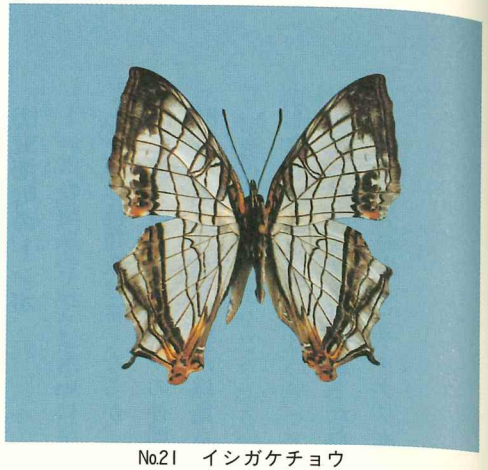
三月中旬から五月までの間、山間部の畑などで見かける小型のチョウ。はねの先がオレンジ色。（メスにはない）

このほかにアオバセセリ、コチャバネセセリ、ホソバセセリ、チャバネセセリ、ナガサキアゲハ、ゴイシシジミ、シルビアシジミ、サツマシジミ、アサギマダラ（No.23）も分布している。

迷チョウ

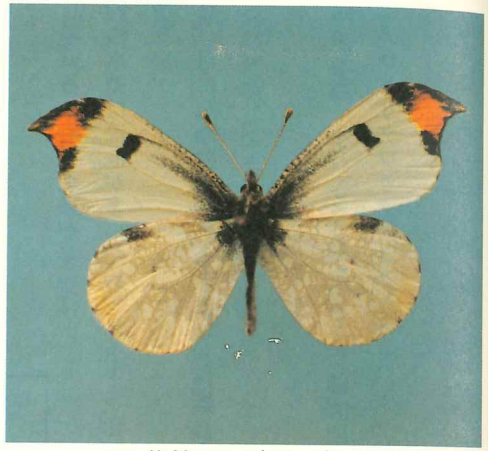
沖縄や台湾に分布しているチョウが、台風や梅雨前線の北上に伴う強い南風に乗って飛来し、ときには一時的に発生したりするが、冬の到来とともに死滅するチョウ。

No.24　メスアカムラサキの幼虫

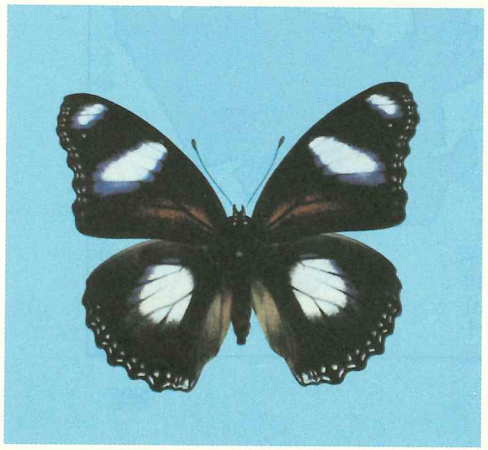


No.21　イシガケチョウ

No.25　メスアカムラサキのさなぎ



No.22　ツマキチョウ



No.26　メスアカムラサキのオス

No.23　アサギマダラ

㉞ カバマダラ

沖縄以南に分布。昭和四十一年（一九六六）九月一日、オス一頭を今村で採集。その後四十四年、四十八年にも、九月ごろ今村や浜野浦などで発見、あるいは採集された。

このほかスジグロカバマダラ、ウスキシロチョウ、アオタテハモドキを採集、メスアカムラサキ（No.24～26）の幼虫も採集された。いずれも沖縄以南に分布しているチョウで、毎年いくらかの飛来はあるとみられている。

注　昆虫に対する助数詞は匹とせず頭と使う。

(2) 玄海町のトンボ

トンボの幼虫（ヤゴ）は水中に生息しているため、水系が多いほどトンボの種類数は多くなるが、町内の水系は溜池が多いため、イトトンボ、アカトンボなどの仲間が多い半面、源流が少ないので、ヤンマの仲間が少ない。

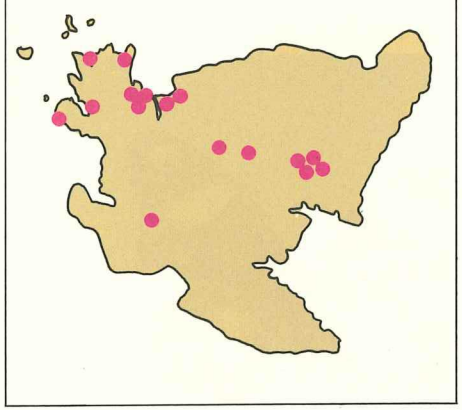
町内からは四十七種類が採集された。目にしたのも含めると五十一種類はある。県内には八十三種類が分布している。

(3) 玄海町の甲虫

町内から二百数種類採集された。

子供に人気のあるヒラタクワガタ、ノコギリクワガタ、コクワガタ、ネブトクワガタ、カブトムシは年々減少

ミカドアゲハの県内分布図



している。

原因は、幼虫が生きていける倒木が年々減っているからであろう。昭和四十年ごろまではカブトムシを一日百頭ぐらいは採ることはよくあった。

初夏の夜を楽しませてくれるゲンジボタル、ヘイケボタルも数少なくなった。原因はホタルの幼虫が食べるカワニナが農薬の使用で減ったからであろう。しかし最近、いくらか増える傾向にもある。

(4) 玄海町のセミ

① ハルゼミ

四月中旬から五月中旬まで、松林でギィーギィーと鳴く。

② ヒグラシ

七月下旬から八月中旬の早朝、夕方、夕立の後などに寂しそうにカナ、カナ、カナと鳴く。昭和五十五年（一九八〇）ごろから数を増やしている。

③ ヒルハルゼミ

七月上旬から八月中旬にかけて、ウィーン、ウィーンと鳴く。轟木地区などの雑木林に分布を広めている。このセミは一頭が鳴き出すと他のセミも鳴き出す合唱性がある。

ニイニイゼミ、クマゼミ、アブラゼミ、ツクツクホウシは町内各地に分布する。

町内には以上の七種類が分布している。

(5) 玄海町の直翅類

バッタ、キリギリス、コオロギ、ケラなどの仲間がいったい、どのくらい町内に分布しているかは不明。日本

には約百五十種類生息しているという。なかでも鳴き声を楽しませてくれるのは次の虫たち。七月上旬から十一月ごろまで聞かせてくれる。下段が鳴き声。

① ツユムシ　ジィー、ジィー
② セスジツユムシ　チチチジィーチョ
③ クツワムシ　ガチャ、ガチャ
④ タイワンクツワムシ　ギーギーギュルルル
⑤ カヤキリ　ジー、ジー、ジー
⑥ ウマオイ　スィチョ、スィチョ
⑦ ヤブキリ　ジッジッ
⑧ キリギリス　ギィーチョン、ギィーチョン
⑨ エンマコオロギ　チリリリ、チリリリ
⑩ ミツカドコオロギ　リッ、リッ、リッ
⑪ マツムシ　チンチロリン、チンチロリン
⑫ スズムシ　リーン、リーン

(6) 玄海町の蛾（ガ）

町内で約二百種類採集されている。日本には約五千種が知られ、年々未知の種類が追加されているので、町内でもさらに多くの種類が見つけられるだろう。

チョウとの違いは触角の先端が膨大せず、多くは夜間活動し、静止するときも羽を広げているなど、幼虫時代

は害虫となるものが多く、メイチュウ、ヨトウムシ、マツケムシなどはひどい害を与える。しかしカイコのような例外的な益虫もいる。

(7) 農業の害虫

列記すると、稲につく虫にニカメイガ、サンカメイガ、イネヨトウ、フタオビコヤガ、イネツトムシ（イチモンジセセリ）、イネゾウムシ、トビイロウンカ、セジロウンカ、ツマグロヨコバイなど。麦につく虫にハリガネムシ（コメツキムシの幼虫）。ダイズにはマメシンクイガ、マメコガネ。芋類にはニジュウヤホシテントウ、モモにモモシンクイガ、クリにクリタマバチ、各種果樹にテッポウムシ（カミキリムシの幼虫）、カイガラムシ各種、野菜一般にヨトウムシ、農作物全般にアブラムシ、カメムシ各種、各種の種子にゾウムシ類、花類にスリップス（アザミウマ）などと多く、昆虫の大部分は、農業面からみれば、タマゴコマユバチなどの天敵を除き、ほとんど害虫といってよい。

参考文献

第2回自然環境保全基礎調査　動植物分布図　佐賀県（環境庁　一九八一年）　◆　東松浦郡地方の食肉金亀子類の採集目録、『昆虫界』9(84):83～85（山口兵衛　一九四一年）　◆　東松浦半島でアオバセセリの発生確認、『佐賀むし通信』(83):402（吉田和充　一九八三年）　◆一九六六年にカパマダラ採集、『昆虫と自然』5(3):11（吉田喜美明　一九七〇年）　◆　佐賀県北部において採集したミカドアゲハ、『昆虫と自然』6(7):29（一九七一年）◆東松浦郡玄海町今村の蝶数種、『佐賀むし通信』(5):21。その他（一九七五年）

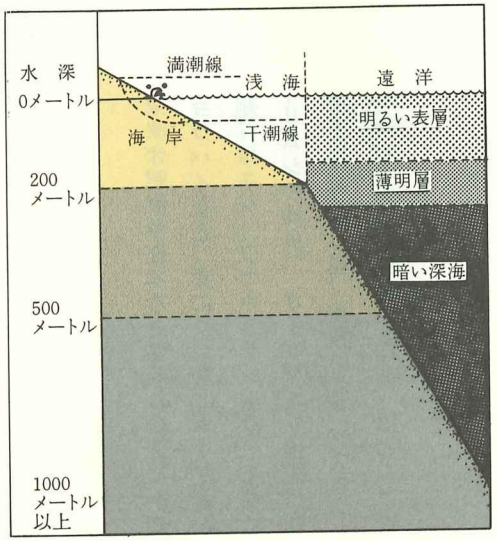
第六項　玄海町の魚類

はじめに

魚類は水に住む。地球表面の四分の三をしめるという水の世界は複雑。まず高地の水源から流れ出た水は川水となって、もろもろの流れを集め、本流となり海に入る。いっぽう、湖や池、溜池などは流れがほとんどない止水の域をつくる。

これら陸水の世界は日本ではほとんど淡水で、淡水魚が住む。河口近くでは淡水に海水が混入して、半塩水(これを汽水という)の区域をつくる。ここには多少の塩水にも生活できる淡水魚、逆に塩分の少ない水にも耐える海水魚も混住する。

海は常に潮流と干満の運動を繰り返している。海岸からの海底の深度によって、太陽の光がよく通る浅海から、その外の深海となる遠洋まで広がる。海水は普通、三～三・五%の塩分を含んでいる。ここに住むのが海水魚。このなかには、陸地近くに住む沿岸魚、広い沖合で生活する大洋魚、暗黒の深海に住む深海魚とあって、それぞれの海域で



特徴ある生活をしている。寒帯、温帯、熱帯の地域区分でもほぼ同様だ。

現在、地球上に住む魚の種類は約二万六〇〇種、日本に産しているのが約二〇〇〇種といわれている。この二〇〇〇種のうち、玄界灘海域に生息する魚種は約六〇〇種とみられている。玄海町の海域に住み、釣りや網などで漁獲する一般的な魚と有浦川などに季節的に上ってくるいくつかの淡水魚について魚種をあげてみた。

一　玄海町の海水魚

玄海町の海岸は外津、仮屋湾と、この二つの入り江を結ぶ海に落ち込む玄武岩、砂岩の崖からなり、玄界灘の荒波と潮流に洗われて、干満の動きをやめることがない。

値賀崎あたりから南に続く崖や転石の岩場、戸崎から高岩鼻にかけて見られる岩礁、志礼川、有浦川、切木川の川口に出来た泥干潟、それらの間に点在する小石の転ぶ荒磯。変化に富んだ海岸線をつくっている。

これらの海岸線は、四季折々の磯釣りの好適地。また貝、ウニ、海藻などの潮干狩りの場でもある。

海岸線を離れて、値賀崎沖からトリカ崎、池崎、戸崎、平瀬、高岩鼻沖への海域一帯は船釣りの好漁場。さらに漁業者や観光遊漁船業者は外津、仮屋湾を基地にして、馬渡島周辺や長崎県境までの海域、遠くは壱岐、対馬沖までも釣りに出かける。それだけに磯釣りにしろ船釣りにしろ、魚の種類は豊富。釣り人には魅力あふれる釣り場となっている。それでも昭和三十年代(一九五五～)ごろにくらべると、魚種も漁獲量もめっきり少なくなったという嘆きを聞く。老漁業者は、乱獲、海水汚染の関係ではないかと話している。

外津、仮屋湾内の釣りにはウナギ、ハゼ、ボラなどのほかに、ベラ、カサゴ、メバル、クロダイ、キス、メジナ、クジメ、バリ、カワハギ、アジ、フグ、ゴンズイ、タナゴなどがかかる。湾外に出ると、カマス、マトウダイ、ハタ類、スズキ、ホウボウ、マダイ、オゴゼ、ゴチ、イシダイ、ブリ、イサキ、カンパチ、ヒラメ、カレイ、

イカなどがこれに加わる。昭和の中ごろまでは、外津湾奥の小島や仮屋湾の竹ノ子島あたりでも、タイやイサキが釣れていた。

さらに馬渡島あたりまでの沖に出ると、イラ、サワラ、カツオ、サバ、カラスフグ、イシガキダイ、チダイ、キダイ、コブダイ、タカノハダイ、タマガシラ、クエ、イトヨリ、ネコザメ、オオセ、ホシザメなどが季節の魚として姿を見せる。

このほか引き網漁にイワシ、エビ、シャッパ、カマス、サヨリ、トビウオ、キビナゴ、イカナゴ、コノシロなどやアンコウ、ウシノシタカレイなども顔を見せ、定置網には季節によってタチウオ、スズメダイも入ってくる。イカかごにはコウイカ、タコ、オコゼ、チヌかごには魚ではないがカニも入る。

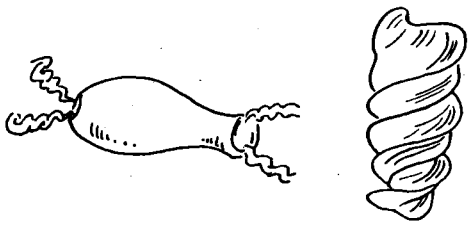
昭和四十年代ごろには魚ではないが、イタヤガイ網漁もやっていた。

これらの魚種のほかに磯釣りや船釣りにあまり親しまれていない魚もいくつかあるが、右にあげた魚のうちいくつかについて、その習性などを記してみる。

(1) ネコザメ（写真No.1）

ネコザメ科。軟骨魚。前頭部が突き出し、ネコの顔に似ている。サザエでもかみくだいて食べるので、方言になった。体の背部は暗褐色、体側に約七本の幅広い横じまがある。ほとんどのサメ類が卵胎生であるのに、これとトラザメは卵生。三～五月、海底の岩の間に、大きな卵を生み落とす。刺し身、湯引き料理にする。

(2) イシダイ（No.2）



ネコザメの卵(左)・トラザメの卵(右)

イシダイ科。硬骨魚（以下同）。海岸に近い岩礁地帯に住んでいる。幼魚のときは黒い七本の横じまがあるので、シマダイとも方言で呼ぶ。歯は犬歯状から成長するにつれて鋭い臼歯群に変わる。ウニや貝など硬いものをばりばり食べる。産卵は四～七月、約二百万粒を何回かに分けて、日没前後に産卵する。

(3) マアジ（No.3）

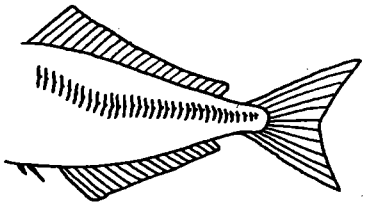
アジ科。アジ科の魚は多い。大きいのにブリ、ヒラマサ（ヒラス）、カンパチ（アカバナ、アカバラ）などがある。

仲間にはマルアジ、ムロアジ、メアジ、シマアジなど二十種類近くもある。もっとも多くとれ、釣りの対象となるのがマアジ。マアジはゼンゴ（側線につく硬い大きいウロコ）がエラのすぐ後ろから尾ビレまで続いているので仲間と区別できる。味がよいことからアジの名がついた大衆魚。家庭料理の万能魚だ。

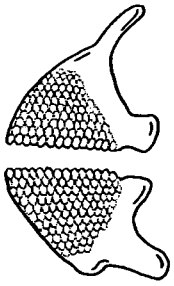
(4) マダイ（No.4）

タイ科。タイ科に属するタイ一族は日本産九種。タイ信仰のご本尊にもなっているのがマダイ。昔から祝い物に使われ、尾頭つき塩焼き、生き作りは代表料理。姿、色がよく、めでたいごろ合わせに喜ばれている。

産卵後の一時期はムギワラダイと呼ばれ、味がおちる。タイの色は海底では赤くない。体側の濃い青の



マアジのゼンゴ



イシダイの歯

小点だけが光って見える。日光にあたって赤く見える。さかんに養殖されている。

(5) クエ（No. 5）

ハタ科。仲間にアカハタ（アカハラ）、キジハタ（アッコ）、マハタ（タカバ）などがいる。昼間は岩陰にかくれ、主に夜活動する。大きいのは一㍍を越す。美味な高級魚。唐津くんちのアラ料理は有名。

(6) クロダイ（No. 6）

タイ科。三歳魚までは雌雄両性、四歳魚になって雄と雌とにはっきり転換、多くは雌となって成熟する。低塩分の汽水域でも生息。釣りの人気魚。

(7) メジナ（No. 7）

メジナ科。似た魚にクロメジナがいる。産卵期は三～七月。クロメジナは十～十二月。人気のある釣り魚。

(8) カサゴ（No. 8）

カサゴ科。仲間にメバル類がある。メバルと同様に卵胎生。一腹に子魚を一万から一万五〇〇〇匹生む。十二月から四月にかけ、何回かに分けて出産。エサに食いつきがよいので釣りファンの愛好魚。方言のアラカブは「荒頭」から。メバルは「目張る」からという。

(9) アイナメ（No. 9）

アイナメ科。似たものに同じ仲間のクジメがいる。雄は海藻の茎に付着した卵塊を保護するが、雌雄ともに食べることもある。磯釣りの対象魚。

(10) ササノハベラ（No. 10）

No. 5　クエ

No. 1　ネコザメ

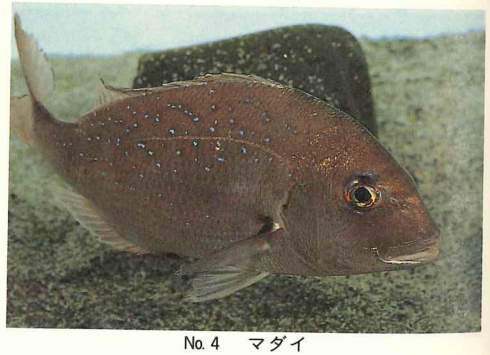
No. 6　クロダイ

No. 2　イシダイ

No. 7　メジナ

No. 3　マアジ

No. 8　カサゴ


No. 4　マダイ

ベラ科。仲間にニシキベラ、オハグロベラ、キュウセン、ホンベラなどが日本沿岸には一〇〇種類ほどいる。本種の多くは雌から雄に性転換するものが多く、昼間だけ活動し、夜は早く寝る。日中でなければ釣れない。冬は沖に出て砂に潜って冬眠する。ホンソメワケベラはハタ、タイ、ブリなどの口の中を掃除する。

(11) カワハギ（No.11）

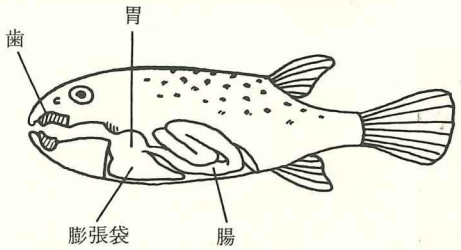
カワハギ科。体は扁平、トゲ状のウロコに覆われ、口は小さい。皮をはいで料理するので、この名がついた。背ビレとしりビレを波打たせて泳ぐ。えさの前で静止し吸い込むように捕食する。肝臓は無毒で美味。フグ肝の代用にされる。

(12) ダイナンギンポ（No.12）

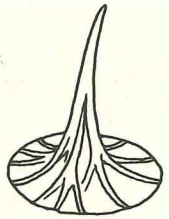
ニシキギンポ科。仲間は二〇数種もいて全国に分布する。多くは北方系。夜行性だが昼でも細い口で上手にえさを取るので釣り人に嫌われる。産卵期は十二月～四月。雌が産んだ卵を雄が体に巻いて保護する習性がある。

(13) クサフグ（No.13）

フグ科。北海道を除く全国に分布。海岸で普通に見られる小型のフグ。胃の腹面に膨張袋があり、ここに海水または空気を吸い込んで腹を大きくふくらませる。五月～七月の産卵期には日没前に波打ち際に雌雄の群

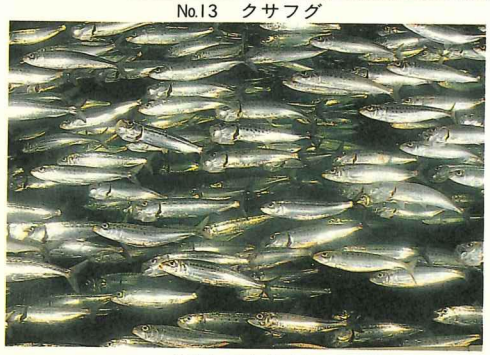


クサフグ


カワハギのウロコ

No.13　クサフグ

No.9　アイナメ


No.14　マイワシ

No.10　ササノハベラ

No.15　シロウオ

No.11　カワハギ

No.16　アユ

No.12　ダイナンギンポ

れが押し寄せ、水しぶきをあげて放卵、放精する。

肉は無毒、または弱毒だが、卵巣、肝臓、腸は猛毒、皮は強毒。シロサバフグ、クロサバフグ（カナト）以外のフグはほとんど毒を持つ。「フグは食いたし、命は惜しし」というフグの味。素人料理は危険。

(14) マイワシ（No.14）

ニシン科。体側に約七個の小黒点が一列に並ぶ。日本産イワシの種類は約三〇種。世界には約二〇〇種を産する。マイワシ、カタクチイワシ、ウルメイワシの三種が漁獲量が多い。

春生まれと秋生まれがあり、資源量が著しく変動する。昭和初期は豊漁が続き、第二次世界大戦中は大不漁。戦後しばらくして豊漁となったが、これも十年ほどで不漁となったように、極端に豊凶の波がある。不漁のためつぶれた漁業者も多い。

大衆漁としてもっとも食用にされ、養魚用のえさとしても使われる。動脈硬化や脳血栓などの循環器病予防に効果があると、効用が説かれている。

魚は分類学的には無顎類、軟骨魚類、硬骨魚類に大別される。無顎類というのは顎がなく、鰓は袋状。ヤツメウナギ類がこれに属する。軟骨魚類というのはエイ、サメの仲間のように、骨格が軟骨になっている魚類の総称。硬骨魚類というのはタイ、スズキ、ヒラメなどのように硬骨が発達している魚類の総称。すべての魚はこの三分類のうちに属していて、硬骨魚類が種類、量とも多い。

二　玄海町の淡水魚

(1) シロウオ（No.15）

有浦川のシロウオは有名。二～四月、産卵のため川を上って来て、小石の下などに産みつける。メスは

産卵後死ぬが、オスはふ化するまで卵を守る。「シロウオのおどり食い」は名物料理。

シロウオはハゼ科。腹ひれが吸盤に変形している。よく似たのにシラウオがおり、混同される。シラウオはサケ、マスに近い種族、イワシ類の幼期のものと混称されてシラスとも呼ばれることもある。両種とも寿命一年のはかない魚。

有浦川のシロウオは、元禄三年（一六九〇）には、シロウオ運上として銀二十五匁を上納している（『船宮奉行所史料』）。明治以降は諸浦集落の収入源となっていた。

(2) アユ（No.16）

有浦川が郡内でも厳木川、玉島川とともに産地。神功皇后が玉島川で、空針を使って戦勝の占いをした伝説から鮎と書く。中国では香魚。川魚の女王として淡水魚の代表的存在。

春に川を上るのをノボリアユ、夏はナツアユ、秋、川を下りはじめるとオチアユ、クダリアユと呼ぶ。上流の瀬に一匹約一平方㍍の縄張りを作り、石につく藻類を食べる。縄張りは氷河期に得た習性といわれている。アユの寿命も一年、そのため年魚という別名もある。夏の味覚として需要が多いので、各地で養殖されている。

右のほかに町内の川や溜池にはコイ、フナ、ウナギ、ドジョウ、ドンコなど食用になる淡水魚もいる。旧藩時代、今村のフナは唐津名産になっていた。（『松浦拾風土記』）

三　玄海町の漁法

玄海町の漁業は、いずれも個人経営の零細漁業で外津、仮屋の漁港を基地にしている。

漁法は釣りと網漁法が主。また仮屋湾では昭和五十二年（一九七七）から、外津湾ではその翌年から、畜養漁業

が盛んになった。タイ、ハマチの養殖がほとんどである。

網漁業では、まき網（きんちゃく網）、あぐり網（二そう船引き）、船引き網（このなかにはエビ網、サヨリ網、カナギ網などと呼ぶ網もある）、敷き網（棒受け網）、刺し網、底引き網（ナマコ網、ホタテ貝網＝キャーミ＝もこれに入る）、磯立て網（かし網）、定置網などの漁業がある。昭和初期ごろまではイワシ刺し網があった。仮屋湾では、昭和五十年ごろまで、潟引き網（地引き網）があった。

まき網、あぐり網はイワシ類、アジ類、サバ類、ブリなど。船引き網はイワシ類、エビ、サヨリ、イカナゴなども引く。敷き網もイワシ、アジ類など。底引き網にはヒラメ、カレイ類など。秋口にはブリ刺し網、冬はナマコ網漁もある。

磯立て網にはタカノハダイ、ホウボウ、メバル、オコゼ、メジナ、クロダイ、ヒラメ、カサゴ、キス、カマス、カニ、ネコザメ、アカエイなどがかかる。定置網にはアジ、イワシ、サバ、イカ類やブリ、ヒラマサ、カンパチなどのアジ科の仲間、スズキ、タチウオ、コノシロなどさまざま。一年中網に入る魚種や季節季節に回遊してくる魚種もあり豊富。

釣り漁業ではイカ、タイ、ブリなどの一本釣り漁法のほかに、はえ縄漁法もあり、ヒラメ、カレイ、ブリ、タイなどを釣る。このほかイカかご、チヌかご漁法もある。昭和五十年代中ごろには外津湾では、真珠養殖も行われていた。仮屋湾では和歌山県の大手業者が大々的に真珠養殖をしている。

昭和四十年代後半ごろは、イサキ釣りの大漁が続いた。はえ縄漁も、五十年代前半ごろが盛んだったが、その後急速に不漁期となった。第二次大戦直後ごろは手こぎ船にガスランプをつけてイカ釣りをしていた。漁具が発達していない時代でも、大漁していたと古老は懐しむ。

四　玄海の魚の方言

和名	方言
ヨシキリザメ	フカ、アオブカ（人食いザメと恐れられるのはこれ。目の間が狭いので狭目＝サメ＝といわれたという）
ネコザメ	ネコ、サージャワリ、ネコブカ
シュモクザメ	ネンブツ、カナヅチ
ホシザメ	ノウソ
ノコギリザメ	ノコブカ
カスザメ	マント、サカタ
サカタザメ	キャーメ、ケイメエ、サカタ
アカエイ	エイガ、エエガ、エータン
ツバクロエイ	ウチワ
トビエイ	トンビエイ
マイワシ	イワシ、オオバ、チューバ（昔身分のいやしい人が食べたのでイヤシの名、海から揚げるとすぐ弱るので弱しの名が、ともになまってイワシになったという）

和名	方言
コノシロ	ツナシ、ハビロ、ハダラゴ
ウルメイワシ	ウルメ、ウウメイワシ
カタクチイワシ	カタクチ、タレ
サッパ	ハダラ、ハダライワシ、エダレ、タツクリ
マエソ	エソ
マアナゴ	アナゴ
ダイナンウミヘビ	トウヘエ、ヘエ
ダツ	ダイガンジ、ナガサネ
サンマ	サザ、サイラ
トビウオ	アゴ
タツノオトシゴ	ウマ
マトウダイ	マトイオ
ボラ	生長につれてクロメ、イナ、ボラ、トド（物事の終わりをとどのつまりというのは、これから出たという）
アオカマス・アカカマス	カマス

和名	方言
ビンナガ	ビンチョウ、シビ
マグロ	ヨコク（幼）、シビ
カツオ	シマガツオ、ホンガツオ
マナカツオ	ナマリ
マルソウダガツオ	チャブクロ
マサバ	サバ
ゴマサバ	ナンキンサバ
サワラ	カマチ（幼）、サゴシ
タチウオ	タチノウオ、タチ
マカジキ	ハイウオ、カジキマグロ
バショウカジキ	バレン、ハイオ
メカジキ	スズ、ハイオ
マルアジ	アカメ、アオアジ
アカゼ	ムロアジ
カイワリ	ヒラアジ、メッキ
ヒラマサ	ヒラス
カンパチ	アカバナ（幼）、アカバラ

和名	方言
ブリ	モジャコ、ヤズ、ハマチ、ブリ（生長につれて名が変わるので出世魚と喜ばれ、脂肪が多くブリブリしているのでこの名がついたともいう）
イボダイ	シズ、モチノウオ
マトウダイ	マトイオ、バトウ
ムツ	クジラトオシ
スズキ	ハクラ（幼）
アラ	スケソウ
アカハタ	アカハラ
クエ	アラ、タカノハ
マハタ	タカバ、タカブ
ノミノクチ	アコ、アッコ
キジハタ	アコ、アッコ
イサキ	イッサキ
アカイサキ	カライッサキ
ヨコスジフエダイ	カライッサキ
コトヒキ	シマイッサキ

シマイサキ	シマイッサキ
セトダイ・ヒゲダイ	コロダイ
ソコイトヨリ	オキイトヨリ
クロダイ	チン、チヌ
マダイ	タイ・チャー（タイ類の代表魚。値賀崎にタイ女房の民話、田代山法師にもタイの逸話がある）
チダイ	チコ、チコダイ
ヒレコダイ	エビスダイ
キダイ	レンコダイ
メジナ	クロイオ、クロ
イシモチ	グチ、シログチ
イシガキダイ	チシャ
イシダイ	クロクチ、チシャダイ・シマダイなど
フエフキダイ	クチミ
タカノハダイ	キコリ、キッコリ
シロギス	キスゴ

アカアマダイ	アマダイ、クズナ
ネズミゴチ	セセラゴチ、ハナタレゴチ
イカナゴ	カナギ、コウナゴ、キビナゴ
ミシマオコゼ	ミシマ、オゴゼ
ウミタナゴ	タナゴ、ニガブナ
スズメダイ	ヤハンギー、ヤハチ
イラ	ナベ、ナメンチョ、呼子では「女中泣かせ」
コブダイ	ガン
オハグロベラ	カンフリ、ショーヤンカカ
ササノハベラ	イモホリ、ワダボリ、クサビ
ニシキベラ	シマボリ
キュウセン	シマボリ、ハマクサビ
ヤナギベラ	ミミズボリ
ハタタテダイ	ハタタテ
ニザダイ	サンノジ
アイゴ	ヤノイオ、バリ、ヤンイオ

和名	方言
マハゼ	ハゼ
キヌバリ	ホトケノイオ
カサゴ	アラカブ
オニオコゼ・ハコオゴゼ	オコゼ
アイナメ	アブラメ
クジメ	イタチメバル、アブラメ
マゴチ	コチ
ホシガレイ	モンガレイ、ウチワガレイ
メノタガレイ	メイタ、メダカカレイ、メダカ
ムシガレイ	ミズカレイ
ムラサキシタビラメ	クチゾコ
クロウシノシタ	クチゾコ、クロシタ
アカシタビラメ	アカシタ、アカクチゾコ
イヌイシタ	ウシノシタカレイ
カワハギ	チィロッポ、メンボウ・メンブ

和名	方言
ウマヅラハギ	チョウセンロッポ、ウマヅラ、メンボウ
ハコフグ	コウブグ
サバフグ	カナト、キンブク
クサフグ	フクド・チーチフグ
トラフグ	ホンブク、マフグ（味は最高、中国では陸の豚＝ブタ＝に対し、味がよいので河の豚〈河豚＝フグ〉と書く）
ホンアンコウ・フサアンコウ・アカグツ	アンコウ
カナガシラ	ホウボウ
キワダ	シビ、ハシビ、ヒレナガ
キントキダイ	ウマヌスト、アカメ
ゴンズイ	ギギュウ、ギンギョ（淡水魚のギギも同じ方言を持つ）
マンボウ	マンブ、マンボ
ダイナンギンポ	ナカチョ、ガタンチョ、ガキンチョ、略してガタなど
キス	キスゴ

五　魚名の漢字

魚の漢字名は面白い。もちろん常用漢字表にない呼び方の字ばかりとなっている。なかには漢音、呉音にない字、すなわち日本で作られた「国字」の名もある。最近では普通の辞書にないあて字の魚名さえ出ている。魚へンさえ付けておけばよいと思って作られているのかもしれない。ついでに魚でない水中動物も付記した。

㋐ アユ＝鮎・年魚。アジ＝鯵・鰺。アオサバ＝鰆。アンコウ＝鮟鱇。アナゴ＝鰻（エビともある）。魚ではないが、アサリ＝蜊・蛤。アワビ＝鮑・鮑魚・鰒（中国の古名でフク。『魏志倭人伝』に、好んで魚鰒を捕う―とある）。アザラシ＝海豹。

㋑ イワシ＝鰮・鰯。イカ＝烏賊・鯽・鯽。イルカ＝鯨・鯨・海豚。イッサキ＝鰭。

㋒ ウナギ＝鰻・鰉・鯛。ウグイ＝鯒。ウツボ（ウミヘビ）＝鰻・鱸。ウニ＝雲丹・海胆。

㋓ エッ（エソ）＝鱠・鰭・斉魚・鮴・紫・刀魚・鰣（ハスともある）。エビ＝鰕・海老。エイ＝鱣。

㋔ オゴゼ＝縢・虎魚。

㋕ カジカ＝鰍。カレイ＝鰈・鮃。カツオ＝鰹・堅魚。カマス＝魳・鮴・鰕。カナギ＝鮴（ハゼ、サメとも読ませてある）。魚ではないが、カズノコ＝鰊。カラスミ＝鱲。カブトガニ＝鬆。

㋖ キス＝鱚。キビナゴ＝鰳・鰳。ギギ（淡水魚）＝鱨。

㋗ クジラ＝鯨・鯢（メスクジラ）＝ホ乳類、昔は魚の一種と考えられていた。クラゲ＝海月。

㋘ コチ＝鮃・鯒・鮖。コノシロ＝鮗・鰶・鰤。コイ＝鯉・鱣。

㋙ サンマ＝秋刀魚。サケ＝鮭・鮏。サメ＝鮫・鮒（一般的にハゼだが、サメとも読ませてある）。サワラ＝鰆。サヨリ＝鱵。サバ＝鯖・鯖（アオサバ）。サザエ＝螺。

㋚ シャチ＝鯱（虎魚と書けばオゴゼ）。シイラ＝鰭。シビ（マグロ）＝鮪・鮪。

㋭ スバシリ＝（ボラの子）＝鯔。スズキ＝鱸・鱸（略字）。魚ではないが、スルメ＝鯣。スッポン＝鼈・鱉・鼈。

㋮ セイゴ＝鮬（タナゴとも読ませてある）

㋯ タチウオ＝太刀魚・鮕（ダツとも読む）。タイ＝鯛。タナゴ＝鰱・鯽・鰤・鯠・舒・鯛・鱮・鮬（セイゴとも読む）。タラ＝鱈。魚ではないが、タコ＝鮹・蛸・章魚・鱆（正字）

㋰ チョウザメ＝鱘。

㋱ トビウオ＝鰧。ドジョウ＝鰌・鰍・鰍。

㋲ ナマズ＝鯰・鮎・鰋・鯷（ヒシコとも読む）。ナマコ＝海鼠（海参と書けば干しナマコ）

㋳ ニベ＝鮸。ニゴイ（ミゴイ）＝鯫・鮒。ニシン＝鰊・鯡。

㋴ ハゼ＝鮗・鯊・鮀。ハヤ（ハエ）＝鯊・鮴・鮠・鰆・鰈・鰷・鮴・鮠。ハマチ＝鮈。ハス＝鰣（エソ）。ハタハタ＝鰰。ハモ＝鱧。

㋵ ヒラメ＝鮃・鮣・比目魚。ヒウオ＝鮧。

㋶ フナ＝鮒・鯽（海タナゴともいう）。ブリ＝鰤。フカ＝鱶。フグ＝河豚・鮡・鮖・鯸・鰒（中国ではアワビ）。

㋷ ボラ＝鯔・鰡。ホウボウ＝魴鮄。

㋸ マナカツオ＝鯧。マス＝鱒。マグロ（シビ）＝鮪・鮥。

㋹ ミゴイ（ニゴイ）＝鯫・鮒。

㋺ ムツ＝鯥。ムロ・ムロアジ＝鯵。

㋻ メザシ＝鰯・鰕（加工品）・目刺。メバル＝鰍。

㋼ ヤズ＝鰕・鮟・鮟。

㋽ 魚ではないが、ワニ＝鰐。

普通の辞書にはないが作られたような字の魚名。殊に松浦地域に残る江戸期の古文書や、石造物の銘に見える。

アラ＝鯒。イサキ＝鯖。イルカ＝鯨。エイ＝鱏。カサゴ＝鮭。カマス＝鮗。キビナゴ＝鰳。コチ＝鰈。スケソウタラ＝鱈。ヒウオ＝鮧。ムロアジ＝鯵。メバル＝鰍。ヤズ＝鰕・鮟・鮟。

六　魚にまつわることわざ

秋サバ嫁に食わすな
網にかかった魚
網も破らず魚も洩らさず
イワシ網へタイが掛かる
イワシで精進落ち
イワシの頭も信心から
イワシの頭よりタイの尾につけ
イワシはアユにまさる
井戸のフナ
魚多く泳ぎ出るは雨の兆し
魚岸に集まるは晴るる兆し
魚心あれば水心
魚と水
魚飛んで水の上に躍るは風雨の兆し
魚千里
魚の夢を見れば風邪をひく
魚はタイ、腐ってもタイ
魚を食うなら頭付き
うちのタイより隣のイワシ
ウナギの寝床
ウナギ登り
ウナギは目の薬
海の魚は潮で殺せ
鱗（うろこ）雲が出るとイワシが豊漁
エビでタイを釣る
男やもめに雑魚（ざこ）たかる

女とカツオぶしは堅いほど良し
寒ブリ寒ボラ寒カレイ
カツオは刺身、刺身はカツオ
木によって魚を求む
コイの滝登り
コチの頭は嫁に食わせろ
五月のくされダイ（五月＝旧暦の五月）
桜ダイ桜ウグイ
雑魚のととまじり
サバの生き腐れ
サバを読む
水魚の交わり
俎上のコイ（俎はまないた）

タラ汁と雪道は後がよい
土用の丑の日にウナギを食えば薬になる
土用のスズキは絵に描いてなめても薬
どてら質に置いても初ガツオ
夏はカツオに冬はマグロ
逃げた魚は大きい・釣り落した魚は大きい
ネコにカツオぶし
ひょうたんナマズ
フグは悪女でタコの味
フグは食いたし命は惜しし
水清ければ魚住まず
山芋変じてウナギとなる

参考文献
『魚の図鑑①②』（岩井保著保育社）　◆『有明・玄海のさかな』（高木正人著凸版印刷株式会社）　◆『水に生きる会　会報2』（副島印刷）　◆佐賀県水産室『佐賀のさかな』（福博印刷株式会社）　◆『魚の世界』『ふるさとの魚名鑑』『魚の方言』（佐賀新聞社）

第二編　はるかなる昔